

*REVIEW OF ARCHITECTURAL DESIGN COURSE,
KANAGAWA UNIVERSITY*

RAK
vol.12





目次

・特集 重村力の足跡	1
インタビュー	2
三笠先生寄稿	12
重村力自筆年譜1946-2016	14
・2015年度学生優秀作品紹介	23
修士論文	24
卒業設計・論文	41
総評	56
全作品リスト	59
学部設計課題優秀作品	61
・NEWS	83
課外活動ほか	84
学外コンペ受賞作品	86
留学生レポート	88



photograph by Tomohiro Mikasa



「特集」重村力の足跡

今年3月、重村力先生が70歳の定年をもって、神奈川大学工学部建築学科を退職されました。また、重村先生とともに研究室を運営してきた三笠友洋先生も、本学を離れて西日本工業大学デザイン学部建築学科の准教授に着任されています。重村先生は引き続き客員教授やキャンパスデザインアドバイザーなどとして神奈川大学に関わられています。2009年の重村研究室設立以降の一つの区切りとして、今年のRAKUは重村先生の足跡をたどる特集を組みました。

巻頭の重村先生へのインタビューは、建築の教育をテーマにしています。昨今、日本の社会において様々なレベルで建築の在り方が問われています。はたして建築設計に携わる人たちの職能はどうあるべきなのか、建築教育はそれに対して何ができるのか。先生の学生時代のことから現在の建築に対する思いまで、じっくりとお話を伺っています。また三笠先生には、6年半の研究室の活動を振り返り、師である重村先生についてご執筆いただきました。そして特集後半、重村先生ご自身による長大な自筆年譜からは、一人の建築家のありようがまざまざと浮かび上がってきます。

重村力先生インタビュー

建築を学ぶ、建築を創る

聞き手=中井邦夫教授+長島明夫(編集者)|写真=qp
2016年5月12日|神奈川大学中井研究室

■ 人間形成の場としての大学

中井 今日、テーマとしては建築の教育やプロフェッションというキーワードを挙げています。ただ、そういう言葉は先生はお嫌いだということでした。

重村 教育という言葉は「教えてやる」、高いところに知識があつて低いところに流れていくみたいな、上から目線の表現でしょう。たしかに立場上、建築教育をどう考えるかというような言葉遣いはしますが、本質的にはおかしいと思う。特に大学はヒューマンディベロップメント、人間形成の場です。必ずしも学生だけでなく、教える側も同じです。だから僕なんかは大学を離れられなかったんだと思う。つまり教える側も一緒に学ぶ場がないと、僕がやっているような活動はできない。

僕が出た早稲田の吉阪隆正研究室もそうでした。吉阪さんが一生懸命つくった大学セミナーハウス(1965) [図1]もそういう理念を持っていた。大学セミナーハウスは、飯田宗一郎という同志社の事務長やICUの事務長を終えた人が60代後半になって、彼が目指してきた学校はまだできていないと思って設立したのです。飯田さんの考えでは、何かと引き換えに知識を得ることは不純であつて、単位制や卒業も不純である。授業時間内で教壇と座席という立場では、教師と生徒が触れあっていない、全人格的な交流になっていない。少数教育でなくては駄目、インタラクティブ(双方向交流)でなくては駄目。だからセミナーハウスなんです。

かつての大学はみんな共同生活をして、単位や卒業が目的ではなかったわけです。ポローニャ大学だろうと適塾だろうと、みんなそうだった。そういう理念の場をつくろうというときに、その建



【図1】「大学セミナーハウス」(1965)。八王子の丘陵地に分散配置された研究宿泊施設。写真上部にくさび形の本館。設計者の吉阪隆正(1917-80)はパリでル・コルビュジエに学んだ建築家で、早稲田大学で教鞭を執りながら、大学外の事務所であるU研究室で設計活動を展開した。後進に大きな影響を与え、1971年には吉阪門下の大竹康市・樋口裕康・富田玲子・重村力・有村桂子が象設計集団を設立。(写真提供=大学セミナーハウス)



【図2】1965年、早稲田大学入学当時の重村先生

物をつくれる建築家は誰だということになり、色々な大学が集まっていたなかで早稲田の総長だった大濱信泉が「うちの吉阪がいい」と推薦して、吉阪さんが設計をすることになった。僕はちょうど、吉阪さんがセミナーハウスの設計を始めたときに入学したんです。1年生の授業のしょっぱなから「今これをつくっています」と図面を見せられた。僕たちが、どうして上が大きいのか、不安定じゃないですかと聞いたら、「山にくさびを打ち込むんです」と言われて、変わった先生だなと思いました [図2]。

年譜にも書きましたけど、早稲田は大学に入った最初、とにかく講義が面白くない。文科系はいい講義があつたから、文学部で聞いていたりはしたんです。文科系の授業に関しては。だって吉永小百合なんかいるんだよ。

中井 それですか(笑)。

重村 それもある(笑)。だから吉永小百合なんかチラチラ見ながら授業を聞いていた。

中井 他の授業は何がよくなかったですか？

重村 授業がつまらなかつたのは、鎌倉一中もそうなんですけど、その前の徳山の小、中学校は感動的だったんです。要するに山口県は侍の価値観があり、ものすごく誇りが高い。長州人はこうじゃないといけんのじゃ、自分のことばっか考えとっちゃいけんのじゃ、というような教育。小学校6年生の授業なんて、ほとんど修身道徳みたいな感じでね。「こういう本を読んで私はこういう感動をしました」ということを先生がずっと喋っている。ところが僕たちの頃の鎌倉一中は「これは試験に出て、正解はこうだ」という感じで、求道的でない。

早稲田のつまらなさも同じで、例えば理工学部の物理学は力学と電磁気学でしょう。力学はまったく面白くない。ベクトルがこの向きで合成されてとかさ。電磁気学も本当は高度な概念がいっぱいあるのに、「これはこういうふうに解きます」みたいな授業。それでも嫌になってね。僕はその頃ぜんぜん勉強していません。いい友達たちが直前レクチャーをしてくれなかったら、単位はとれなかった。

中井 | つまり仕組みや原理に立脚しない教え方に違和感があつた。必ずしも大人数の講義形式が嫌だとか、そういうことではな





いんですね。

重村 そうそう。だって駿台予備校なんて巨大授業ですけどめちゃくちゃ面白い。今でも駿台に感謝してるのは、鈴木長十という有名な英語の主任の先生がいて、彼はあらゆる長文の英文は頭から訳せと言うんですよ。

中井 普通は逆から訳すとよいとも言いますね。

重村 彼の場合、誰々がこうした、なぜならこうだったから、そういうふうに訳しなさいと。そうすれば耳で聞いたり目で見たりした順序で理解できるというね。

中井 それは受験勉強上も有効な方法だったということですか？

重村 いや、鈴木長十とか駿台の一流講師は、これをやると東大受験に有利だとか、そんなことは言わないわけ。こうすれば英語が分かる、小説が読めるとかなんです。結果的にそれで英文読解ができるようになる。

中井 受験最優先ではない教え方なんですね。大学の設計製図の授業はどうでしたか？

重村 設計製図は、まず今井兼次さんの大多喜町役場(1959)をトレースした。単純ラーメンだけど偏心したりして、あんな特殊なものを描かせてどうするんだみたいな建築ですけど細部がすごく面白い。だからそれは一生懸命描きました。

中井 それは何年生ですか？

重村 えっと、2年かな。1年で面白かったのは、デッサンと吉阪さんの建築学概論と、尾島(俊雄)さんの建築透視図法という、パースを描く授業。デッサンは土曜日の午後ずっと、みんなでひたすら描くというだけなのだけど、それはそれで面白かったな。

中井 実際の設計課題はいかがでしたか？

重村 設計課題は2年生の最後に住宅があつて、それは面白くて。そのときのTAが当時のM1で、いい人がいっぱいいて、彼らから教わったことも目から鱗でした。それこそ最初の住宅課題のときはもう、製図室に学生が250人いる。そんなの先生には見てもらえないでしょう。あと僕は親が齋藤寅郎さんに家の設計を頼んでいたの、齋藤寅郎さんにも見てもらう。

中井 それは贅沢ですね。家庭教師みたいな感じですか。



重村 そうですね。だから大学の教育体制で教育されたのではなくて、そこから外れた場所で教わっている。

吉阪研も基本的に人間関係が対等なんです。最初は2年生のとき、吉阪研の大島計画[図3]を手伝った。1965年の大島の大火の後に、それこそ伊東豊雄さんたちが東北でやっているのと似ていますが、吉阪さんがとにかく大島に行って、「皆さんこれがまちづくりをするチャンスです」なんて、りんご箱の上で演説してき。で、それを手伝っているときに「会議をやりませう」と。でも僕は布団部屋みたいところで寝転がって、少年マガジンを読んでいたんです。「君は参加しないのか」と吉阪さんに言われて、「僕は学部生ですから」と答えたら、学部生かどうかなんて関係ない、ちゃんと脳があつて目があつて手があつて足があるだろう、一緒に来なさいと。とにかくそういう教育だから、すべて対等な関係になるわけです。上下関係なく意見が出せる。そのうち、「重村、お前もう課題やってるだろ。見せろ」なんて先輩が言い出すんですね。先輩は先輩らしく、「こういうのはこうやって描くんだ」とか教えてくれる。

中井 重村先生はもう2年生の頃から研究室に参加されていたんですね。

重村 でもまだ2年ですからね。「重村、この表を写せ」とか言われて、あの頃はコピーがないから、横に表を置いて写すわけですよ。もし図面があれば、トレペを載せてトレースする。大きいものを縮小しないといけないときには、元の図面にグリッドを引いて、もうひとつのほうにも小さいグリッドを引いて描くとか、そういう人間コピー機をやっていました。

中井 んー、その教育のあり方は素晴らしいと思いますが、重村先生ぐらい能動的な学生だったからできたということでもあるのでしょうか。

重村 能動的だったかもしれませんが。だって吉阪さんに教えてもらおうと思ったら、家の前で待っているわけです。それで朝とか夜とか、「見てください」と言う。でもそういうことは僕たちみんなやりましたよ。黒川(紀章)さんだって磯崎(新)さんだって菊竹(清訓)さんだって、みんなそうやって会いに行った。事務所に言うと「先生は今忙しいですから」なんて言われるから、「いや、



【図3】吉阪隆正を中心とするDISCONTグループによる大島元町復興計画(1965)。図面のタイトル下に、「市街の骨を都で造ってくれたが、町民の努力によって創る肉と化粧の提案。」の文字。(図面出典=『DISCONT 不連続統一体——吉阪隆正+U研究室』アルキテクト編、丸善、1998年、p.483)

僕は外で待たせていただきます」つてね。

中井 そんな学生、今はいませんね。そういう大学のあり方は、今の学生たちにはギャップがあるかもしれない。

重村 まあでもね、神奈川大学の学生はだいたい口下手ですけど、自分で喋るところまでやらせると、だんだん喋るようになりますよ。そういう変化を見ていくのはやっぱり面白いですね。

あるべき建築教育のシステムとは？

長島 大学の専門教育を考えたときに、例えば機械工学やバイオテクノロジーみたいなものと、どんどん専門に特化していく。でも建築の場合は、専門に特化していくと同時に普通の人の日常にも根ざしていないといけないですよ。大学のカリキュラムだと、ある時期から構造の専門や設備の専門、環境の専門などに専門分化していきますが、でも根本的には建築はそれらが統合したものとしてある。そういったことをどう考えていらっしゃいましたか？

重村 僕が考えているのはそういう分け方ではないんです。大きく言うと学問は2系統で、つまり方法が問題か、その到達点が問題か。方法の習得だけにこだわる人、例えばコンピュー

ターによる解析技術を専門にする人は、そこに興味があって、それがどう使われるかは極端に言えばなんでもいい。でも建築のデザイン系の人たちは、どちらかという到達点のほうに興味があるんですよね。それが何を成すかに興味がある。HowでなくWhat。だからそれを大学のプログラムの中でどう混ぜるかが問題です。

僕はやはりアーキテクチャーは到達点がある学問で、そこに到達するのに際して必要なことはこういう勉強でできますよというふうに組み立てるのがいいと思う。ところが現実には我々はエンジニアリングと一緒に、要するにアーキテクチャー・アンド・ビルディングエンジニアリングという教え方をしていますから、そこで常に時間がとられる。例えば大学を5年間にして、学年がすし後のほうになって、もっと構造のことを勉強しておいたほうがいいのかと思ったら勉強できるようにしておくとかね。日本の建築教育は、ビルディングエンジニアリングと縁を切るべきではないと思う。やはり建築学部をつくるべきです。建築学部のなかに2系統3系統あって、その混ぜ合わせ方があれこれ選択できて5年制くらいになっていけば、すごくいいなあとは思いますが。

中井 それと大学の建築教育では、研究室制とスタジオ制のふたつのやり方がありますね。日本は、なかにはY-GSAのようにスタジオ制の学校もなくなはないですが、だいたい研究室制です。一方ヨーロッパやアメリカはどちらかと言うとスタジオがメイン。どちらも良し悪しがあると思いますが、冒頭のお話にありました人間形成ということになると、教員と学生たちが長期間にわたって共に学ぶ研究室制でなければできない気もします。

重村 それはスタジオに出撃していくホームみたいなものがあるればいいんじゃないのかな。スタジオはスタジオで時間ごとに進

行して。僕が4年の頃はそういう感じで、大高正人が来た、菊竹清訓が来たとかいって、そこに僕は吉阪研から行くわけです。吉阪研は吉阪研で通奏低音みたいにあって、また一貫したことをやっている。

中井 外の人間から見ると、吉阪研究室はかなり一貫した考え方を共有している集団という印象があります。それはやはり研究室で、長い時間みんなで作業やディスカッションを継続できたからこそ培われてきたものであるわけですよね。

重村 研究室制はそういう濃密さがありますね。

中井 重村先生は、研究室を出てどこかの設計事務所に就職しようとは考えられなかったですか？

重村 僕は例えば大学院は絶対に吉阪研へ行こうと思ってたわけです。でもそうすると4年生の6月に学校推薦をもらわないといけない。ところがさ、僕は勉強していなかった。しかも早稲田は定員180人なのだけど、僕の学年だけ吉阪さんの手違いで250人だったんです(笑)。僕はその150何番というひどい順位なんです。250人のうち60人ぐらいは自動的にいなくなるから、190人ぐらいのうちの150何番はかなりひどい。それで吉阪さんが調べて、「これでは推薦できません」と。なんとか推薦してくださいと、先生の家に行ったりして何度もお願いしたんですが、そのうち怒り出して、「試験を受けて入る自信がないんですか!」と言われてね。それで徹底的に勉強をして一番で入った。その勉強がなかったら僕は大学の先生になれていなかったかもしれない。

ともかく、もうすでにU研で象設計集団をつくろうとしているグループと濃い付き合いがあった。でもその頃、僕が大学院に行くつもりだなんて知らない。そうすると大竹(康市)さんが、「重村、今日は八王子の家に来いよな」とか言うんです。普段そんなこと



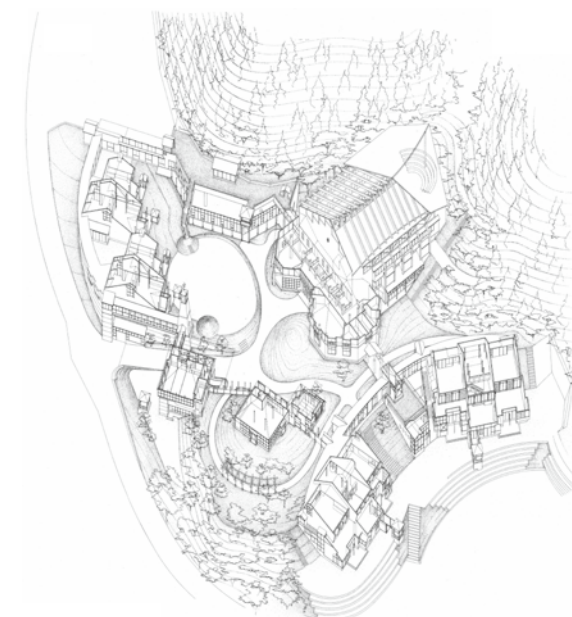
は絶対ないんですよ。彼は八王子の都営住宅で貧しく暮らしていたけど、「今夜はしゃぶしゃぶだから」って東北弁で言って、大御馳走してくれる、なんだろうと思っていたら、「重村お前な、丹下とか、菊竹とか、黒川とか、行くんじゃないだろうな?」、「鹿島とか、竹中とか、日建とか、日本設計とか、行くんじゃないだろうな?」って怖い顔で聞かれる。「行きませんよ!」と強く答えた。外に就職するなんて考えることも許されないシチュエーションだった。修士から博士に進むときも同じ。象の前身で僕も活動していたから、「俺たちが授業料でもなんでも出してやる」って言われました。実際は出ませんでしたけど。

■ 学びの場の設計

長島 例えば放送大学や通信教育は昔からありますが、ITが進化してくるとインターネットで講義が聴けるということも、もっと一般的になる可能性がありますね。でもそのときに、やはり現実の場所を共有するという体験が重要だと思うのです。大学セミナーハウスの設計が吉阪先生に依頼されたというのも、きっとそういう意識に基づいている。ただ一方で、いわゆる建築的環境が豊かでなくても、バラックみたいなところのほうみんなで熱意を持って学問が深まることもあるかもしれない。重村先生も学校建築を多く手がけられていますが[図4]、教育と場所の関係についてはどうお考えでしょうか。

重村 それはね、セミナーハウスがちゃんとした建築で、その対極にバラックがあるということではないと思うんです。ハードのクオリティーとしてはバラックでもいい。だけど、そのバラックを適切に配置する。つまりバラックでも相互の動線が生じるわけでしょう。セミナーハウスがいいと思うのは、1日に何往復かするよ

うになっている。朝にセミナー室から食堂へ行って、また戻って授業をして、またお昼に食堂へ行ってまた戻ってくる。そうやっていろんなところから来ている学生が1日3回もすれ違うとき、「こんにちは」と言っているうちに、「どこから来たの?」「日本女子大です」なんて知り合ったりする。こっちはゲーテを勉強して、こっちは俳句を勉強して、こっちは建築を勉強していたりする学生が、夜ぐらいになるともうひとつ大きい会になっているわけです。だから建築計画の本質はバラックかどうかではなくて、



[図4] 重村先生が主宰するTeam ZOOいるか設計集団が手がけた「豊岡市立弘道小学校」(1991)。木造の校舎を山の形状に沿って分散配置、2クラスで1つのワークスペースを持つオープンスクール。いるか設計集団は1978年に象設計集団の神戸アトリエとして開設された。

そういう動線を含めた空間の領域配置や行為の設定がすごく大事なんですね。極端に言えば、僕は美しくなくても配置がよければそれだけで建築はいいとも思っているんです。

長島 そういう意味では、神奈川大学の建築的環境はどうですか？

重村 ここは基本的に1個所に集めていますからね、それはなんの問題もないですが、ここがいいのは、研究室や学年で単純に分かれているのではなく、そういう属性が滲み合う空間の関係と余白をつくっていて、それが成功している。

中井 僕がいた東工大では、ある階に研究室がずらっと並んでいて、各学年ごとの製図室も分かれていて、比較的境界がはっきりしていました。だいたい研究室を出るときは鍵をかけて出るとか、そういう感じだった。ですからこの大学にきた最初は戸惑って、もうすこし区切りたいと思ったこともありました。でもしばらくすると、いま先生が言われたように、この微妙な滲み合いが却ってよいのだと思うようになりました。場としてフラットな感じがありますね。

長島 そういう大学における空間配列と、小学校などの設計ではまた考え方が違ってきますか？

重村 小学校も本当はそういうのがいいと思う。でもそこにはもうひとつ問題があって、ゆとり教育もそうですが、教師の力量にも掛かってくるわけです。インタラクティブな授業をするには、それに対応できる教師がいないと駄目なんですね。だから例えば槇(文彦)さんの加藤学園(1972)はオープンスペース型でつくられた最初期の例ですが、いま加藤学園に行くと、みんな仕切られている。槇さんはずっとそういう考えを持っていますよね。それが大成功しているのはMITのメディアラボ(2010)。あれは素晴らしい。もうみんな繋がっていますからね。繋がっているけど、ひとつひとつ溜まりにもなっている。

■ 建築のプロフェッションを考える

中井 ここまで、大学での建築教育を軸にお話を伺ってきました。ではそもそもそこで目指される建築の専門家像とは一体どういったものなのか。それは結局、建築自体をどう考えるかという

ことに通じると思いますが、まず象設計集団を起ち上げたひとつの衝動として、吉阪さんが強い作家性を持っているのに対して、もっと普通の建築をやりたいと思ったと仰っていましたよね。

重村 いや、すこし違いますね。つまり吉阪さんは世界中を飛び回っている人ですから、なんて言うのかな、僕たちが見ている感じでは、最後までかたちに責任を持たないようなところがあるわけです。だいたいいつも最初に、何をすべきかという議論を徹底的にやってエスキスをする。そこは吉阪さんはやる。でも設計ってその後もたいへんですよ、施主と話したり、なんだかんだが。吉阪さんも若い頃を見ると、施主と1週間に手紙を3往復させたりもしているのだけど、僕たちが付き合っていた50代後半の吉阪はそんなことはしない。そうすると周りのみんながかなり事務的に詰めていく。それで模型なんか作り出して、かたちがある程度決まってくると吉阪さんが帰ってくるわけです、イメージとしては。それで「これは価値観の批判がありません」とか「もっと強調したほうがいいんじゃないか」とか言って、またバシバシ変えていく。で、いちばん最後も「後はよろしく」みたいな感じで、やらない。だからそれを上手にまとめていくスタッフがいるわけです。大竹十一さんとか滝沢健児さんとか松崎義徳さんとか、その人たちは明らかにうまい。その人たちがやると、油土の泥臭いかたちが基になっているにもかかわらず、ふわっと光が溢れるような、知的で洒落た空間になっていく。ドアの枠の処理とか取っ手のデザインとか、それはすごいと思うんですよ。でもすごいと思うけど、なんだかひとつの完成されたお茶の流儀みたいなものになっちゃってるね、と。


中井 吉阪さん本人というよりも、当時のスタッフに対する意識なんですね。

重村 だからそれはもう彼らに任せて、僕たちはもうすこし社会を変えていくようなことをやっていこう、ということなんです。吉阪研のもうひとつ別の路線、大島とか都市計画で考えていたようなことをもっと建築のレベルでやる。要するにB級建築を評価しつつ、それを深めていくようなことをやろう、それが象設計集団のモットーだった。

中井 以前、いわゆる建築へのこだわりはあまりないとお聞きし

たことがあります、むしろ設計のアプローチの仕方みたいな部分は吉阪さんから引き継いだということですね。たしか、プロフェッションという言葉にも違和感があるとお話でしたが、どのような意味でしょうか。そのアプローチの仕方と関係があるのでしょうか。

重村 決してストイックな意味でそう思っているのではなくて、欲張りなんですよ。プロフェッションというとなんか狭くなる。僕らは空間を考える人だけど、ただ単に建造物を設計する人ではないというか、建造物を手掛かりにして地域社会のことも関与していく。それはまあ、「新しい建築のプロフェッションを求めている」という言い方もできるかもしれせんけどね。

中井 話が飛んで申し訳ないですが、例えば重村先生の卒業設計(1969)  は、はっきりしたプログラムもないし、強烈なイメージを持っていますよね。一方、吉阪研はもっと場所に根ざした調査分析をして、根拠をきちんと確認しながら積み上げていくやり方だと思います。卒業設計に見られる重村先生の独特の感覚と吉阪研の方法とは、どういう関係にあるのでしょうか。

重村 それは建築家のヒロイックな表現が必要な建築と、そうではない建築を分けて考えるということ？ それは「神殿か獄舎か」論になりますよね。つまり住宅や集落の原理と、国家のモニュメントの原理は違うという理屈。でもね、文化人類学の本を読むと、例えばブッシュマンたちは集落を雨季につくるんですよ。つまり乾季は安定した獲物が得られないから、みんなあちこちに採集に行く。それで雨季になって植物が育ったりすると、1ヶ所にいても木の実を採りに鳥が来たり動物が来たりするので集落を営める。それで次になにをするかと言うと、行進の道や踊りの広場

をつくるんです。だから言いたいのは、住まいによってできてくるコミュニティも、それだけで完結するのではなくて、そういう自己表現の場があって初めて完結するのではないか。本当、日本の集落を見てもそう思う。

例えば沖縄ならば、草がいっぱいあるところをモーと言います。そういう野原で遊ぶという意味で、モアシビ(野遊び)というのがある。サンシン(三味線)を持ち寄って、ある集落の男達が別の集落の女達と集まってサンシンと泡盛で盛り上がっているうちにそれぞれ闇に消えていくという、合コンみたいなことが行われた空間があるんです。近畿地方の集落を調べていてもそういう空間

間はあった。そういうものが農村舞台に発達したりもするわけです。だから僕の卒業設計も、ナショナルモニュメントや国会議事堂に該当するものではなくて、どちらかと言うとコミュニティセンターに該当する。

中井 ただ、コミュニティセンターということ自体から、ああいふ造形は出てこないですよ。いろんな地域に行って、そこでの暮らし方や領域の編成のされ方を調べるのはもちろん大事ですし、建築をつくる根拠にはなると思うのですが、それが最終的なかたちを決定づけるかと言うと、

必ずどこかでそうはならない部分がある。

重村 まあ、自動的に造形にはなりませんよね。当然ある表現的な行為が加わらないと。

中井 その部分に潜む重村先生らしさが、たぶんあるのだらうと。

重村 それは当然ですよ。描き手としての自分ですよ。だからさっき僕が言ったような概念を描くとしても、僕の手で描くわけだから、絵でもああいふふうになるし、言葉も僕の言葉になる。

中井 よく学生の課題で、理屈は完璧なのだけど実際の設計が



【図5】重村先生の卒業設計「酔ひどれ船/Le Bateau Ivre」(1969)の平面図。「これは神々の館である。いや人々の城と呼ぼうか。それぞれの空間には、固有の機能はない。人々の自己表現が、ありとあらゆる機能をここに見出し、創り出すことである。酔ひどれ船」というタイトルはランボウの詩に基づく。

今一ということがありますよね。自分で設計をしていますが、理由づけをすればするほど、どんどん建築がつまらなくなっていくことがある。それはプロフェッションの問題にも絡んでくる気がするのですが。

重村 プロフェッションの問題なのかな。どちらかというアーティストの問題じゃない？ プロフェッションは職能ということでしょう。そういうことと別に、アーキテクチャーが持っている私性という表現性がありますよね。

中井 しかし、建築が社会から期待されていることのひとつに、私性かどうかは別として、そういう表現性も含まれているとすると、そこもひっくるめてプロフェッションとも考えられるのではないのでしょうか。

重村 だから日本だとそういうふうになっていないということかな。

■ 人生を受けとめる建築

長島 例えば先ほどの学校建築のお話では、単なるかたちの問題だけでなく、運営者や管理者がどう使うかも含めてその構成が生きてくるかどうかが決まる、ということでした。ただ、比較のある時期までの建築家は、そこでもちろんなるべく良いものをつくらうとするけれども、つくった後は「はいどうぞ」と言って、それをどう使うかという問題からは分かれていたように思います。しかし最近では、設計する段階から建て主や利用者と意見を交換しながら、つくられた後なるべくうまく進むように計画が進められる傾向が強い。

重村 まあ僕たちは常にそうですけどね。一口に計画学と言っても、最適な平面や寸法を追求してそれを組み立てただけというのは、僕から言わせてもらえば計画学ではない。いかにしてユーザーを巻き込みながら長期にわたって適切に使われていくものをつくれるか、それを僕らがどう示せるかが計画なんです。でもみんなが参加してつくれば美しいものができると思っていたら大間違いという話でもある。住民参加で進めたとしても、「こういう建築のほうがあなたの美学に合う」とか、「この街に相応しいものになる、みんなが感動するものになる」とか、そういう部分は僕らが描き手として責任を持たなければならない。じゃあその

部分はどこから出てくるのかというのが、中井さんが聞きたいところなわけでしょう。それは僕は、感動によって出てくると思うんです。だから何かに感動していないと良いものは出ないと思っている。

今はなんとなく、設計事務所が編集事務所化している感じもありますよね。僕たちが象で一生懸命考えていたのは、やはり個人の事務所で出せる強烈さが、集団になったらもっと出せるようにならないと集団である意味がない、集団になって平均化してしまうなら意味がない、そういうことなんです。だからお互いの案を消しゴムで消しあっても格闘する。要するに相手が寝たら消すということもやっていた(笑)。

中井 それでよく別れようということにならなかったですね…。それは、一人だったらこれぐらいのところまででも、みんなで戦えばもっと高いところまでいけるという感じですか？

重村 高さだけではなくて、もっと違う概念が出てくるんじゃないかな。そういうことを考えてましたよ。中井さんが論評してくれたドモ・セラカント(1974) [図6]はそれが一番よく出ているのではないかと思う。

中井 そこはまさに面白いところですね。僕の個人的な考えだ



【図6】象設計集団による住宅「ドモ・セラカント」(1974)。「33坪の延床ながら、約3階分の高さをもつ立体的な構成は、敷地の斜面に沿ったものだが、それぞれの場所に身をおくと、斜面というよりも隆起や窪みや隙間を含んだ地形のようなものによって、いたるところに個性的な場所がつけられていることが実感された」(中井邦夫「空間の文化性」『住宅70年代・狂い咲き』エクスナレッジ、2006年、写真出典＝同書p.121)。



と、最終的に建築家しか提供できないものは、やはり空間ではないかと思うのです。それは先生の言われる感動であったり、あるいは心地よさであったり、いろんな言い方があると思いますが、例えば運営方法とか、こうしたらうまくできますというマネジメントの部分は、建築家でなくてもできる。そういう意味では、感動や心地よさを生み出す空間の問題をどう学生に伝えていくのが、建築教育の核心のひとつだとも思うのですが。

重村 その辺は難しい部分ですね。僕もできているのかできていないのか分かりませんが、僕は授業ではなるべくいろんなものを見せて、それぞれのときに自分が何を考えたのかを話す。それからゼミでも黒板にひたすら書きまくる。ここはこうなんだとか、だからこうなるんだとか、自分の経験をね。で、彼らも自分ですういう経験をしてもらう以外ないですよ。

中井 今日はもう最後になりますが、先生が以前コモンズ(共有地)について書かれた文章が印象に残っています。「わたしたちに与えられる建築の課題は常に特定の機能を要求されている。その建築が持つ当面の機能を十分に果たすことは当然として、その彼方に何を見るかが大切だ。建築は特定の機能をを超えて、コモンズとしての性格を強くもち、そのことでアイデ

ンティティの光を放つ新しい広場、公共的な舞台としての意味を深く胚胎したものでなくてはなるまい。」(重村力「コモンズとしての建築」『いるか設計集団』建築ジャーナル別冊、2012年)

これは先ほどの「建築は感動によってつくられる」というお話と繋がるように思うのですが、最後にまとめとして一言だけいたら。

重村 コモンズと言ったとき、普通どういふものをイメージするかというと、田舎だったら、見晴らしのいい山や浜、境内、川べり、里山や一本杉とか、そういうものがコモンズでしょう。でももうすこしビルドアップしたものもあるわけです。パリなんて歩いていてすごいと思うのは、もうなんでもおおらかに「どうぞ使ってください」という感じがします。それは日本では少ないでしょう。例えば上野の博物館前広場をイメージしても、キスでもなんでもしてくださいみたいな、そういうおおらかさはない。でもそういうことが公共の建築には求められていると僕は思うんです。最近の建築にはそこで恋を語るとか、そういうイメージがないですよ。別に恋でなくても、夕日が落ちてきて親子が和解するとか、公共建築はそういった人生を受けとめるおおらかな場にならないといけない。だから自然のコモンズとか歴史ある都市が持つ日常空間、そういうものに匹敵するような建築にしたい。そういうことですね。





神奈川大学を離れて2ヶ月が過ぎた。重村研究室での思い出やその教育のあり様について書けということだけど、実のところまだうまく振り返ることができないでいる。新しい環境でのたくさんの刺激とその対応で落ち着かないということもあるのだけれど、なんだかそれだけじゃないような気もしている。神奈川大学における重村研究室は、2009年4月に重村先生と私の後輩にあたる鄭弼溶くん(現・いるか設計集団所員)との2人体制でスタートした。半年が経過した10月に私が加わり、2011年に助教になってからは、重村三笠研究室と名前を変えた。師として仰いできた先生の傍らで一緒に教えるという立場になったわけだが、ここでは、その日々の中で、その立場を借りて、私自身が学び直していた先生のことばについて、私の理解をまとめてみたい。

繰り返されることば

重村研究室では、ゼミの中で繰り返されるいくつかの典型的なことばがある。ひとつは「君の普通は、普通ではない」ということばだ。研究室では毎年、ゼミがスタートする最初の日に、必ず学生一人一人の出身地について聞いていく。都道府県のレベルからさらに詳細に、市町村、時には字あざのレベルで地域の話聞きだしていく。その中でよく学生は、自分の家や町を「普通」と表現する。なんの語るべき特徴もないという意味で。そんな時に必ず飛ぶのがこのことばだ。そしていかにその学生が普通と表現する地域が、固有の特徴をそなえているかを伝える。それを通じて「普通」という言葉をかぶせることが、いかに地域の魅力を見えなくさせるかを教えるのだ。この一連のやりとりは、学生に、故郷に対するささやかな誇らしさを与えつつ、彼らが環境を読みとりそして創り出していく上での、基礎となる足場を与えているように思う。

もうひとつは、「自分のおばあちゃんに伝えるように話せ」ということばだ。ゼミでの学生の説明は時にわかりにくい。十分に理解していない難しい言葉をつかってみたり、形式的に言葉をつかってみたりする。そうしたときにこのことばが飛ぶ。それは複雑でわかりにくい説明をシンプルにするための、表現の方法論としての側面もあるが、むしろ思考の基礎姿勢のようなものを示しているように思う。すなわち、染み付いた自分の言葉で、生活の延長上にものを考えろ、生身の自分の生活実感と、追求する建築世界を別のものとして考えてはだめだという教えだ。

語られないことば

もうひとつ触れておきたいことばがある。左記とは反対に、語られないことばについてだ。一般論として、教員は学生を群としてネガティブに表現することが少なくないように思う。例えば、この学年はいまいちがんばりが足りない、といった表現である。教えることに熱心な教員ほど、学生に対して期待するものが大きくて、期待する状態に到達しないことに対する残念な思いを背景に、こうした表現がこぼれるのだと思う。先生は、そのような言葉で学生を表現することが、ほとんどなかったのではないと思う。野球がうまいとか、料理がうまいとか、そういった個々人のさまざまな美点を、時には欠点を含めて、設計や文章のうまさと変わらず尊んでいるように思う。だから神戸大学時代から通じて重研には多様なメンバーがいきいきと長居していたし、人生相談にもおよぶ1対1の全人格的な関係を、先生はそれぞれの学生と築かれていたように思う。

これらの印象深いことばが示すのは、先生の、人や生活や環境に対する信頼のまなざしなのだと思う。そしてそれこそが先生が教えてきて、今も伝えようとしているもっともベーシックで本質的な事柄なのだと私は理解している。発足2ヶ月がたった新しい三笠研究室では、これまでの環境との違いに戸惑うことも少なくないし、新たなテーマや形をつくっていく模索の中にあるけれど、根底にあるこの世界に対するまなざしを私自身大切にもちつづけたいと思う。



重村先生と三笠先生

- [PROFILE]三笠友洋
- 1978年 広島生まれ
 - 2000年 神戸大学工学部建設学科編入学
 - 2002年 同大学院博士前期課程進学
 - 2004年 同大学院博士後期課程進学
 - 2008年 同上修了、学位取得
 - 2008年 福岡大学工学部建築学科助教
 - 2009年 神奈川大学工学部建築学科特別助手
 - 2011年 神奈川大学工学部建築学科特別助教
 - 2016年 西日本工業大学デザイン学部建築学科准教授

重村力自筆年譜 1946-2016

1946

昭和21年2月9日、新宿の家は前年5月空襲により焼失し、疎開先である横浜市戸塚区上倉田の母方の祖父母の家で重村実・悠紀の次男として生まれる。茅葺きの大きな庄屋の家。父は元海軍中佐（軍令部通信参謀＝広報関係）、母は服飾デザイナー伊藤茂平の弟子、兄は1歳上はじめ。父方の祖父・義一は海軍少将、明治から大正にかけ英米独に駐在し、艦船エンジンを開発。軍縮条約で退役後、京城科学博物館長、1938年ソウルで客死。母方の祖父小串清一は政治家／篤農家／事業家、政友会所属の代議士だったが大政翼賛会には加わらず、戦後国政復帰後は、幣原内閣時参院議員、大蔵委員長をつとめ1961年没。戦災のため親類がこの家に多く疎開。年長のいとこたちに取り囲まれ、最若年として、馬・肉牛・乳牛・山羊・綿羊・豚・鶏・家鴨などにふれ育つ〔図1〕。祖父は鎌倉ハムや農産会社を経営。長屋門、離れなどに住む。

〔図1〕上倉田の祖父の家で、いとこたちと（左から3人目）



1948

この頃戸塚町の東海道に面した屋敷に移る。屋敷地は戸塚宿の中心、幕末の探検家の近藤重蔵の屋敷と伝承。母屋は関東大震災直後のしもた屋2階建て（アールデコ風）、門・離れがあった。犬・猫・カラス・うさぎを飼う。国道沿いなので、パッカードなどアメ車の形と名称を覚え、交通巡査のまねが得意。朝鮮戦争時、米軍が協力を求めに来たが父は辞退する。1950年頃父の上海時代の友人建築家齋藤寅雄（朝日新聞社『This is Japan』『航空朝日』編集長）に設計を依頼し、古材利用の最小限モダンリビングを柏尾川畔に建て移る〔図2〕。読む本がなく、物置の文庫や全集などの書物を読んで漢字を覚える。絵をよく描く。4歳でルーテル幼稚園に入る。病気がちで猩紅熱・百日咳・慢性気管支炎など発症し5月に退園。5歳横須賀の清泉女学院附属



〔図2〕小学2年生、戸塚の家（齋藤寅雄設計）の前で母と

小の入学試験に合格し、土曜学校に通い、「聖寵充ち満てるマリア」などの祈りや公教要理などのカトリックの学習をする。修道女（マドレ）の指導する沈黙や静粛の戒律が守れない。いやだいやだと思っていると小児結核と誤診され、土曜学校も中止になりよるこぶが、結核治療で医者に通う。犬を飼う。

1952

小児結核の疑いはれ、戸塚小学校に入学する。山羊乳の給食がいやだった。戦後で校舎と教師が足りなく、2部授業で10時には家に帰される。勉強にならないと鎌倉市立御成小学校に転校。同級の横山仁雄（後の光則寺住職）などと交友。横須賀線で通い、米兵から片言の英語を教わる。困ったことに鎌倉はみなお坊ちゃんお嬢ちゃん。山の手言葉。こちらは田舎言葉で「やるべえよ。知らねーじゃん。行くべ」などと言っていたが、鎌倉では男の子が「そうじゃない?」「それでさー」などという。ピアノやヴァイオリンを弾き、いいにおいがする彼らに無理してあわす。兄や戸塚の友達とはべえ言葉。集団の違いの切り替えを意識する。父は民間放送の起ち上げに加わり、ニッポン放送編成部長などの職に就く。

1956

10代

4月父が山口県徳山市に創業する現山口放送の開業に呼ばれ、一家で徳山に向かう。急行「雲仙」特急「さくら」などを乗り継ぐ。途中豊中の叔父宅に宿泊。大阪の土の白さに驚く。徳山は祖父が1922年に海軍燃料廠を起ち上げた土地で父は当時旧制徳山中学に通った関係で、黒神市長や徳山支藩藩主の毛利の殿様も友人。徳山では富士山が見えないことに気づいて悲しむ。せっかく鎌倉のお坊ちゃま言葉を習得していたのに山口の生徒集団の激しい言葉に驚く。「わりゃあ東京かぶれか、コン外道！しばきあげろど」。まもなくこの言葉も習得。徳山では毛利の殿様に気に入られ、蘊蓄を傾ける少年として、宴席に呼ばれ落語のレッスンをうける。高度な短波ラジオを制作する。切手収集に凝り、全国郵便展に「切手で見るドイツのインフレーション」で入賞。徳山市立徳山小学校卒業。ラジオに数回出演。

1958

徳山市立岐陽中学校入学。放送部で多くの番組をつくる。自転車と山歩きに凝る。英語教師と出光の外国人顧問の家を数回訪問、英会話。1日少年検疫所長、徳山港に入港していた世界最大のタンカー、ユニバース・アドミラル号を英語で臨検〔図3〕。成績優秀で授業に集中せず、理科・数学・社会の教師ににらまれる。一人で旅をし、倉敷の大原美術館、民芸館などを訪問し、大阪で

父と合流するなどの小冒険をする。月刊誌『ポピュラーサイエンス』『無線と実験』など愛読。日本文学全集を読みはじめる。紀州犬を飼う。



〔図3〕中学1年生、タンカーのデッキで、先頭から重村・甲板長・航海士・中学英語教師

1960

高校入学前に鎌倉で勉強させたい母の強いすすめで、中学3年新学期から、祖父の家に預けられ、鎌倉市立第一中学校へ転校するが、一部教師の教育水準の低さに落胆。祖父の隣で起居し、農事試験場や蘭の温室などに行き、植物について知る。祖父に漢詩を学ぶ。李白と杜甫を読み比べ、「どちらが好きか、なぜか」と応答する。漢文は頭から読んで意味を調べ直観で鑑賞せよ、書は絵のように自由に書けと、リベラル精神の指導を受ける。いとこたちからモダンジャズ、クラシック音楽などを学ぶ。上倉田の丘陵歩きを楽しむ。

1961



〔図4〕湘南高校時代、勉強中

神奈川県立湘南高校入学、多くの友人を得る。ラグビー部に入ろうとするが、危険だと母に泣きつかれ、隣の部室フェンシング部に入部、演劇部、生徒会活動にも参加。湘南のお坊ちゃま集団の教養の高さに驚く。多くの学生がすでに読んでいた『赤と黒』や『罪と罰』など世界文学にふれる。湘南の教師のレベルの高さにも感銘。有名歌人である国語教師、一高教授であった元結核の物理教師、作曲家、画家などの授業を受け、知的に充足される〔図4〕。多くの課外活動に参加。自由形水泳のクラス対抗10人リレーに日本泳法で泳ぎ、あきれられる。演劇部の公演『アンネの日記』の脚本、舞台装置・効果などを担当。フェンシング県新人王戦準優勝。インター杯出場、日本選手権たまたま出場。兄が浪人中、あまり受験勉強せず、もっぱら課外活動。国語教師が文学散歩をよく開き、隅田川河畔では藤村・荷風・柰太郎・芭蕉などの事蹟を歩く。3年になると同級生たちとの読書競争は、すでにカミュやラディゲやツァラやサイバネティクスなどに到達。仏文をめざしたが東大文科3類失敗。

1964

浪人を決め、駿台予備校に入学。英語教育に感服。お茶の水美術学院にも通いヌードを描く。駿台では本村正二郎（後に東急建設常務）と隣席、日比谷高校2浪組の、ませた文化にふれ、「モク、サテン、メチャ、ダントツ、スケ」などの東京ワル学生言葉を覚える。前田美波里がギターをかかえて文化学院に通うのを鈴なりに見る。本村と毎月アートシアターに通い、前衛映画を見る。彼の家の階下に住む加藤周一（文学者／医師／ブリティッシュコロムビア大学教授）と食卓をともにし、加藤からさまざまに現代国際思潮について教わる。加藤の信濃追分の別荘で夏勉強する。交流は続き、65年2月のベトナム戦争激化のきっかけとなったトンキン湾事件と続く北爆に対して、抗議する加藤周一、都留重人、中野好夫、丸山眞男らの発表した「北ベトナム爆撃に反対する声明」に呼応し私が朝日新聞に投書する。大学進学後も加藤家別荘を使った。徐々に建築に惹かれていた。駿台では日常成績は非常によく、受験勉強はせず、入試前日アラン・レネの『去年マリエンバートで』を本村と日劇文化で見る。東大理科1類失敗。

1965

本村と早稲田大学に入学。オリエンテーションで吉阪隆正主任が「君たちはどんなことでもいい、世界一になろうと思って命をかける」と演説。安藤勝男が即座に「建築以外は駄目だ」と言って吉阪と壇上で論争、武基雄が「このように諸説あるのが大学です」とまとめ、面白いと思う。ヨット部に入り、葉山・岩井・横浜・江ノ島などで年100日合宿。建築学概論で吉阪は設計中のセミナーハウス本館を説明、同級生たちが「なぜ上が大きいのです?」と突っ込む。吉阪は「山にくさびを打ち込むのです」と煙に巻く。吉阪が気になり、家を訪問。「みなで読書会を始めますが、何がいいでしょう? コルビュジエでしょうか? ギーディオンでしょうか?」と聞くと「世界で一番読まれているのは聖書です。コーランも相当読まれています。人々に読まれている本をまず読みなせんか?」と言われびつくり、少し反発しバラモン仏典を読む〔図5〕。ほかの早稲田の講義は、絶望的に退屈で、のち教師になったとき、あれだけはやるまいと思う。授業料値上げ反対闘争をリードし、理工学部中央闘争委員長になり敗北。



〔図5〕師・吉阪隆正。後年の共著『好きなことはやらずにはいられない—吉阪隆正との対話』（2015）書影より

1966

20代

クラス委員である私に、地井昭夫（後に広島大学教授）から吉阪研の大島元町復興計画の調査を打診。よるこんで行く。地井・大竹康市（後に象設計集団）・成瀬弘（後にTeam ZOOアトリエ・カバ代表、在パリ）・田中滋夫（後にダムダン代表）がいる。発見的方法について学び、以降吉阪研には行くが授業には出なくなる。66年にジャン=ポール・サルトル夫妻が来日する。加藤周一が実存主義に傾倒している君も聞いた方がいいと、帝国ホテルのフロントに入場券を託し、朝日講堂でサルトル講演を肉声で聞く。戸塚の家は都市計画にかかり、齋藤寅雄が本牧に新しい家を設計し、齋藤事務所（神山町）にも日参する、68年竣工。ヨット部やめる。帝国ホテルは2年後壊され、保存運動をするが敗北。

1967

ベトナム反戦運動を熱心に行う。早稲田祭建築展実行委員長となる。高田馬場の喫茶らんぶる2階に事務所を借りる。企業から借りた仮設資材を用いて、巨大なバビリオン25m四方高さ15mを理工学部中庭に造る。ダンスパーティや広告収入で資金を大量に集める。黒川紀章・磯崎新・宮内嘉久・川添登・栗田勇に会いに行き、招いて講演やシンポを行う。編集者に名を知られ、雑誌『建築』『新建築』『建築文化』『建築年鑑』などに匿名で書く。「群盗宣言」（『建築年鑑'67』）。大学の土地に建築を創ったこと、大学の名で資材を調達したことなどで安藤勝男主任から叱責を受ける。一方、益子に行き民芸が駄目になったことに疑問を持ち、偶然老婦人からうちのお父ちゃんに会いなさいと言われ、行くとそこは濱田庄司の家で、民芸運動の理念について話を聞き、古我知焼の壺、棟方志功の書、焼き物の火入れなどを見て感銘。濱田をその後も訪ねる。吉阪研でアムステルダム市庁舎コンペに参加。ポストモダンの走りとなる吉阪のアムス町並み建築の提案に驚く。多木浩二の事務所アルポでバイト。京都奈良倉敷に旅行。齋藤設計のプロイヤーと新数寄屋をあわせたような本牧の家に移る。

1968

最終学年になり、卒論「表現としての都市・建築」を書くためバーナード・ルドフスキーの『建築家なしの建築』を地井から教わり、原書で読み訳す。ノンセクトラジカルの人誌『遠くまで行くんだ』を佐々木幹郎・小野田襄二・立松和平らと発刊。東大日大闘争支援。東大の多くの助手・院生、日大の佐久間らと知り合う。宮内康のアトリエ設計工房を手伝う＝岡山朝日高校など製

図。当時4段の宮内から囲碁を学ぶ。日比谷野外音楽堂の反戦集会で有村桂子と知り合う（立松久昌・平良敬一・松井晴子・宮内嘉久ら同席）。

1969



【図6】卒業設計「酔ひどれ船」（1969）立面図

卒業設計「酔ひどれ船」を発表、物議を醸す【図6】。元倉真琴らと学生デザイン賞受賞。大学院修士課程進学。東京の江戸以来の構造変化を古地図と現代地図を比較し調査、『スペースモデレーター』38号に「巨大都市東京の変遷」として発表。宮内康らと状況劇場を見に行くうちに山中湖に自力建設する稽古場合宿所の設計施工を依頼される。山中湖に泊まり、「乞食城」を唐十郎・李礼仙・磨赤兒・不破万作・大久保鷹・四谷シモン・根津甚八らと建設。設計側は宮内・成瀬弘・有村桂子など。大阪万博批判に向け建築家70行動委員会を設立。雑誌『叛』を起草・発刊。シルク印刷を行い、芝公園で最初の集会（『叛』2号は練馬区立美術館で2015年展示）。紛争中の青山デザインスクールの自主講座にネオダダの石子順造・刀根康尚・篠原有司男・平岡正明らと参加。東大自主講座に招かれ布野修司・陣内秀信・三宅理一らと知り合う。

1970

新丸子に住む。有村桂子と結婚。新宿のサパークラブの結婚式で李礼仙が「フランチェスカの鐘」を歌う。東久留米市に住む。木質アパート調査始める。大竹康一・樋口裕康・富田玲子ら（後に象設計集団）とU研究室で箱根コンペ【図7】、ポンピドゥーセンターコンペを行う。



【図7】吉阪隆正「箱根国際観光センター」（コンペ応募案、1970）平面図

1971

修士論文「棲息の位相」を書く。博士課程に進学。麴町に象設計集団をつくる。三鷹市深大寺に移る。『美術手帖』2月号に「漫

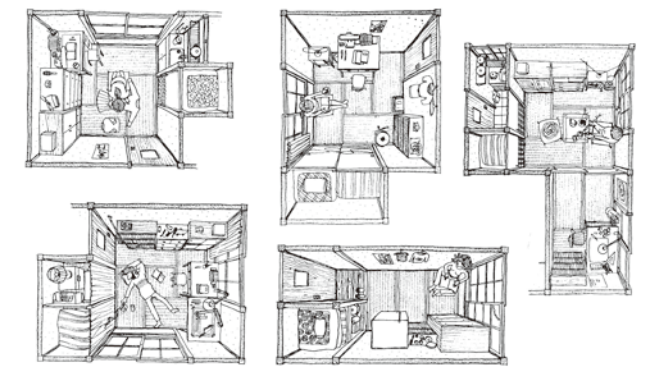
画の世界と幻の都市」を書く。東北学院大新キャンパスを設計するが実施は他社となる。波照間の碑。コザ市沖縄こどもの国設計。丸山欣也がヨーロッパから帰ってきて参加する。吉阪研で豊島区日の出町の調査を指揮する。「生活集積としての都市研究」として学会発表。東北大から上京した藤森照信と知り合う（伊藤邦昭・大竹の紹介）。

1972

この年沖縄本土復帰。恩納村基本構想を重村中心で策定。那覇市泉崎で作業。沖縄というものと生々しく出会う。名護市基本構想の依頼が象に入るが、仙台をやるので吉阪から、重村は沖縄ではなく仙台をやるように言われる。夏、井上隆や平井秀一らと愛媛県上浮穴郡柳谷村中久保集落の山村調査を始める。ひと夏、山と海の集落にこもる。高知に出て高知から仙台という長い切符を買う。吉阪、東北大=佐々木嘉彦に加え、幡谷純一・佐々木政雄・藤井敏信・田中滋夫らと「杜の都・仙台のすがた計画」に着手。杉並区堀ノ内の民家2階に移る。

1973

「現代木質アパート論」を『都市住宅』2月号に発表【図8】。象設計集団を都電面影橋近くの赤門寺境内に移転。仙台の計画を吉阪研と象の合同で仕上げる【図9】。東京都の原昭夫が象にきて、美濃部都政の東京都近隣社会環境整備計画策定を打診、大学の吉阪研でやることにする。調布市に（友人宅）ドモ・パレーラ設計。名護市土地利用基本計画策定。山原型土地利用を理論化。沖縄の集落を歩き、集落懇談会を重ねる。娘・真土果生まれる【図10】。沖縄に年100日ぐらいいる。



【図8】重村力責任編集「木質アパート―様式としての都市居住」『都市住宅』1973年2月号より（採集=東京探検隊、イラスト=和田稔）



【図9】早稲田大学吉阪研究室『杜の都・仙台のすがた―その将来像を提案する』（仙台デベロッパー委員会、編集=松井晴子、1973）



【図10】娘の真土果と杉並区堀ノ内の借家で

1974

この年から4年間東洋大学で教える。仙台が都市計画学会石川賞受賞。中野本町に引っ越す。鎌倉市に編集者の家ドモ・セラカント設計、今帰仁村の計画も始める。鈴鹿市勤労青少年ホーム設計。名護市法定都市計画策定調査。さまざまな計画法制度を学ぶ。早稲田大学21世紀の日本グループへの賞金で香港-横浜間のバイカル号で洋上研究会、吉阪と1週間船で生活。吉阪夫妻と船でワイン、ロシア料理。香港で中華料理。九龍で籐椅子を買う。

1975

マニラで吉阪・林慶豊参加のEAROPH habitatの会議があり、M・シュバイデルの助けを得て英文論文を発表。セブ・ザンボアンカ・バギオ旅行。スラムや水上住居を歩き、ゲリラとも遭遇、案内される。早大システム研講師。『都市住宅』8月号に「発見的方法=吉阪研究室の哲学と手法」を企画編集執筆。ダガダガタン・スラム改善コンペ。今帰仁村中央公民館設計【図11】。名護市21世紀の森計画。名護市東江に沖縄事務所兼住居として民家を借りる。



【図11】象設計集団「今帰仁村中央公民館」（1975）

30代

早稲田大学産業技術専修学校（現・芸術学校）専修科でも教え始める。野口雄一郎編『危機の技術』（東洋経済新報社）に「建築における現代」を書く。沖縄県北部レクリエーション基地構想の策定、サイン・インフォメーション計画を担当。『都市住宅』9月号に「トンド地区の印象」を書く。コミュニティ計画を徹底した石川市総合計画を策定（内田・佐久川）。

1977

21世紀の森実施設計、ドングリ拾いや緑化など市民参加の公園

計画、道の駅の原型と自負するロードステーション構想、ハワイ州計画行政の調査（平井）。今帰仁村中央公民館が、芸術選奨文部大臣新人賞（美術部門）受賞、海部文部大臣と歓談。沖縄県北部における一連の都市デザイン・環境計画で都市計画学会賞石川賞を受賞。重村が受賞講演、学陽書房から玉野井芳郎氏らとの共著『地域主義』出版。『建築文化』10月号に象グループ「沖縄の仕事」発表、「神話の復活を求めて」執筆。「民間都市計画プランナー論」『都市計画』99号。

1978

神戸大学工学部環境計画学科に（専任）講師として着任。夏、垂水・上高丸の3K公務員宿舍入居。研究室も講義負担もまだなく、図書室にデスクを置く。象と行き来（深夜バス・JR寝台銀河）。小牧市立図書館設計。名護市庁舎コンペの準備を大竹らと始める。前年からの高知市河ノ瀬居住環境整備計画を現地に住居を借りて進める（平井・小路・工藤）。ドモ・パレーナ設計（大倉山、内田文雄・有村）、内田祥哉から聞きRC固練り壁厚最大30cm。村野藤吾に誘われ事務所滞在数日。象設計集団神戸アトリエを海岸ビルディングに設立。

1979

ドモ・パレーナ竣工。名護市庁舎コンペ、象案を作業していたが予算超過がわかり、神戸で第2案（8億円案）を作成。神戸大学の同僚の家（斜め格子の家）、甲南大学教授の家（菱形の家）設計。重村ゼミ開設（1期吉村雅夫ら）、早川和男ゼミと協同（塩崎賢明助手・山崎寿一ら）。都計学会論文投稿。岡山県山手村計画（平井・向井志朗）。科研奨励研究取得。

1980

石川市・白浜原公園設計（象）、神戸・北野小学校校門玄関設計、王子動物園コウノトリ舎設計。神戸居留地景観調査・保全活用提案。『都市計画』111号に「居住環境単位としての大都市住宅街区の諸問題」を発表。哈爾濱建築工程学院・北京・瀋陽・長春旅行、哈雄文教授と出会う。吉阪・地井と科研「定住性の発達に関する研究」、松阪市でフィールドワークを始める。博士論文を吉阪に提出直後、吉阪が10月築地の聖路加入院、見舞いに行き、病床で招待状と航空券を渡され、デルフト工大（蘭）、アーヘン工大（独）、ストラスプール・ボザール（仏）で代理講演、ヨーロッパ初旅行中、12月吉阪急逝、旅先で悲しく、独仏間、車中で涙溢れる。パリでクセナキスに伝える。ドーシに電話。「定住型・生活型による集合住宅地計画試論」公団企画調査。

1981

『建築文化』5月号「解説・吉阪隆正」など吉阪追悼文を書く。吉阪隆正集刊行委員会を組織、編集委員長となり、高田馬場に事務所を借り、吉阪の著述資料の編集を始める。象・神戸アトリエを「いるか設計集団」に改称、Team ZOOを名乗る。明石銀座の舗装を明石窯業の塩焼き瓦でデザインする。山口県徳佐町の農業センター計画。「使われ方研究の方法論的諸問題」発表、計画学の方法を議論、吉武泰水・青木正夫・鈴木成文らと議論・交流。

1982

建知出版から『キーワード50―まちづくりの新しい視点をさぐる用語』を編著出版。長野県白馬村にペンション・アウゼ設計（有村・中川）。神戸市須磨区にドモ・コンクーラ（吉村）。兵庫県新宮町ドモ・エ・テーク、久住章と土佐漆喰の表現を追求（西山・ラッセル）[図12]。

1983

建築学会集落計画小委員会主査となり、全国の集落比較研究を組織化。M・シュパイデルとデュッセルドルフ日本建築展のプロデュース、展覧会企画・会場設計を行う。デュッセルドルフとアーヘンに長期滞在。ルシアン・クロールとパリ郊外の住宅地で偶然会い、以降親交。松阪市働く婦人の家設計（有村・吉村）。松阪の景観基礎調査。『a+u』7月号でクロール紹介。大竹康市サッカー中急逝。

1984

吉阪隆正集全17巻（勁草書房）の第1回配本として第8巻『ル・コルビュジエと私』を編集上梓、月評ヤニス・クセナキス（重村訳）。神戸市板宿にスクランブル・ビルをつくる、入居の信用金庫の預金倍増。川西市多田ニュータウンで戸建てのコーポラティブ＝コモンヴィレッジ移瀬をつくる。駒ヶ根市文化センターコンペ参加、山本理顕・元倉真琴らと大谷審査に異論。千里ニュータウン入居20年を期し延藤安弘（京大）・鳴海邦碩（阪大）・杉山茂一（市大）らと連合研究室で調査。都計学会に3論文。「エコロジーと建築表現の位相」『建築雑誌』6月号。

1985

徳島県HOPE計画を遠州尋美・山崎寿一らと策定、脇町の街と村調査。科研「集落空間計画の目標と方法に関する研究」を集落小



[図 13] いるか設計集団「脇町図書館」(1985)

山崎と愛媛県中久保集落の再調査。町並みの土蔵群を保全修復再利用した脇町図書館設計 [図13]、吉野川の青石を外壁に用いる。「千里ニュータウンの成熟化とストック再生の展望」『第8回都市計画シンポジウム論文集』。厳冬期に北大大学院集中講義、以降10年教える。

1986

40代

科研「都市・山村の二拠点型生活に着目した定住性の発展に関する研究」開始。「地方都市における定住サイクル論」を紀要に発表。大連工学院に専門家として招聘、滞在4ヶ月、中国語・現代史学習。病院建築について講義。『ラスト・エンペラー』出演。福建省客家円型土楼調査（廬・山口・伴丈・米須・福井）。吉阪隆正集5巻『環境と造形』の解説を書く。

1987

鳥取大山・神戸北野・滋賀守山・広島河内など野心的プロジェクトを創るが未完。秋マサチューセッツ工科大学で樋口・富田・丸山・有村らとTeam ZOOスタジオを開く。NYに感銘。脇町図書館で第12回吉田五十八賞受賞。濟州島探訪（いるか・丸山）。

1988

ソウルでARCASIAが開かれ日本未加盟でゲストとして招聘。J・ハブラーケン、B・ウィルソン、R・ハックニー、康炳基、康泓彬らとコミュニティ建築について討議。大阪でニュータウン世界フォーラムを開き、クロール、デ・カルロ、紹興市の何主任らを招き司会。国際花と緑の博覧会北ゲート・北西ゲート設計。岸和田市、長浜市への未完プロジェクト。

1989

出石町立弘道小学校移転コンペ入賞。教師らと参加型設計。弘道小学校は戦後最大の木造建築（吉村・西山・ラッセル）[図14]。集落型分舎斜面配置・積雪地中規模木構造の研究（金谷

弘）。舛田賢一町長に感銘「学校では小学校が大事じゃ、小学校は環境が大事じゃ」。出石へのまちづくり提案。住み手の参加で城崎内島公営住宅団地建替計画、調査・設計開始 [図15]。西宮名塩ニュータウン事業コンペ参加。脇町薨賞受賞。編著『図説集落―その空間と計画』（都市文化社）。



[図14] いるか設計集団「出石町立弘道小学校 (1990)



[図 15] いるか設計集団「城崎町営内島団地」(1993)

1990

城崎2期。公団高見フローラルタウンで生活型複合・町並み型住宅・サイクルユニットを実現。書道家原田観峯・息子博至と突然出会う。滋賀五箇荘に書道博物館観峯館の計画、避暑山荘やトーラの研究（松原・楨本）。出石HOPE計画。クロール『参加と複合』（住まいの図書館出版局）訳・解説。

1991

淡路町岩屋中学校建替コンペ入賞、設計。出石町立文化会館ひぼこホールの設計（初のオーディトリウム、演劇空間音響計画のスタディ）[図16]。滋賀横山集落の計画（北村禎太郎・李暎一・竹本）。安徽省徽州調査（李桓・工藤・西田）。中久保論文（山崎）。母悠紀75歳逝去。

[図 16] いるか設計集団「出石町ひぼこホール」(1993)

1992



城崎4期。八多地域福祉センター設計（茅葺き民家移築とRC木造混構造の複合）。観峯館実施設計 [図17]。弘道小学校文部大臣賞。ARCASIAラホールに行きゲスト報告。論文「定住の構造」を早稲田大学に再提出（博士・工学）。里弄住宅の研究（廬）。茅亭の研究（李暎一）。

[図 17] いるか設計集団「淡海書道文化専門学校付属施設 観峯館」(1995)

1993



〔図18〕 いるか設計集団「倉敷市立玉島北中学校」(1996)

大阪府宮三島団地建替基本計画。接地型住戸と、多様な住戸類型をめざす。岡田新一コミッショナー指名、倉敷市立玉島北中学校の計画〔図18〕、50名の校長の計画参加実験。長崎県森山町スポーツ交流センターコンペ入賞設計。神戸市立浜山小学校計画。新風水の都市奈良計画（浅井）＝百年後の奈良・建設省。テキサス大学でTeam ZOOスタジオ（丸山・有村・ジョアン・マーク&マンディ）。助教授に昇進。大学の組合中央執行委員長に就任。

1994

ひぼこホール監理。観峯館1期監理2期設計。三島鳥飼西団地監理。岩屋中学校文部大臣賞。建築学会アジア集住文化特別研究委員会委員長～97年。共著『ブルーノ・タウト1880-1938』（シュパイデル著、トレヴィル）。弘道小学校がARCASIA Gold Medalを受賞し、マニラの授賞式に向かう〔図19〕。



〔図19〕 1994年、マニラでのアルカシアゴールドメダル授賞式にて

1995

1.17阪神大震災、自宅マンション全壊、救助中転落、腓骨骨折、車いす生活体験。前年11月から震災の前日までの全記憶を失う。住吉山手で半壊住宅を借り、留学生らと避難生活。事務所・所員も被災。大阪事務所を大阪南森町に開設、岡山・九州・滋賀・兵庫北部の設計監理ができる体制をつくる。大きな借金をつくる。志保井正夫から事務所＝海岸ビルディングの震災復興時の資料を得、修復指導。重文指定外の異人館建築の修復作業。英国政府支援で派遣された英国の左官と協力。ケント公来日、北野を案内。地域復興では景観の持続、友人達の募金で住吉復興支援グループを組織。コアハウスや共同化の促進。居住するマンションの住民自主再建の制度研究。マンション区分所有率の調整による住民自主再建、国・県・市・公庫・銀行と協議、マンション再建法案原型をつくる。コンテナ仮設住宅の実験。神戸大学教授に昇進。

1996

AIA（全米科学基金）・JIA共同研究「阪神大震災の教訓」研究開

始。UIAで招待講演（バルセロナ）。玉島北中、森山スポーツ交流館、観峯館、浜山小、池上邸。今井町まちづくりセンター、なぎさ保育園。住吉復興支援パネル展（西・松原・浅井）。

1997

復興住宅多数、アビタ本山再建住宅設計。出石ひぼこホールで建築学会作品選奨。玉島北中学校で文教施設協会賞。「アジア集住文化研究の今日的課題と展望」建築学会。科研「阪神大震災により被災した既存住宅市街地の復興に地区生活主体の果たす役割」。アメリカ建築家協会名誉フェロー受賞（ニューオリンズ大会）。大学院研究科後期課程教務委員長。

1998

緒方町立緒方中学校コンペ入選設計、城崎町一の湯設計、今井町における一連の設計、朝来町クラインガルテン設計。AIA・NSF・JIAの共同研究発表、招待講演＝ワシントンDC。建築学会農村計画委員長。ISAIA#2実行委員会副代表。震災教育用絵本『3年目の桜―阪神・淡路大震災たかしくんの体験』（文・重村、画・小野かおる）建設省から出版。

1999

神戸市立有野北中学校設計、性海寺龍華院茅葺き庫裏再建設計、大阪府公社湊団地建替設計、府営西枚方団地建替設計、神戸山手学園中高改築計画、長田東部地区計画。工学部教学委員長。学会評議員。JIAトルコ震災派遣団。韓国国際建築年基調講演。UIA北京招待講演。ISAIA#3済州島日本代表。科研「児童生徒の農的体験を通じた環境教育研究」。

2000

聖和大学乳幼児センター設計。学術会議農村計画研連委員。急速に海外関係多くなる。サステナブルビル国際会議（マストリヒト）。アメリカ大学キャンパス調査（UWシアトル・UOオレゴン・UCバークレー）。父實逝去94歳。長崎総合科学大でも以降教える。

2001

ヨーロッパ大学キャンパス調査（アーヘン工大・パリ大学第2第6第7第8）。パトリック・ブシャンと親交。フランス政府機関と深い関係ができる。H病院設計。工学部授業評価委員長。G8エコロジーシンポ日本代表（パドヴァ）。ナント市国立芸術センターTeam ZOO展プロデューサー。ISAIA#4基調講演者（重慶）。大学基準協会工学系研究科基準検討委員会委員。

2002

緒方中学校体育館設計、科研「学校環境ストックを評価し環境共生的で創発的な教育空間をつくるリノベーション方法」。富田正彦科研でキューバ・エコロジー調査（森下郁子・小林慎太郎）、ドイツ・エコロジー調査（有村・広田純一）。工学部学生委員長。神戸大学施設マネージメント委員。オープンラボとしての自然科学3号館の計画、スタジオ型オープン研究空間を土木の計画系と協同で獲得。

2003

日本学術会議・建築学会・神戸大学共催国際シンポ「多様性の中に循環型社会の未来を探る」主催、神戸宣言起草（ハーン・クロール・富田正彦・森下）。選挙を経て建築学会副会長。21世紀COE「安全と共生のための都市デザイン」拠点リーダー、学内の選考と大学間の競争を勝ち抜く。若い研究者を集め、COEシアトル拠点をづくり、頻繁に往復する。井上医院デイケアセンター（小笠原・浅見）設計。吉阪隆正展模型（山崎義人・三笠友洋）。

2004

建設学科主任・建設学専攻長。ISAIA#5実行委員長代行（松江）。サステナブル社会国際シンポ基調講演（バンドン）。KU-UW都市安全シンポ司会（シアトル）。韓国教育施設学会招待講演（ソウル）。森山中学校体育館、山東町埋蔵物センター、青空保育園、ここにこ桜保育園（大塚）設計。緒方町立緒方中学校（吉村・浅見・西）建築学会作品選奨。

2005

学会中越震災復興総合研究小委員会主査、中越地域を調査、「中越提言」起草（高見沢邦郎）、泉知事と対談。KU-UW国際シンポ主催（神戸）。EUウィーク日独建築交流神戸シンポ主催（シュパイデル・ハーン・インゲンホーフエン・黒川紀章）。韓国農村建築学会招待講演者（ソウル）。多くのまちづくりプロジェクト。科研「建築の地域性概念の成熟に関わる「ことば」と「かたち」に関する研究」。共著『集住の知恵』（日本建築学会編、技法堂出版）。

2006

ISAIA#6建築学会代表（大邱）。大韓土地公社国際シンポ招待講演（ソウル）。井上医院デイケア2期〔図20〕。KU-UW国際シンポ主催（シアトル）。道の駅「但馬のまほろば」、森山保育園、山手中高改修。ジャワ島中部震災復興研究、頻繁に調査。国際シンポEE・IBR基調講演（ジョグジャカルタ）。COEの運営と若者達の研究指導で忙しい。



〔図20〕 いるか設計集団「井上医院デイケアセンター」(2006)

2007

大学院重点化、工学研究科教授、自然科学系重点研究環担当兼任。日仏笹川財団招待講演（パリ）、第9回世界華商大会招待講演（神戸）。UWと日米デザイン・シャレット・ワークショップ、神戸大学COE長田サテライトスタジオ（エイブラムスン・稲地・山崎・田中）。科研「ジャワ島中部地震被災地における居住地環境の復興に関する総合的研究」。風の道・風の塔など本格的エコスクールとしての玉津第一小学校設計〔図21〕。



〔図21〕 いるか設計集団「神戸市立玉津第一小学校」(2007)

2008



〔図22〕 いるか設計集団「神戸大学医学部付属病院こどもセンター」(2008)

ワシントン大学招待講演（シアトル）、全米地震会議招待講演（シアトル）、IFUDP招待講演（河北省廊坊市）、ISAIA#7招待講演者（北京）、神戸大学定年退任の準備。博士論文主査、この年だけで9人（在任中全20学部付属病院こどもセンター）名）。研究成果公開促進費「田園で学ぶ地球環境」。神戸大学病院こどもセンター設計（こどもが治癒する日常環境の研究）、満床になる〔図22〕。

2009

神戸大学で最終講義「生命循環都市」。神奈川大学工学部教授に就任。九州大学客員教授。神戸大学名誉教授。戸塚区に所有の借家（古い積水ハウス初期モデル）を横浜住居にし、神戸との往復生活。編著『田園で学ぶ地球環境』（技法堂出版）。最初の学生達とのコンペ「風をつかまえる街」建築学会コンペ入賞。王子動物園熊舎設計。井上デイケア3期。#4東アジア大学交流セミナー（台北）。九大で吉阪展、菊竹清訓特別講演組織。

2010

葉山に益田邸（ヴィラ・マレア）設計〔図23〕。#5東アジア大



【図23】 いるか設計集団
「ヴィラ・マレア」(2010)

2011

学交流セミナー（横浜）主催。国立台湾科技大学講演（台北）。神奈川大学日本常民文化研究所所員。神奈川大学キャンパスデザインへの意見書。キャンパスWG結成。新3号館のデザイン監修。科研「市街地における生活環境資源としての「谷戸」の研究」を始める。蜂窩織炎で13日間入院（神戸）。

神戸大学マスタープラン計画（吉村・西田）。東日本大震災発生、4月三陸緊急調査（月舘・岡田・後藤・三笠）、道路・物流不通時に4WDと登山靴の冒険的踏査。建築学会大震災支援ボード委員。漁連専務長屋・記者らと5月三陸漁村を歴訪。岩手県大船渡市三陸町越喜来漁協中島氏より越喜来復興委員会の復興計画を依頼され、浦浜地区・崎浜地区・甫嶺地区・泊地区の復興計画をつくる。常民研および歴史民俗資料研究科の大島漁協文書の救出作業に参加、漁協文庫の計画を立案。三井物産環境基金活動助成に応募し、支援を獲得。清水建設の割田正雄と協同し、KU+SHIMZU Design Forumをつくる。南フロリダ大学ラッセルと協同し、KU+SFU国際シンポを始める。#6東アジア大学交流セミナー招待講演（水原）。神奈川大学キャンパスマスタープラン策定。共著『東日本大震災からの復興まちづくり』（佐藤滋編、大月書店）。

2012

建築学科デザインコース主任。くまもとアートポリス和水町立菊水小・中学校プロポーザルコンペ最優秀賞獲得（内田・西山・吉村）、設計【図24】。#8 Pacific Rim国際シンポ招待講演（ソウル）。#1インドネシア建築ビエンナーレ基調講演（ジョグジャカルタ）。建築学会土木学会共催、自然災害国際WS招待講演（名古屋大学）。建築学会賞（論文）「コミュニティ研究に立脚した災害復興の方法」。『いるか設計集団』発刊（建築ジャーナル別冊）。編集および解説『漁師はなぜ、海を向いて住むのか』（地井昭夫著、工作舎）。科研「三陸漁村集落の津波被災状況の分析と復興計画および復興過程に関する参与的研究」。



【図24】 内田・西山・吉村・重村「和水町立菊水区域小中併設学校」(2012)

2013

学会賞審査委員。司法支援建築会議委員。大船渡市越喜来崎浜の

自力建設集会所施設「浜らいいん」建設WS、フランス財団支援（丸山・浅沼・三笠・学生達）。学会技術部門設計競技最優秀賞「オカミのイエ」（三笠・学生達）。KU+レモンホーム Design Forumの発足（山家）。ISAIA#9講演（光州）。ルシアン・クロール展、講演（ナント）。バイオ建築国際会議招待講演（フィレンツェ）。#8東アジア交流セミナー招待講演（ハ爾濱）。城崎国際アートセンター設計（吉村・殿井）。

2014

岡山商科大学リニューアルコンペ最優秀。団地再編コンペ「自然と都市が近い奥河内エコ・ライフ拠点」最優秀賞。シカゴ調査。南フロリダ大学特別講義（タンパ）。#9東アジア交流セミナー主催（横浜）。神奈川大学28号館デザイン監修。

2015

玄武洞ミュージアム計画（吉村）。岡山商科大学キャンパスリニューアル計画・設計。上倉田の家計画。茅葺き民家・大前邸、移築再生・設計・建設WS（有村・殿井）【図25】。共著『好きなことはやらずにはいられない—吉阪隆正との対話』（アルキテクト編、建築技術）。#10東アジア交流セミナー講演（水原）。神奈川大学国際センターデザイン監修（鈴木信宏・中井邦夫）。大島漁協文庫実施設計、建設WS（三笠・桜田務・学生達）【図26】。同完成、文庫の発足。



【図25】 いるか設計集団「大前邸」(2015)



【図26】 神奈川大学重村三笠研究室「大島漁協文庫」(2015)

2016

神戸市統合教育中学校コンペ案（浦辺事務所・有村・吉村・鄭）。ISAIA#11顧問（仙台）。韓国農村建築学会講演（大邱）。国立近現代建築資料館吉阪展記念シンポ講演（藤森・伊勢崎賢治、アテネフランセ）。神奈川大学退任イベント「シゲケン引越します」（三笠・西村・石田・外間・多飯田・鄭）。共著『よみがえった茅葺きの家』（有村・殿井、建築ジャーナル）。現在、神奈川大学キャンパスデザインアドバイザー・工学研究所客員教授・工学部非常勤講師・日本常民文化研究所客員研究員・アジア研究センター客員研究員、神戸大学名誉教授、いるか設計集団主宰。

（図版提供・手書きページ番号＝重村力）

修士論文

野口この実

伊藤夏美

小林優

大前香菜



●ディプロマ賞



野口 この実

Konomi NOGUCHI

重村研究室
SHIGEMURA lab.

都市のもう一つのファブリック Human fabric of the city

無垢の創造性を解放する場所
Places to release the innocent creativity

中井 「無垢の創造性」という割には、9本柱と4本梁のシステムがあり、その領域で色々やっています。しかし、ここではそのような領域は決めないで、自然か架構かわからない程、環境と一体化するくらいのシステムの提案の方が、良いのではないのでしょうか。

野口 基本的に大地を開放するようにし、そのままの自然を残し、あえて外構をつくり過ぎないように計画しました。

中井 これだけのストラクチャーで大地を覆ってしまうと基礎が多くなってしまい、大地をいじめているような気がします。

曾我部 前半の全体を活用しようとした優しく丁寧な提案と、最終的に出てきた建築の方法に至る提案とが少し印象が違うように感じます。この際、架構の仕組みの可能性を徹底的に突き詰めても良かったのかもしれない。

重村 材木というのは4mで売られているものが多く、6mを超すと手に入りづらくなります。だから長い材を継いでいないとリアリティがありません。そうしたことは考えなかったのですか。

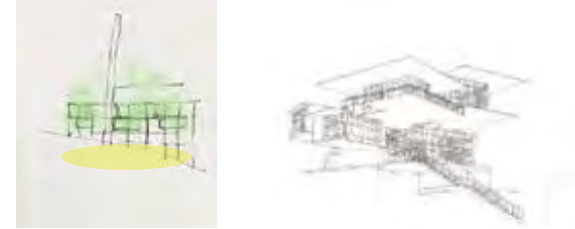
野口 図面にはしませんでしたでしたが、部材が交差してところで継がれると考えていました。



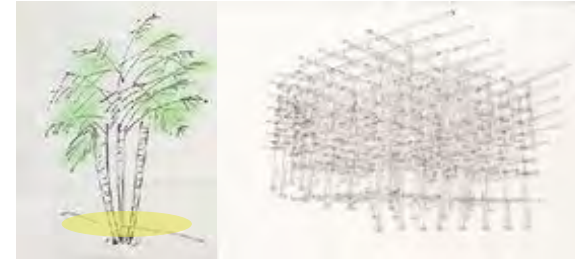
住むということは創造することではないか。 それによって人は喜びを感じることができる。

丘陵地が浸食されて形成された谷状の地形である白幡の谷戸の小道には、自然があり、生活の溢れ出しがあり、遊び場でもあり、それら生命の喜びの発生する場として、生活を豊かにしてくれる。

構成ダイアグラム 地面を解放し、手がかりを与える



守られた、人と自然が織りなすファブリック





工房へと続く小道



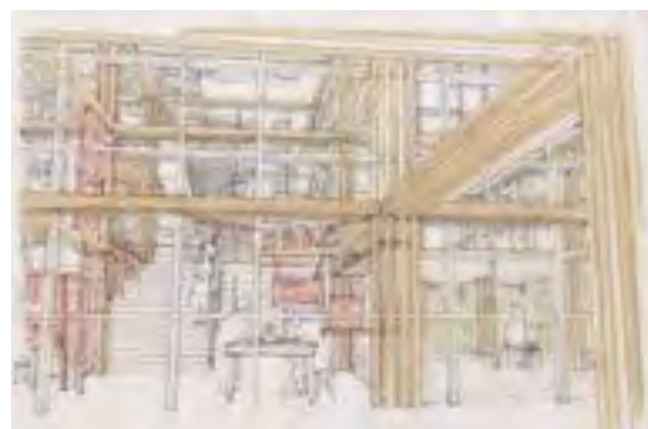
自然が干渉する風景



ピロティの小道



広がる居室空間



コモン
プライベート

0 1 3
A-A' 断面図

●優秀賞



伊藤 夏美
Natsumi ITO

山家研究室
YAMAGA lab.

生物と建築の関係に関する研究 Study on the relation between creature and architecture

新潟県上堰潟公園における自然体験施設の提案
A proposal for natural experience facilities
in Niigata uwasakigata park

重村 「葉の下の休憩所」は、上に水を持ち込んで蒸散させますよね。常に水をのせなくてははいけません。例えば、もっと少ない水でドライミストという手法や、そもそも多孔質のものがあれば、乾く時に熱を奪うので冷たいですよ。そういうものと比較して、どっちが冷えるか検討する余地があります。

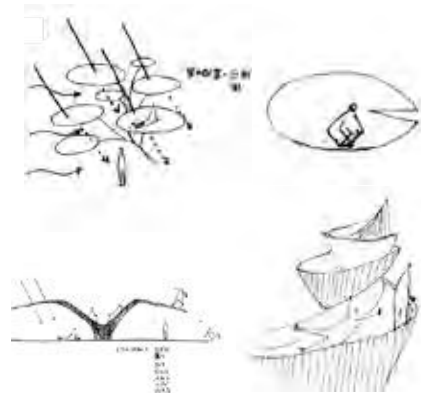
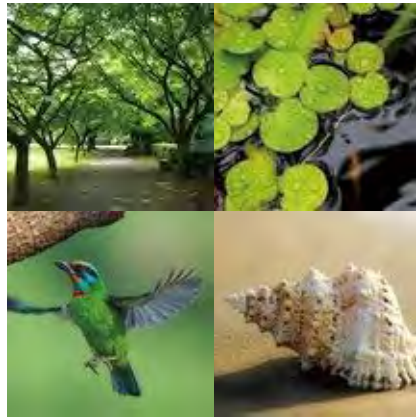
伊藤 「葉の下の休憩所」に関しては、軽石材のようなものを上に掛けた屋根にしています。機械的ではなく、その石で雨水を溜め、その蒸発によってと考えています。

内田 鳥の羽、貝殻という自然のものをイメージと

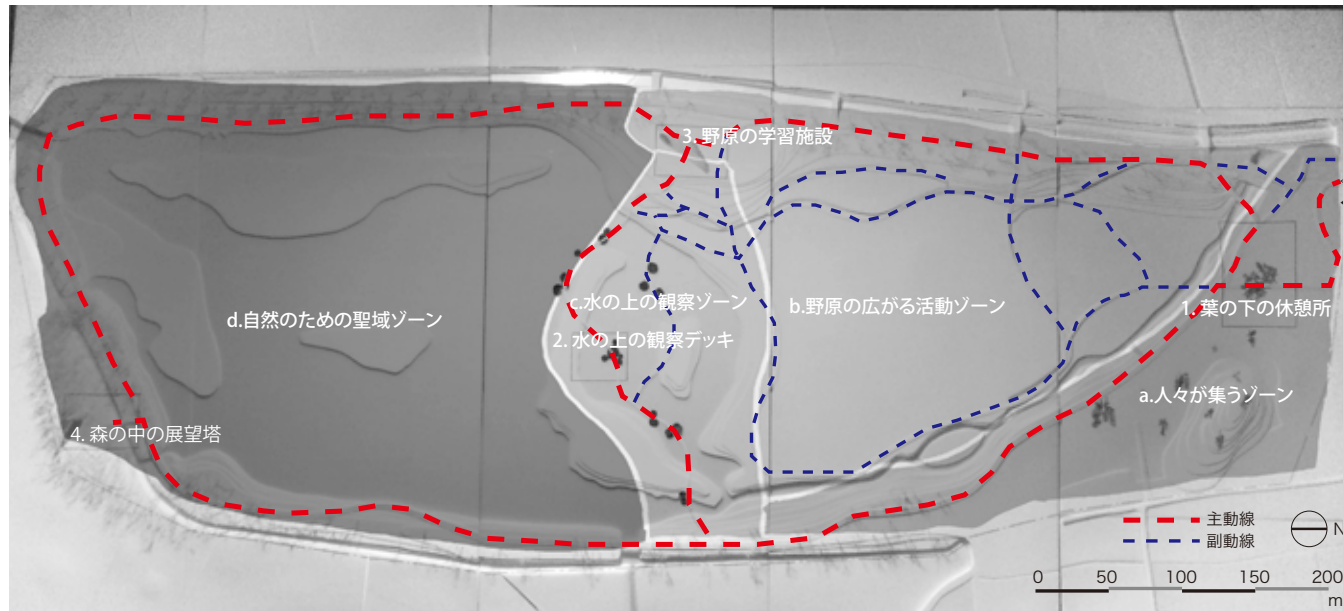
して使っているのか、それとも、自然の造形物を建築に展開していくプロセスがあるのか、もう少し知りたいです。

伊藤 「葉の下の休憩所」は、環境的なシステムを取り込もうと思って計画し、「水の上の観測デッキ」に関しては、基本的に構造を参照して設計しています。「野鳥の学び舎」に関しては、イメージから鳥の美しい曲線を曲面にして、構造を作っていくことを重視しています。「森の展望塔」に関しては、建築構成の螺旋というところから貝殻というものを持ってきているので、イメージに近いものになっています。





生物をモチーフに人と建築の新たな関係性を導出する。



くねくねと公園へと導く エントランスロード 新潟田園の四季が広がる コンクリートの道が現れ、湖へと誘う 公園を回遊しながら、湖に近づく 木々の生い茂る森へ入る

01 葉の下の休憩所

葉の機能を用いて日陰や温度の調整を行い、木漏れ日を思わせる内部空間の休憩所を提案する。

蒸散機能

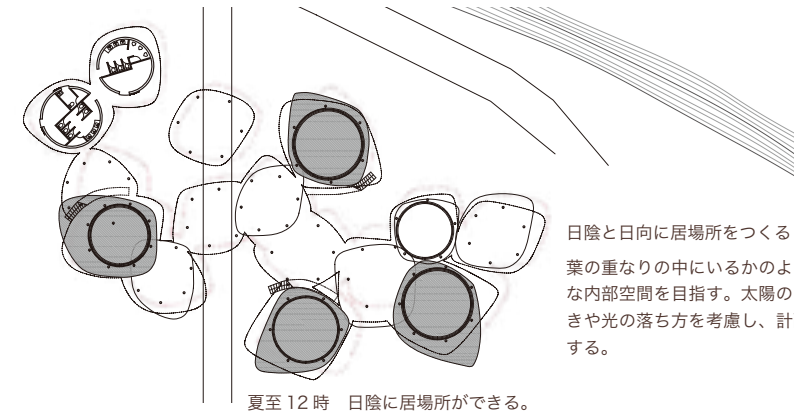
屋根の傾斜により、雨を集め、またその雨を冷却利用する。



葉の蒸散システム



葉の蒸散システムを利用した環境断面図



日陰と日向に居場所をつくる
葉の重なりの中にあるかのような内部空間を目指す。太陽の向きや光の落ち方を考慮し、計画する。

夏至12時 日陰に居場所ができる。

03 野原の学び舎

開放的な大きな空間を持つ学習施設。ワークショップや研究会なども行われる。地域ボランティア、人の活動拠点となる。

翼をイメージした屋根の構造
鳥の翼から構造をイメージする。鳥の翼の骨を2本の曲率を変えたアーチで表す。そこから、屋根に翼のような美しい曲面をつくる。翼に包まれた空間はおおらかに広がり、緩やかに外部空間とつながることができる。



鳥の翼の骨と屋根のイメージ



鳥の翼の構造スタディ

02 水の上の観察デッキ

水上を移動しながら野鳥や植物を観察できるデッキを設ける。デッキは水量に対応し、デッキの目線を下げること、新たな発見と空間体験ができる。

浮き草システムの利用

浮き草は葉の中に空気を含み浮かんでいる。また、根は重りの役割をしている。これらの構造を利用して、デッキは水位に対応する。



浮き草の構造システム

04 森の展望塔

公園全体、地域をみわたせる展望台。公園内の植物、野鳥のギャラリーも設け、展望台に登りながら植物、野鳥を学ぶ。

螺旋階段

貝の外側を登るように螺旋階段で展望塔を登る。上堰瀧公園全体や地域を見渡す。

貝の断面写真



上堰瀧公園

●優秀賞



小林 優
Suguru KOBAYASHI
中井研究室
NAKAI lab.

コペンハーゲン・ホルメン地区 における公共空間の再編

*The recomposition of the public area:
featuring Holmen, Copenhagen*

デンマーク王立学術アカデミーの改築と拡張を題材として
*The renovation and expansion of Royal
Danish Academy of Fine Arts*

曾我部 運河沿いの全体がアウトスクールのような内容は大変魅力的な場所だと思いますが、あの場所は今度どこになるのですか。

小林 本計画では、ここに新しい図書館とギャラリーがあり、その内側に造ります。この街はコンパクトな為、対面にある市内中心部からもこの辺りの雰囲気を感じることができるので、この位置へ移転させます。

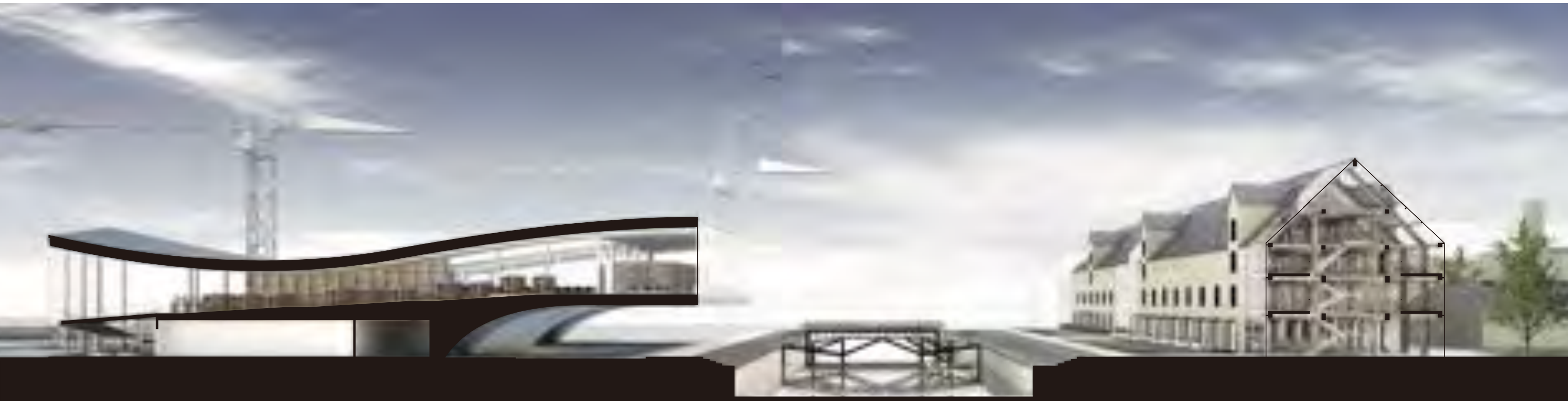
曾我部 だとすると、それを巡る散策ルートをもう少し明確に位置づけないといいません。

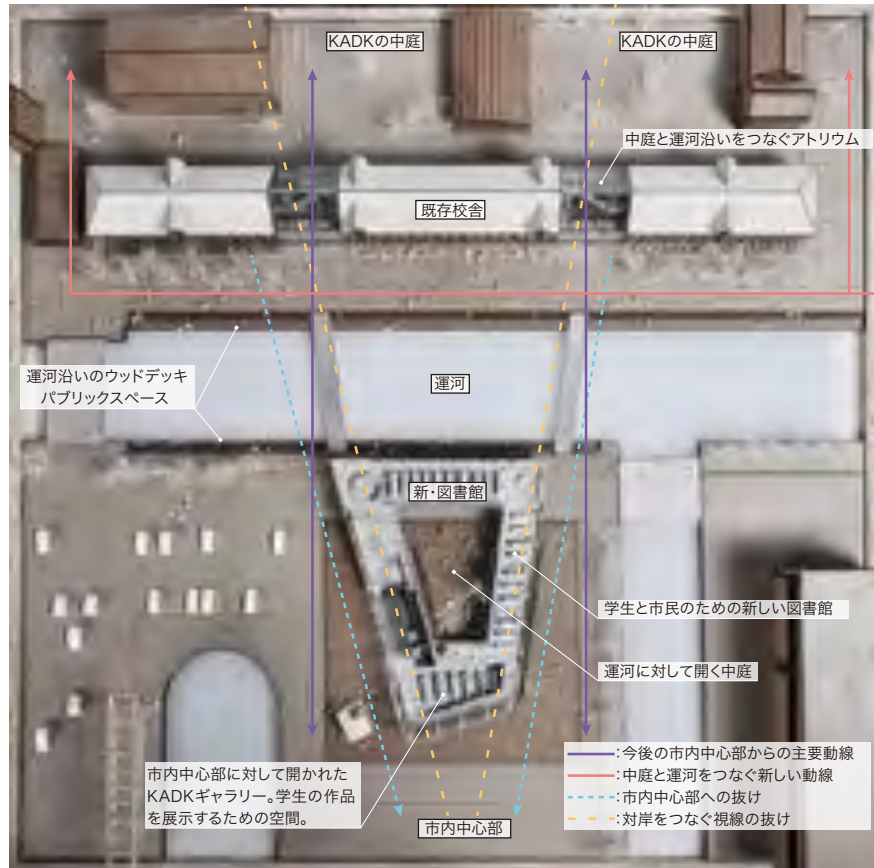
重村 もっと大きなスケールでサーキュレーションや、ウォーターフロントの活用という事を考えて、一貫してやるべきではないでしょうか。

小林 約150mの長い壁を持った建物ですが、それは、この空間を守っていくような、雰囲気の良い中庭を囲っているようなものなので、エッジになる建物としては、とてもいいと思います。なので、外観の形状は崩さず、囲われた雰囲気を残しつつ、さらに運河とどう関係づけていくか、また素材を変える事で対応していこうと計画しました。

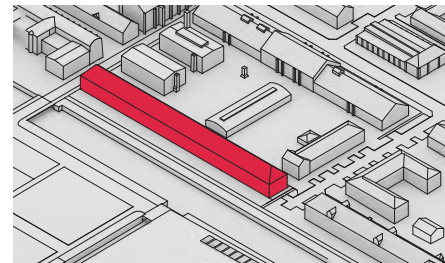


学生と市民の活動が広がる コペンハーゲンの新しいウォーターフロントエリア

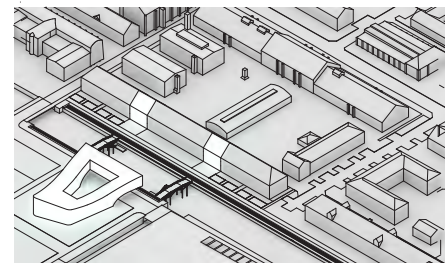




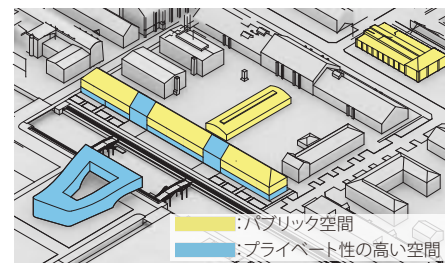
俯瞰模型写真



現状



提案



公共性について



図書館外観



改築した既存校舎外観



図書館内部



アトリウム内部



図書館側からみた風景



市内中心部からみた風景

●優秀賞



大前 香奈

Kana OMAE
内田研究室
UCHIDA lab.

住宅作家・山田醇に関する研究 A study on the Floor plan by Jun Yamada, Housing Architect

室の配置計画と室の関係性を中心として
Focused on the Layout and Relations of the room

1.はじめに

明治期のわが国において、建築の高等教育を受けた所謂「建築家」が扱う建築は、国家公共の用に供する建物が主流であった。しかし、大正期になると独自の住宅観や、生活像を持ちそれを追求していく「住宅作家」と呼ばれる建築家が現れ始める⁽¹⁾。本稿で取り上げる建築家、山田醇(以下山田)は、住宅作家の草分け的存在とされ、長女の病気をきっかけとし、日本の気候風土に適合する「保健的住宅」を科学的なアプローチにより研究、提唱した建築家である(図1、2)。



図1 開院宮邸外観



図2 山田肖像

2.研究資料・研究目的

これまでの研究では、山田の住宅観を明らかにしたもの等がみられる⁽²⁾。しかしながら、山田の設計理論が実際の作品においてどのように展開されたのかを明らかにしたものはみられない。本研究では、一連の著作や、雑誌記事、山田設計の現存する遺構調査から得たデータを主資料とし住宅作家として知られる山田の活動の一端を明らかにするとともに、山田の設計理論がどのように実践されたのかを明らかにすることを目的としている。

重村 山田は各室の配置と室内温度の関係を研究していたということですが、小屋裏を子供室として利用する際に、暑さに対する工夫等はなされていたのですか。

大前 東西・南北方向それぞれ、高所と低所に通風窓を設けることにより、温度差を利用し通風を促したり、天井部に通風口を設け、屋根裏の通風を確保したり、外壁部に羽目板を用いるといった、内部に熱をこもらせないための工夫及び、外部の熱を遮るための工夫がなされています。

石田 山田は通風を重視していたということですが、プランニングを見ると、通風が必要な空間をコノ字に囲んでいるように見えます。通風のための工夫

や、また同時に湿気に対する工夫などはあるのですか。

大前 通風の為の工夫としてはまず、先ほどの高所と低所に設けた通風窓があります。第二に、中廊下と南面した広縁の配置があります。南面した広縁で暖められた空気と、家の中心部の中廊下の冷えた空気、それぞれ温度の違う空間をつくり出すことで、温度差を利用した通風を確保しています。また、湿度に関しては、湿気がこもることが無いように各室開口部の位置が計画されています。更に、床下の高さを確保すると共に、土台部分にスリットを設けることで、床下部分の防湿がなされています。

3-1.言説からみる山田の住宅観

既往研究において、山田の住宅観については触れられている。しかしながら山田の提唱する「保健的住宅」に関する限定的なものであるため、ここでは改めて山田の住宅観の全体を概観するために、再度検討をおこなうものである。

「元来住宅なるものは、他人の為に作るものに非ずして、絶対に家族本位とすべきが近代の理想で、客間及玄関の如きは、特に小住宅にあつては、来客に甚だしき不便と不快とを興へぬ程度のものであればよい」(住宅建築の実際 昭和7年p.25)

旧来の接客本位であった日本の伝統的な住宅ではなく、家族本位にすることを近代の理想であるとしている。山田が近代的な生活像を理想とし、住宅においては家族の生活といった実用に重きを置いていた点がうかがわれる。

また、昭和3(1928)年の『家の建て方』のなかで山田は「住宅の善悪と云う事は、良材を使用し仕上げを善くすると云う事よりは、通風採光堅牢便利及経済と云ふ事で大體盡されて居ると思ひます…其の上気持ちよき外観を呈する家ならば、先づ完全のもの…」(『家の建て方』昭和3年p.9)と述べている。山田は住宅の価値を決定するものとして、まず通風・採光といった要素を挙げ更に、堅牢性や、利便性、経済性を述べている。これらのことから、山田が住宅において、非常に実用的な側面に重きを置いている点がうかがわれる。そして、上に挙げた実用的な要素の重要性を述べたうえで、外観の意匠性にも言及している⁽³⁾。そして、それらの要素を満たしたのならば住宅としては完全であるとしている。この点から、山田は住宅の様式や外観の意匠について、配慮はしていたが、通風・採光などの実用

的な側面をより重視していた点が窺われる。

以上をまとめると、言説から読み取れる、山田が住宅において重視していた点としては以下が挙げられる。

- ①通風・採光 ②利便性 ③家族本位

このなかでも、通風や採光といった保健的宅を構成する要素は繰り返し述べられており山田の住宅観の根幹をなすものであったと捉えることができる。また、利便性や家族生活の重視といった実用に重点を置いた点も山田の言説からみる住宅観の特徴であるといえる。

3-2.山田の住宅観の実践

先述したように、山田の住宅観において通風・採光は非常に重視されてきた。しかしながら、それがどのように実践されてきたのかは、明らかにされていない。そのため、著書のなかで紹介された山田の風・採光を得るための手法を言説より抽出し、遺構調査を元に得たデータと、比較をおこなうことで明らかにする。本稿では著者が実際に実測をおこなった宮前邸(昭和5年竣工)を事例として扱うものとする。山田の通風・採光のための手法を言説より抽出し纏めている(表1)。これを見ると、広縁や欄間などの伝統的な日本の建築をベースとした工夫が様々な見受けられる。その一つに日光投射図がある(図3)。これは日光の投射角度から軒の出、天井高さを定めたものである。また、開口部においては風・採光のために有効な大きさや、位置が山田により定められ、通風・採光の手法はかなり定型化されたものであったことが窺えるのである。

また、これまで指摘されてきたように山田

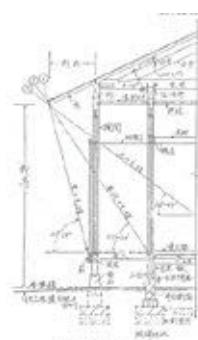


図3 日光投射図

表1 山田の通風・採光の手法		
通風・採光の手法	効果	言説
①配置計画の工夫	採光	南北の奥行が四間半以上あるものを作る場合は、南北の軸が約十度乃至十六度迄東に振れて居る事が理想であり、又四間半以下の奥行の家を作る場合には、反対に西に四、五度位振れて居ると、夏冬共に都合のよい日當りの家が出来ます。
②縁側・軒の出・天井高さの調節	採光	主要なる部屋の南側には縁側を設けて、軒の出及び高さを適宜に垣術する
③中廊下の設置	通風	…中廊下に出来る低温度の空気の為に、風無き日でも空気の移動が生ずる
④小屋裏開口部及びガラリ戸の設置	通風・採光	切妻又は入母屋造りの屋根にして、東西の壁面のなるべく高い位置に、通風採光用の窓を設けて…ガラリ戸を設けると…日没後外気が冷却すると、外気と小屋裏の高温度の空気と入れかひになる
⑤掃出し窓の設置	通風	通風には…掃出しの方が涼しいもの…丈は四寸五分以下…有効な大きさは1尺以上
⑥床下換気口の設置	通風	土台と布石の間は多少の空隙をつくて床下の通風の便に供すべき
⑦天井換気口の設置	通風	天井に換気口を設け、小屋裏の通風にも十分注意する事
⑧欄間の設置	採光	居間と縁側との境及び広縁のガラス戸の上にたけ一尺三寸くらいの欄間を設けると、居間の採光は十分
⑨三重窓の利用	採光	三重窓はききわめて効果的で、適宜に軒の出を深くすると、夏涼しく冬暖かな部屋となる。

の住宅には中廊下が用いられる事例が多いが、それは、プライバシーの確保といった側面と、住戸内の風道や、空気の流動性を確保するなど、通風を確保するための手法として中廊下を用いていることがわかる。そして、このような温度差を利用した通風の促進は各所にみられ、住宅への科学的なアプローチをした山田の作風を端的に表しているといえる(図5〜9)。

次に、山田の採光・通風といった手法がどのように実践されたものであったのかを、宮前邸を事例として以下に示す。このように、著書においては自然環境を利用し通風・採光を得る等の、手法が具体的に展開されている。そして、それらの手法は実際の作品においても実践され、山田が日本の気候風土に適した住宅の設計をおこなっていたことは宮前邸という事例を通して理解できるのである。

4-1.言説にみる平面計画

山田は一連の著書における「間取り」に関する記述の中で、各室を配置する方位について詳細に述べている(図4)。そして、それと共に室と室との関係性についても繰り返し言及している。山田の言説



図5 西側妻面に設けられた小屋裏の通風のための開口、及びガラリ戸(4)



図6 食堂に設けられた掃き出し窓(5)



図9 居間と広縁境、外部と広縁境の上部には欄間が設けられている(8)



図4 宮前邸の南北方向の奥行きは約5間、実測によると宮前邸の配置は東に5度傾いている。また、東西方向に中廊下を配している(①、②、③)



図8 折衷室や応接室など天井部に換気口が設けられている(7)



図7 宮前邸土台と布石の間に設けられた通風のための空隙(6)

によると主要な室の方位と部の用途による関係性は以下の通りである(表2)。

山田によれば、西日があたる西側の部分には、利用時間の少ない玄関や応接室を配置し、温度が安定し居住環境のよい南面した家の中央部には、家族団らんの場であり、かつ利用時間の最も長い居間を配置するものとしている。また、一生の過半を過ごす寝室は、南の次に居住環境の良い東南とし、台所、浴室、洗面などの水まわり空間は北側に配置するものとしている。旧来最も居住環境の良い場所を当てていた、応接室等の接客空間を西側という居住環境の悪い場所に配置している点や、最も居住環境の良い南面した家の中央部に居間を配置している点に山田の家族生活重視の住宅観が顕著に表れていると言える。また、隣接関係を見てみると、台所と食堂の近接、寝室の隔離、居間と応接室の隔離などが述べられている。これらは、プライバシーの確保や利便性の確保といった事が重視されたものと考えられる。

4-2.図面にみる山田の平面計画

山田の著書に掲載されている作品のうち、戦前期の専用住宅で、かつ平面図が確認できる、95例について主要な諸室の配置される方位及び、各室との関係について分析をおこない、各室の配置された方位を纏めた(表3)。これを前述した山田の理想とする方位と比較すると以下の様になる。[I]寝室山田が理想とする東南配置が最も多く、57/95例と6割を占める。[II]応接室西側配置が理想とされ、西配置の37例、及び南西配置の17例をあわせると、54/95例の約6割が西側配置となっている。[III]居間 90/95例と9割強が理想とされる南配置をとっている。[IV]食堂南配置が理想とされ、53/95例と約6割が南配置をとっている。

このように、居間においては山田の定める南配置が9割強と一貫して実践されており、居間の中心配置においては山田の家族生活重視の面が窺われるのである。また、寝室、応接室、食堂においては約6割と半数を超える住宅で山田提唱の室配置の方位が実施されている。

山田の平面計画における室配置は、前述した居間の中心配置、及び

表2 各室の配置方位及び室同士の関係性について

室名	方位	各室との関係
玄関	西又は西北	-
応接室	西側	玄関に近接
書斎	応接室の南側又は西南隅	応接室又は居間に近接
居間	南面し、家の中央部	各室との連絡を良く
食堂	南面、	居間及び台所に近接
寝室	東南隅	各室から隔離
台所、浴室(水回り)	北側	台所：食堂に近接、浴室に隣接

表3 各室の室配置の方位

名	延床	玄関	寝室				応接				居間				食堂				
			南	東	西	北	南	東	西	北	南	東	西	北	他				
住宅1	70.7	A	(I)			(II)			(III)					(IV)					
山田自邸	56.2	A	(I)			(II)			(III)					(IV)					
戸城邸	37.8	B																	
井上邸	57.7	G																	
住宅4	45.6	A																	
住宅5	39.9	A																	
津田邸	34	F																	
藤邸	43.5	D																	
住宅7	43.5	D																	
中村邸3	52.5	A																	
嶋山邸	44.8	E																	
船津邸	45.1	A																	
中山邸	61	F																	
立花邸	35.6	E																	
鈴木邸2	35.5	A																	
鈴木邸3	53.9	C																	
白木邸	27.9	E																	
山口邸	24.8	D																	
住宅9	19.8	D																	
住宅10	20	F																	
住宅11	24.8	D																	
住宅8	19.6	E																	
鈴木邸1	79.2	A																	
黒原邸	62.1	B																	
永住邸	79.2	A																	
住宅23	49.8	E																	
菅原邸	49.8	F																	
松下邸2	75.8	A																	
小島邸	86.8	A																	
河藤子爵邸	137	A																	
吉田邸	89.6	D																	
野崎邸	72.7	A																	
和田邸	61.4	E																	
中野邸1	57	A																	
安原邸	106	A																	
大橋邸	65	E																	
植原邸	51.6	E																	
和田博士邸	49.8	G																	
川路邸	60.7	B																	
田中邸1	55.8	E																	
中村邸1	127	E																	
田津邸	79	A																	
九鬼邸	48.4	G																	
磯原邸	55.7	C																	
松下邸1	78.9	A																	
住宅12	49	A																	
谷津邸	37.1	B																	
伏原邸	60.4	A																	
水谷邸	46	他																	
山口邸	41.2	A																	
加来邸	61.6	B																	
嶋山邸	31	A																	
中村邸2	31	E																	
船津邸	45.8	A																	
目白邸	39.9	A																	
柴崎邸	43.5	D																	
本多邸	51.5	他																	
藤原侯爵邸	104	A																	
中野邸2	80.7	A																	
中村博士邸	73.5	F																	
徳川邸	103	A																	
金子邸	40.8	A																	
清水邸1	77.2	A																	
大河原邸1	28.2	A																	
基本配膳図	34	A																	
大河原邸2家	33	A																	
門馬邸	46	E																	
天内邸	70.4	A																	
金井邸	37.2	A																	
山田邸	50.3	B																	
吉川博士邸	66.5	F																	
田中邸2	75.1	E																	
武重邸	66	A																	
遠藤邸	67.8	E																	
清野邸	34.9	A																	
1階建ての家	35	A																	
2階建ての家1	74	A																	
1階建ての家	70.5	A																	
1階建ての家	26	B																	
2階建ての家3	79.5	A																	
山原邸	59.1	B																	
丸谷邸	49	A																	
神原邸	85.1	E																	
飯沼邸	101	B																	
安東邸	41	A																	
加藤邸	65.4	E																	
平野邸	92.2	A																	
大浦邸	43.1	A																	
嶋邸	92.2	A																	
川名邸	35.6	A																	
清水邸2	26.8	E																	
立川邸	31.3	A																	
清水邸3	20.3	E																	
貫吉邸	26	B																	
大岡邸	43.1	A																	
			57	20	16	11	10	37	17	6	4	10	90	5	53	30	3	7	2

対象の室が2階にある場合は●等黒塗り以示す。 出典は以下の通りである。①S3年『家を建てる人の為』②S7年『住宅建築の実際』③S10年『家の建て方』④S11年『中流住宅設計図』⑤S14年『保健住宅』

東西に中廊下を配置するといった非常に定型化されたものであった。しかしながら、食堂や、寝室等の諸室の配置に着目すると以下の類型を得ることができる(図10)。この類型をもとに室同士の関係性について分析をおこなう。

a型: 玄関に近接して応接室が配置される。居間は中央部分に配され、居間に近接して食堂が配置される。食堂は台所に近接し、寝室と直接行き来できる。また、寝室は玄関部分から最も離れた場所に配置される。b型: 玄関部分より応接室に近接する。居間及び食堂が中央部に並列或は、居間兼食堂室として配置される。食堂と台所は近接して配置される。また、寝室は食堂と間接的に接続され、玄関から最も離れた場所に設置される。c型: 玄関と応接室は近接し、居間が中央に配置され、食堂は北側に配される。台所と食堂は隣接して配置される。寝室と食堂と近接せず、玄関から最も離れる。d型: 玄関と応接室は近接し、居間と並列して老人室や、客用寝室などが配される。食堂は台所及び寝室に近接する。寝室は応接室から最も離れた位置に配される。e型: 玄関と応接室は近接し、家の中心に居間兼寝室が配置される。食堂は台所、居間兼寝室に近接し、玄関から寝室の機能を持つ居間兼寝室に中廊下を介して接する。

この類型からは以下の事が読み取れる。

卒業研究

大谷翔
大福哲
田中啓介
遊佐舜
原山雅也
岩渕直樹
塚田裕仁



●ディプロマ賞



大谷 翔
Sho OTANI

山家・鄭研究室
YAMAGA・CHEONG lab.

行政の余白を彩る
Coloring margin of government

行政機関と公共空間の混在した庁舎の提案
Proposal of cityhall is mixed administrative agency with public space

曾我部 斜めの壁面の位置付けの説明をしたほうがいいですよ。

大谷 長方形の執務空間に斜めの壁を2本入れて、その隙間に市民が集まる窓口を入れました。その壁に寄り添うように議事堂や窓口が挿入されることになっています。そして、こちらの壁は空間を隔てるという意味合いだけではなく、この中にベデストリアンデッキから流れてきた軸線が差し込まれるようになった形になっていて、その部分で行政と市民が関わるような動線が流れています。

山田 大谷君が設計した建物全体の美しさのような、割と非常に説明が細やかでいろんな心があると思う

のですけれど、全体の良さが全体が繋がっているのを見たときに、こんな建築ができたらいいなっていうのは、どこを見たら良いですか。

大谷 一番やりたかったことは道と議事堂との関係です。この議事堂とホールが、実は図書館と市役所とが別々の形ではなく、親子的な形になることを目指しました。そうすることで、役割としては別ですけど、建築としての一体感を目指しました。配置も親子的な関係で、その屋根の機能も似たようなものにするので、一体感を持たせることを考えました。

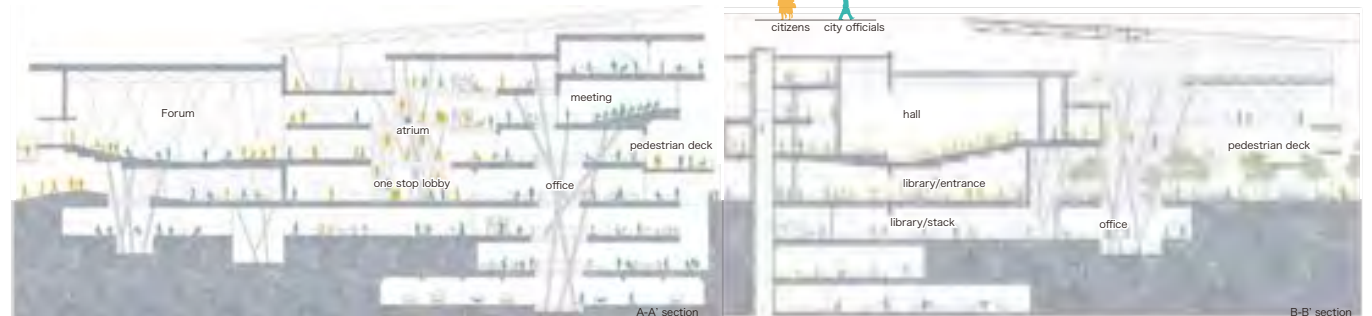


市民活動、街に彩りを生み出すために、
建築で空間、組織を再編し、更新していく

Plan



Section



● 優秀賞



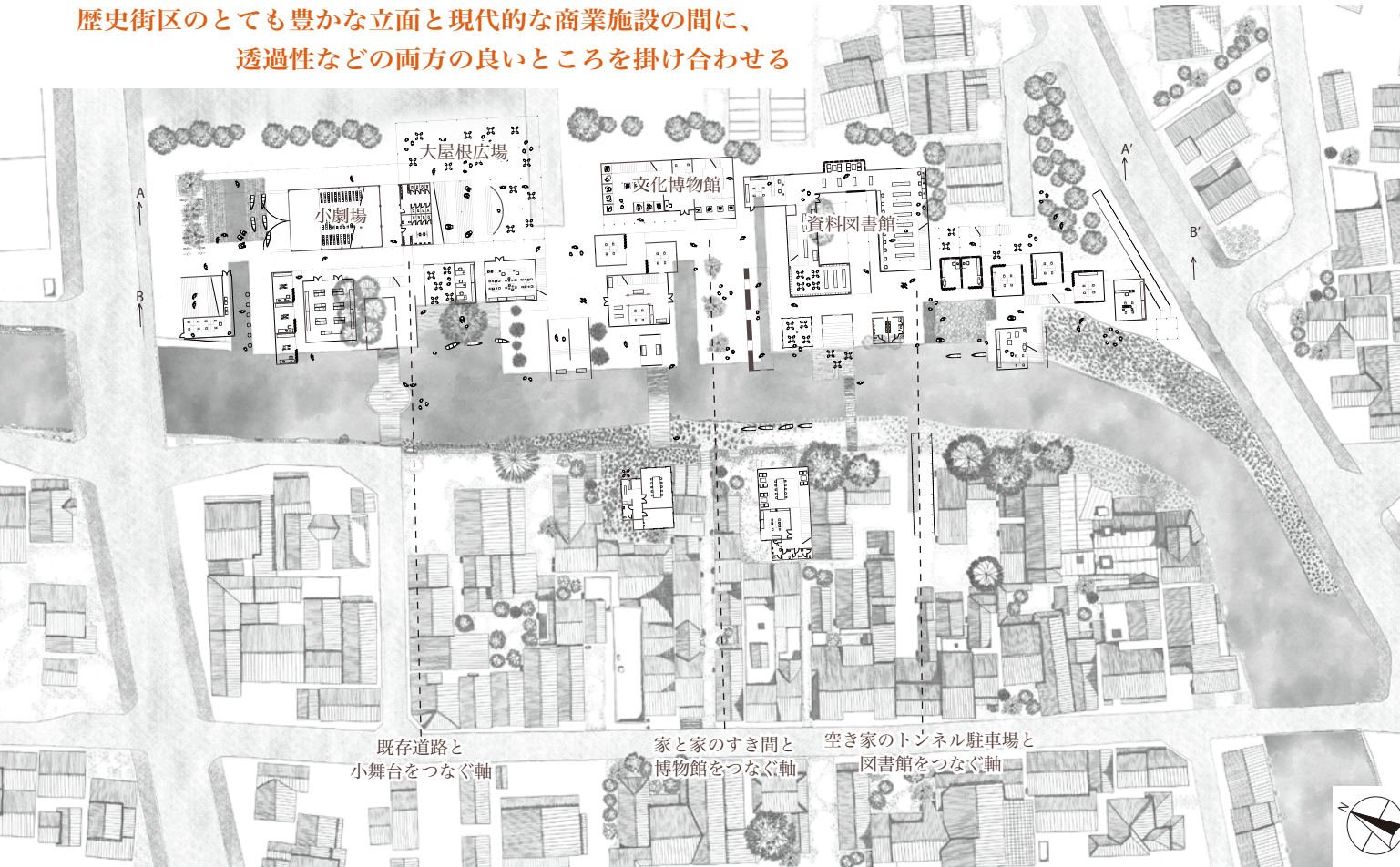
大福 哲
Tetsu OFUKU

重村・三笠研究室
SHIGEMURA・MIKASA lab.

流れる歴史とかわのふち
Edge of RIVER and HISTORY

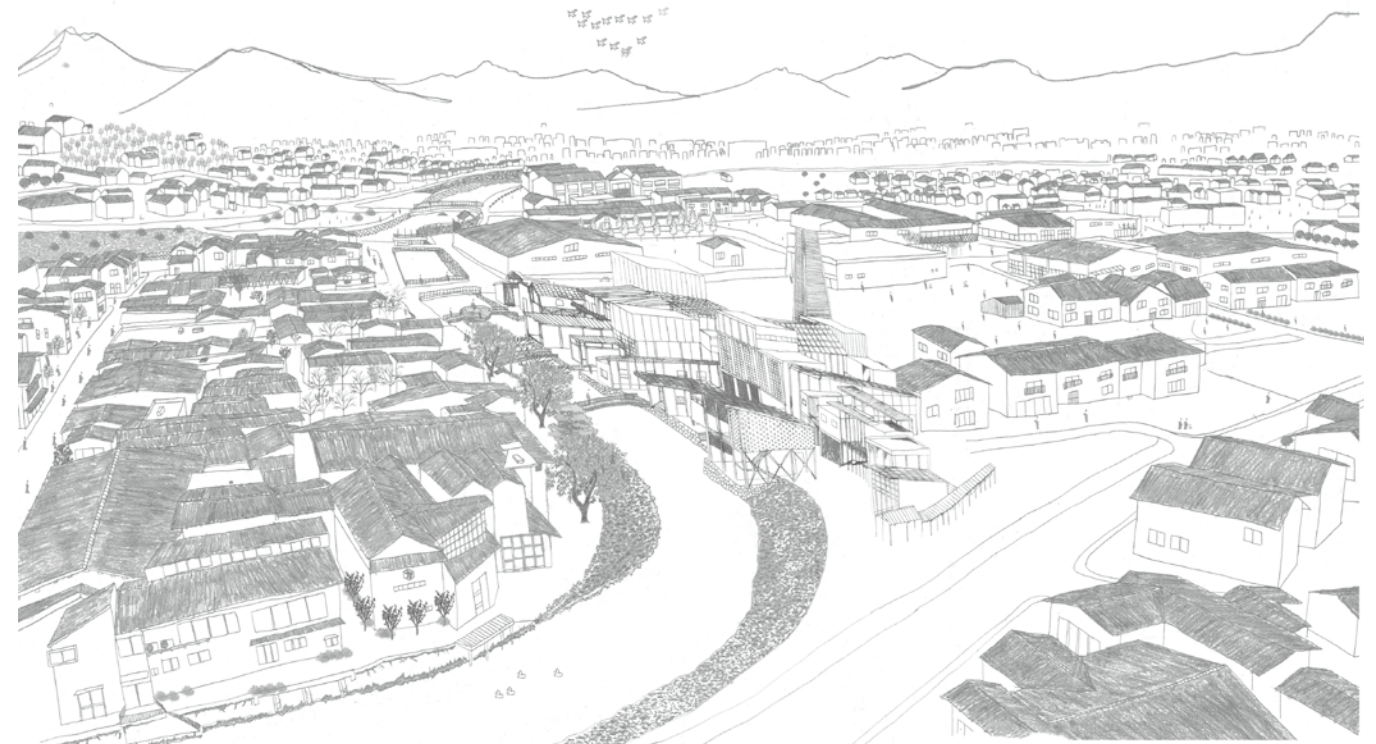
水辺空間を取り込んだ伝統文化伝承館
Waterspace with Traditional culture Museum

歴史街区のとても豊かな立面と現代的な商業施設の間に、
透過性などの両方の良いところを掛け合わせる



中井 配置計画はかなり細かく分棟していますが、何を手がかりにしたのですか。
大福 道の延長や小径の先に橋を掛けたりして、川沿いから東側に設計していきました。
中井 建物を何を手がかりにしたのですか。
大福 建物の配置は商業施設側に大きなボリュームを置いて、川沿いに小さなボリュームを置きました。そして、駅から人が来ることを想定して、入りやすい建物を裏側に置きました。
重村 川向こうの歴史街区とギャップをつくりだすため、モダンなデザインにしたのですか。

大福 そうです。
重村 そうだとすると、全然違うのではないですか。
大福 歴史街区のとても豊かな立面と現代的な商業施設の間なので、透過性などの両方の良いところを掛け合わせました。
山田 模型に良い印象があります。ただ、ご自身で歴史街区を仮設的という言葉を使うと、模型が成功したように見えます。模型の精度が高く、わりと現実的に見えます。今までのより成功の要素があると思いました。
柳澤 密度感がすごいと感じました。



●優秀賞



田中 啓介
Keisuke TANAKA
曾我部・吉岡研究室
SOGABE・YOSHIOKA lab.

移ろえる風景
The passing scenery

美波町日和佐再生計画
The rebirth plan of Hiwasa, Tokushima

重村 この建物だけを見ると、結構面白いことを考えていると思いました。シャフト状のものがあって、それから外側がしっかりしていて、入れ子でスペースができています。そういうのがやりたかったのだと思います。それで津波の時は、どこまで逃げたいのですか。

田中 津波の時は、2層目までがすべて浸水してしまうので、3・4層を避難する高さに設定しています。

重村 そのときにここが図書館だというのが説得力がないけれど、ここをもうちょっと広くすれば清々しい空間になったと思う。

柳澤 和風に見えるんです。やはり避難タワーなんですよ。

田中 そうですね。

柳澤 ごつい駐車場みたいな避難タワーがつけられている中で、それに対するひとつのアンチテーゼという風に僕は受け取っているんです。1階の広がりも含めて現代性みたいなものをアイデアに入れてほしかった。全体の意匠もすごくコントロールされているし、すごく良くできていると思うのですが、もうひとつ現代的なものを獲得してほしいと思います。



日常の場の核となり、景観に呼応する防災拠点施設



●優秀賞



遊佐 舜
Shun YUSA

曾我部・吉岡研究室
SOGABE・YOSHIOKA lab.

Linear Landscape

中井 せっかく線形のものを使って自由にやろうとしているのに敷地を飛び越えて周りをつながるとか、のびのびやってもよかったと思うのですが、どうですか。

遊佐 置かれている敷地の良くない状況を肯定的に捉えようと考えました。アプローチが一つという状況で高架下をくぐったら特別な空間になっているという状態を目指しました。

柳澤 やはり住宅のプランニングももっと独特のものがあってもいいかなと。設計は上手だと思います、綺麗だし。でもそれを支える生活のイメージが欲しいなと思いました。

遊佐 劇場空間の大きな螺旋と住宅を含む螺旋がすれ違います。住宅部は日常な生活の一部に劇場という非日常的な場面が挿入されるシーンがあり、日常を彩る道が生まれるというイメージです。

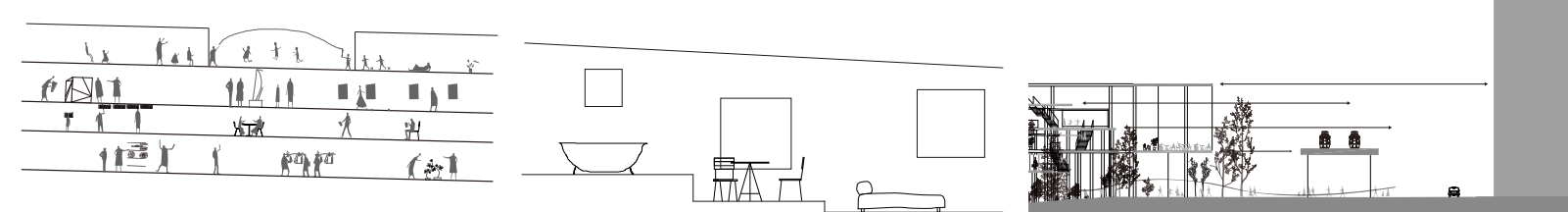
山田 エネルギッシュな提案で良いと思いました。ただ、プレゼンテーションが同じようなアングルが多いなと思いました。街の一角から見るといったようなものがあればもっと良い作品になった。

遊佐 大井町線がホームに到着するシーンで構造体の柱の位置を工夫しています。最初は柱が乱立しているように見えて、ある一点で視線が奥まで抜けるというような車窓からの風景を構想しました。

都市の道を歩いていると私たちはまるでひとりひとりが文章を書き連ねるかの如く道の上をそれぞれ編集しながらいるかのようである。
様々な環境との関係の中で物事を複雑に組み合わせながら生活している私たちをそのまま道が表している、
そんな気さえる。

常に出会いと別れが連続し一瞬一瞬の事象がつなぎ合わされて一つの都市の表情を纏うように、道と同居し関係し合っているような
建築ができたら面白いのではないかなと思う。

そこで起こる出来事ひとつひとつが一続きの道で紡がれて一つの風景になり
建物の表情が人の活動によって初めてそこで生まれ
変化し続けるような建築。



● 優秀賞



原山 雅也
Masaya HARAYAMA
中井研究室
NAKAI lab.

境界の融和 integrate city with castle park

松本市立博物館移転計画
Matsumoto City Museum relocation plan

重村 君がやりたいこういう空間の面白さというの分かりませんが、全体のボリュームが大きすぎませんか。

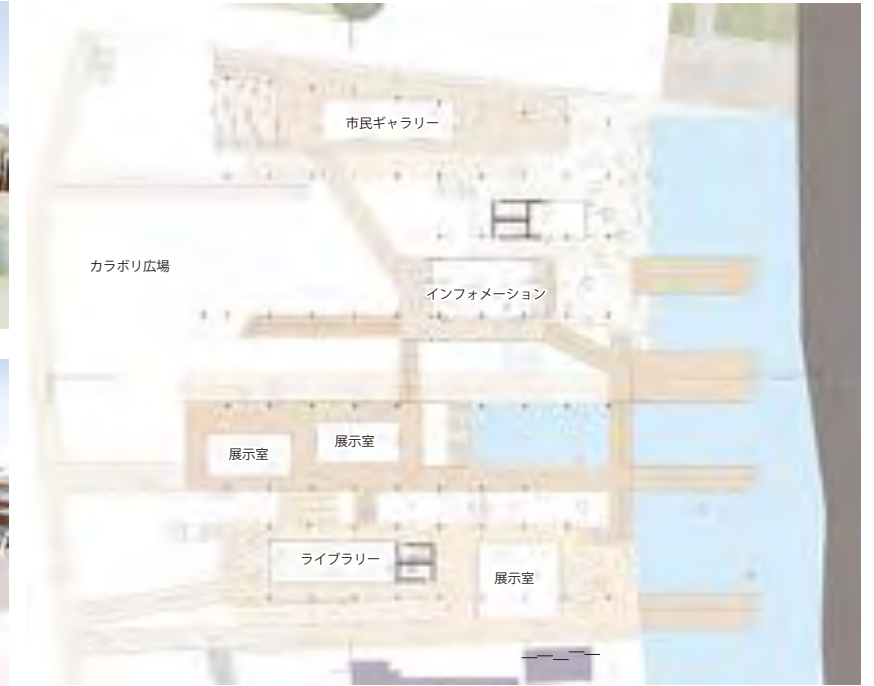
原山 面的に大きいだけで中は結構抜けています。さらにコンセプトとして公園の延長としての建築を考えています。

山田 規模の設定はどのように決めましたか。少し大きすぎる気がします。

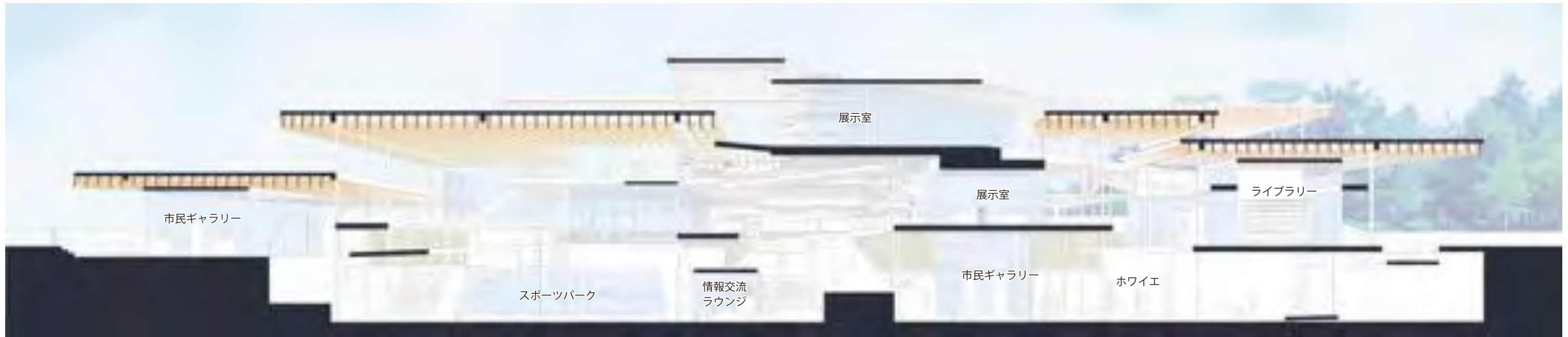
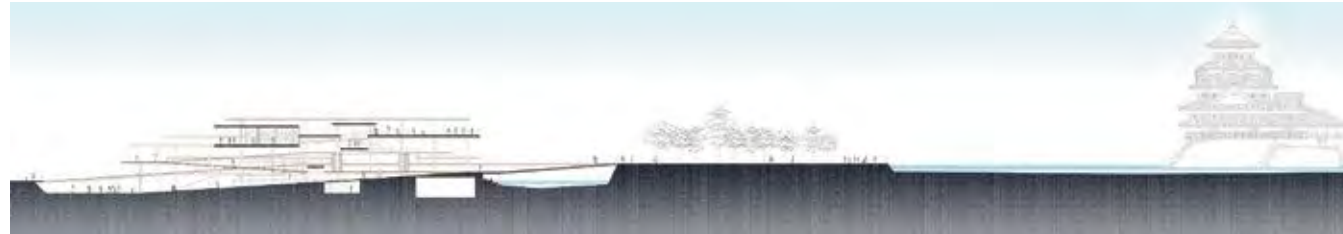
原山 松本市立博物館の面積を参考にして、それと公園的な外部を多く取りかかったので、このような面積になりました。

山田 論文を書いたことによってこの計画にどういった影響がありましたか。

原山 論文では城の面白さとして堀や曲輪など境界の強さみたいなものがありました。しかし、今回松本城の計画で堀を戻すことを考えたときに、昔堀があったことを観光客に知ってもらうことも大切ですが、堀になってしまうと境界としてあるだけで使えない空間になってしまいます。だから現代としてその境界を融和することを考えていました。



松本城公園と街の境界を融和する橋のような建築をつくる。



●ディプロマ賞



岩渕 直樹
Naoki IWABUCHI

内田・津田研究室
UCHIDA・TSUDA lab.

藤井厚二の住宅作品における
設計手法に関する一考察

A study on the Fujii Koji's housing design
method

平面計画にみられる変化の分析を中心として

Focused on the change of floor planning

1.はじめに

藤井厚二(1888-1938)は、環境工学の知見を生かし、真に日本の気候風土と日本人のライフスタイルや趣向に適合させた“日本住宅”を日本で最初に志向した建築家のひとりである⁽¹⁾。藤井の作品については今までに、環境調整の方法を中心にさまざまな研究がされているが、住宅作品全体から見た平面計画の変化について、不明な点が多い。そこで、藤井の住宅作品全体の平面計画にみられる変化を分析することで、藤井の設計手法の一端を明らかにすることを目的とする。

2.分析方法

藤井の住宅作品は48例あることが確認できた⁽²⁾。そのうち分析可能な平面図が収集できた23例(表1)を研究対象とする。平面計画の変化による設計手法を研究するうえで、①諸室の機能分離の動向、②平面形式の変化の2つの観点から分析を行う。

3.①,②の分類方法

①住宅内での機能分離の様子

居間や茶の間、主人室、書斎など、家族が使用する部屋を「家族空間」、応接間や客室のように接客に使用する部屋を「接客空間」として、機能・用途が異なる空間がどのような関係性で配置されているかを分析する。その結果、接客空間と家族空間が1つの部屋で「兼用」されているもの、襖によって「連続」するもの、壁や廊下によって「分離」しているものの、3つのパターンに分類することができ、異なる機能が混合するものと分離するものに分けられた(図1)。また1932年を境に機能が「兼用」「連続」から「分離」へと変化していくことが読み取れた(表1)。

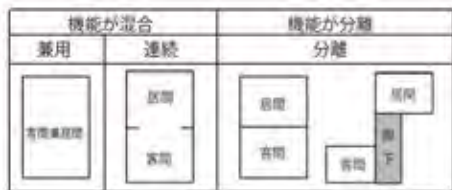


図1 「家族空間」「接客空間」の機能分離

重村 当時、プライバシーの空間が求められていた根拠は何ですか。

岩渕 欧米文化が入ってきて、プライバシーを配慮することが求められたからです。

曾我部 1期がABの形式で2期、3期がCDの形式という中で1期はほぼ平屋建てですよね(図2)。

岩渕 はい、そうです。

曾我部 2期、3期になると2階建てが中心になりますよね。

②平面形式の分類

玄関から各部屋に至るまでの動線に注目し、4パターンの平面形式に分類した。また、この4パターンの用いられ方から(表1)、A、Bの用いられた1917年から1928年を第1期、Cの用いられた1929年から1933年頃を第2期、Dの用いられた1932年頃から1937年を第3期とした(図2)。



図2 平面形式の分類

建築年	竣工年	建築物	構造	玄関形式		平面形式	分類
				種類	割合		
1917	1917	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関直通型	100%	A	第1期
1918	1918	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関直通型	100%	A	第1期
1919	1919	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関直通型	100%	A	第1期
1920	1920	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関直通型	100%	A	第1期
1921	1921	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関直通型	100%	A	第1期
1922	1922	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関直通型	100%	A	第1期
1923	1923	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関直通型	100%	A	第1期
1924	1924	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関直通型	100%	A	第1期
1925	1925	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関直通型	100%	A	第1期
1926	1926	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関直通型	100%	A	第1期
1927	1927	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関直通型	100%	A	第1期
1928	1928	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関直通型	100%	A	第1期
1929	1929	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関下型	100%	C	第2期
1930	1930	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関下型	100%	C	第2期
1931	1931	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関下型	100%	C	第2期
1932	1932	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関片廊下型	100%	D	第3期
1933	1933	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関片廊下型	100%	D	第3期
1934	1934	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関片廊下型	100%	D	第3期
1935	1935	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関片廊下型	100%	D	第3期
1936	1936	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関片廊下型	100%	D	第3期
1937	1937	藤井厚二 藤井厚二邸	木造	玄関片廊下型	100%	D	第3期

表1 機能分離と平面形式の変化

4. 機能分離と平面形式の変化

第1期(1917~1928年) AまたはBの平面形式の作品が用いられている。また、住宅内での機能は混合していることが多い。第2期(1929~1933年) 平面形式がCに変化する。これは当時、プライバシーを尊重するなど、一家一室のような在来の住宅に対する批判により、中廊下型の住宅が普及していたこと⁽³⁾が背景として考えられる。また、各部屋に行くときに他の部屋を介さずに移動できる点からみると、Bから変化し形式だと考えられる。第3期(1932~1937年) 平面形式がCからDへと変化する。玄関から各部屋までの動線はCと変わらないが、Dは中廊下の北側に部屋を置かず窓を設けている。これは藤井が著書⁽⁴⁾で、通風を重要視していたため、北側に片廊下を設けることで、Cよりも通風が確保できるDへと平面形式が変化したことがうかがえる。また、住宅内の機能が兼用、連続から分離へと変化していくことが読み取れた。以上のことから、第1期から第2期にA、BからCへと変化したことや、第2期から第3期に機能の分離化がみられたことから、住宅内での「独立性」が高まったことが考えられる。また第2期から第3期にCからDへと変化したことによって、「通風による開放性」が高められていったことが考えられる。

5.設計手法の分析と変化

藤井は、「独立性」「通風による開放性」といった2つの要素を住宅内に取り入れることにより平面計画を変化させていったと考えられるが、そのためにどのような設計手法をとっていたのかを分析した結果、下記の7つの手法が確認できた(図3)。この7つの要素は主に“廊下”を利用したもの

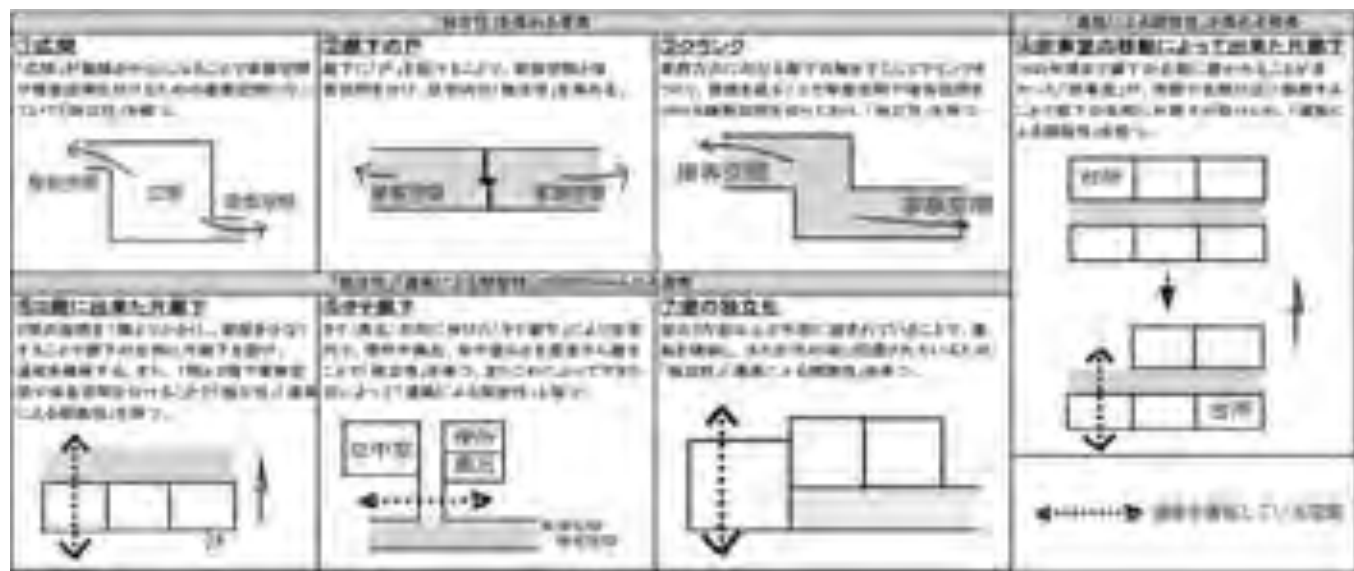


図3 平面の変化に対応する設計手法

であるため、廊下の形式に変化が見られたCからDの設計手法の変化を見ると(表2)、②戸、③クランクといった要素はDになると減少しているのに対して、④炊事室、⑤2階の利用、⑥タテ廊下といった要素は増加していくことが読み取れた。

6.おわりに

藤井厚二は、住宅内で通風を十分に確保しできる開放的な住宅を目指していた。しかし、当時の住宅は、プライバシーの守られた空間が求められていた。そこで藤井は、当時の社会の要求と自身の設計思想を両立するために、平面計画を変化させていった。その一環として「独立性」「通風による開放性」といった要素を持たせることのできる図3に示した設計手法を用いて住宅作品を作っていったと考えられる。

[註] (1)内田清蔵『住宅建築文献集成 第3巻』(柏書房 2009)(2)小泉和子『「日本の住宅」という実験』(社団法人農山漁村文化協会 2008)(3)西山卯三『すまい考古学現代日本住宅史』(彰国社 1989)(4)藤井厚二『日本の住宅』(岩波書店 1928)

建築年	住所	構造	平面形式	独立性			通風による開放性			独立性・通風による開放性		
				①広間	②戸	③クランク	④炊事室の有無	⑤2階利用	⑥タテ廊下	⑦独立化		
1917	大塚町	木造	C	○	○	○						
1918	大塚町	木造	C	○	○	○						
1919	大塚町	木造	C	○	○	○						
1920	大塚町	木造	C	○	○	○						
1921	大塚町	木造	C	○	○	○						
1922	大塚町	木造	C	○	○	○						
1923	大塚町	木造	C	○	○	○						
1924	大塚町	木造	C	○	○	○						
1925	大塚町	木造	C	○	○	○						
1926	大塚町	木造	C	○	○	○						
1927	大塚町	木造	C	○	○	○						
1928	大塚町	木造	C	○	○	○						
1929	大塚町	木造	C	○	○	○						
1930	大塚町	木造	C	○	○	○						
1931	大塚町	木造	C	○	○	○						
1932	大塚町	木造	D	○	○	○	○	○	○	○	○	○
1933	大塚町	木造	D	○	○	○	○	○	○	○	○	○
1934	大塚町	木造	D	○	○	○	○	○	○	○	○	○
1935	大塚町	木造	D	○	○	○	○	○	○	○	○	○
1936	大塚町	木造	D	○	○	○	○	○	○	○	○	○
1937	大塚町	木造	D	○	○	○	○	○	○	○	○	○

表2 CからDへの設計手法の変化

●優秀賞



塚田 裕仁

Hirohito TSUKADA

内田・津田研究室
UCHIDA・TSUDA lab.

駿河国益津郡田中城内の 武家屋敷の検討

*The examination of the Samurai's
premises in the TANAKA castle*

1.はじめに

静岡県藤枝市に所在する田中城は、江戸時代以前は「徳一色城」という名で、成り立ちは古く、約500年前から存在していた⁽¹⁾。東海道五十三次の22番目の藤枝との関係が深く、本丸・二の丸・三の丸からなる城郭はきれいな円形状をしているという特徴を持っている。その名残は現在の藤枝市の地図を見ても分かるほどのものである(図1)。



図1 現在の田中城跡地

本研究では、円郭式と呼ばれる特殊な形状の城郭中に建っていた、藩士が住んでいた武家屋敷や藩校「日知館」、「地方会所」などの施設がどのようなものであったかについて検討する。

2.使用した資料

「田中城内屋敷間取図」(図2・3)は田中城内に建てられていた武家屋敷について描かれたものであり、図の中には間取、畳の数、玄関および公的な建物のみ、その名が書かれている。しかし、一般の屋敷については居住者名が書かれていない。この絵図は、江戸時代末期⁽²⁾、田中藩の作事役所の役人を務めていた藤井六郎家に伝わったもので、藤井誠氏が所蔵する。



図2 田中城内屋敷間取図

絵図には、題名がない。なので、藤枝市郷土博物館などで使用されている仮称「田中城内屋敷間取図」を本論で使用した。

重村 この田中城の城郭は綺麗な円形をしています
が、円形が一般的な城の城郭だったのですか。

塚田 いいえ、違います。本来は四角形の「輪郭式」と呼ばれるものが一般的なものですが、田中城は輪郭式の垂流とも言える「円郭式」の形となっています。

重村 円郭式の城の数は多いのですか。

塚田 数個しかなく、田中城は円郭式の代表とも言われるような城です。

中井 現在も建物は残っているのですか。

塚田 ほとんど残っていません。藤枝市にある史跡田中城下屋敷という場所に、現在残っている田中城関係の建物である本丸櫓などが集められています。江戸時代当時からその場所に残っているものはありません。

3.検討

絵図を見て分かるように、田中城三の丸の建物はリング状に配置され、その外側と内側(二の丸側)に道路を持ち、敷地も外側の道路を前面道路とするものと、内側の道路を前面道路とするものがある。また、敷地は道路を区切りに、東西南北の4つの区画に分けることができる(図4)。



図3 一部拡大



図4 4区画の区分

また、「田中城内屋敷間取図」の居住者の参考として、「田中亀城之図」(図5)という絵図を使用した。

この絵図は現在静岡県藤枝市にある円妙山大慶寺に、田中藩の家老職を務めた重富家が納めた物である田中城内の住居者の名前が書かれており、図の中の人物はいずれも幕末期の藩士である⁽³⁾。この絵図が描かれた時期は所々に明屋敷があることから、明治維新後、移住が始まった時期と考えられる。その上で、明治2年に転出した⁽⁴⁾藤井六郎の名前があることから、明治2年よりは前であることが分かる。

「田中城内屋敷間取図」とは年代が5年程しか差がない為、「田中城内屋敷間取図」の居住者をこの絵図の住居者と考えた。

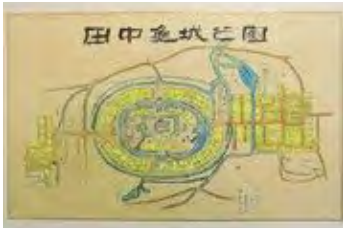


図5 田中亀城之図

3-1.役職と配置

田中藩は約600人の藩士がいたが、この田中城三の丸で暮らしていたのは、約70人である。その70人ほどの人たちの役職⁽³⁾は最高位の家老から使用人まで、様々であり、位などで城郭内に住む人を決めていたわけではないと思われる。

江戸末期の田中城と東海道を結ぶ主要道路は北西部に接続していた。「家老」はその北西部の主要道路からは遠い南東部の位置に屋敷を構えており、主要道路に近い敷地には「地方会所」や藩校「日知館」など公的な建物が建っていた。これは、この北西部の道路が危険な場所と考えていたためと思われる。

また、北側にあった藩校「日知館」に関係のある「師範」や「教場監察」は北側やそれに近い東側やに西側の区画でほとんどが暮らしていた。このことから三の丸の屋敷は役職の利便性を考えたうえで、住む場所を決めていたと考えられる。

西側の区画には、外側の敷地に使用人と思われる人が暮らしているという特徴があるが、使用人と同じ敷地内で3人の使用人と暮らしていたのは岡本男依という藩士のみである。西側には他にも使用人が暮らしている建物があり、そこからさほど離れていない場所では、使用人とは暮らしていない家老がいた。これらの使用人たちは、この家老の使用人である可能性が高い。これらのことから、田中城城郭内の武家屋敷の配置は藩士の役職に応じた利便性、城郭内の危険度などを考慮した上で決めていたと思われる。

3-2.各屋敷の建物

田中城三の丸の中には67の屋敷が存在し、70の建物があった。その中で、藩士たちが生活していた屋敷が63軒、藩校「日知館」など、公的な屋敷が7軒存在した。

藩士たちの生活する建物は、規模などに統一はなかったが、内側が前面道路になる屋敷の方が規模は大きい。一番規模の大きいものは東側の区画、内側で暮らす遠藤家の屋敷で68坪であり、部屋数も12部屋で一番多い。また、一番規模が小さいのは、南側の区画、外側の敷地の屋敷で、11.75坪である。だが、部屋数は3部屋で一番少ないわけではない。一番少ないのは、芹沢善太郎の屋敷や藤井六郎の屋敷で、2部屋だけである。

右の表は、坪数ごとの建物の数を表記している。

見て分かるように40坪台以下の建物が67のうち53の占め、この53の建物のうち、37の建物が外の敷地に建っている。規模の小さい建物が外側の敷地に多いことがわかる。

坪数	4	5	6	7
100坪台	4	50坪台	1	
90坪台	2	40坪台	11	
80坪台	0	30坪台	12	
70坪台	1	20坪台	22	
60坪台	6	10坪台	8	

坪数ごとの建物の数

玄関の位置、屋敷の形状、建物が敷地のどのあたりに建つか、絵図に注記される文字の向きから、建物の向きを判断した。

田中城の三の丸の武家屋敷の敷地は、その城郭の形状上、前面道路の方位は場所によって異なる。前面道路の方位と建物の向きを比較すると、三の丸の中に建つ70の建物のうち、61軒の建物が前面道路の方位と建物の向きが一致した。

すなわち、田中城の武家屋敷は太陽の向きなど自然の法則を無視し、前面道路に向かって建っている。

3-3.畳について

畳に注目してみると、すべての建物が多くの畳を使用しており、板の間と呼ばれるような部屋はほぼない。長屋にも畳が使用されている。

藩士の屋敷で一番畳が多く使われているのは東側の区画、内側の敷地に暮らす柴垣太右衛門の屋敷で、97畳の畳が使用されている。一番少ないのは西側の区画、外側の敷地に暮らす芹沢善太郎の屋敷出15畳である。比率でいうと藤井六郎の屋敷は12坪のうち11坪が畳であり、ほぼ全てが畳敷きの建物も存在した。

公的な建物となると、畳を100枚以上使用しているものもあれば、全く使用していない建物もある。藩校「日知館」では135枚もの畳を使用しており、三の丸の中でも一番の使用量となっている。

どの建物にも畳が敷かれているということは、三の丸の建物は畳を敷くことが当たり前になっていた、もしくは決まっていた可能性がある。

4.まとめ

田中城三の丸に建っていた武家屋敷は、様々な役職の藩士が暮らしていたが、暮らす場所はその役職に応じた利便性のある場所があった。

また、暮らす場所は家老のように危険性を考えて主要道路から遠いところに住むなど、選ぶことができた可能性があったことも分かった。

建物の規模は外側の敷地よりも、内側の敷地に建つ建物の方が比較的大きく、部屋数も多いが、建物の規模と部屋数が比例しているわけではない。つまり、広い部屋を数部屋もつ建物もあれば、細かい部屋を多くもつ建物もあるというわけである。

それらの屋敷は、円郭式と呼ばれる特殊な形状の城郭が故に自然の法則を無視したうえで、方位とは無関係に前面道路に向かって建っていた。

外側と内側で規模などの差はあったが、畳に着目した場合、内外にこれといった差はなく、ほぼ全ての部屋に敷かれていた。

[註]

(1)『甲陽軍鑑』の永禄十三年下旬の部分にて、「藤枝とくのいつしき、あけてのく」と記載されている
(2)藤井六郎が田中藩士を務めた年から想定(慶応元年～明治2年)
(3)広瀬邦行 編「駿州田中藩士(本多氏時代)歴史簿」2006年
(4)藤井六郎「国替に付入用等覚」より判断

井上 祐一

Yuichi INOUE



1951年 兵庫県三木市生まれ
1975年 神奈川大学工学部建築学科卒業
2000年 専門学校教員、設計事務所勤務を経て、文化学園大学(旧文化女子大学)短期大学部助教授
2004年 工学院大学大学院 工学研究科博士後期課程 建築学専攻修了 博士(工学)
文化学園大学(旧文化女子大学)短期大学部教授
現在 一級建築士事務所アーキラボ所属、神奈川大学、文化学園大学 非常勤講師

総評

卒業設計優秀作品講評会は、文字通り多数の学生の中から選抜された15名にふさわしく、各発表者の物怖じしない堂々とした態度に心地よさを感じた。迫力ある図面と模型は、プレゼンテーションを爽りあるものに仕立てていた。ことに模型については、後輩たちの協力があっての成果と聞くと、それは、先輩と後輩の連携にとって重要なことであり意義深いことでもある。多くの作品は、発表者の出身地の歴史や伝統を踏まえた計画、歴史的建造物の再利用、町の活性化など現在と将来をつなぐテーマを取り上げており、地に脚のついた思索とともに、地道で健全な建築への志向性を示すものが多かった。今後は、更に地域や場所を深く読み、その文脈を充分に捉えることにより、生活感に満ちた建築を育ててほしいと願っている。

発表は、長時間に及んだにもかかわらず、多くの参加者全員を引きつける卒業年次生の新鮮でのびのびした15作品に、研究・創作に携わる一人である私にも有意義な時間となった。

そして、「かな会」の多くの卒業生が今と未来をつなぐ卒業研究・修士論文の講評会に参加して、学生と卒業生の交流が活発になることを強く願っている。

柳澤 潤

Jun YANAGISAWA



建築家。東京工業大学特任准教授
1964年 東京生まれ
1992年 東京工業大学大学院修士課程修了
1992～2000年 伊東豊雄建築設計事務所勤務
2000年 コンテンポラリーズ(Contemporaries.inc)設立 現在に至る
2016年4月～ 関東学院大学建築・環境学部准教授
主な作品 みちの家、ルネ・ヴィレージ成城、塩尻市市民交流センター(えんぱーく)、逗子市小坪大谷戸会館、京浜急行電鉄黄金町高架下新スタジオ、材木座2012一等

総評

神奈川大学の卒業設計のゲスト審査員と呼ばれるのは今回で2度目です。まず感心するのは図面がしっかり描けていること、そして模型も丁寧に作られていること、この2点はどの大学と比較しても遜色ない素晴らしい成果だと思います。これは先生方の指導もさることながら神奈川大建築学科全体が大事にしてきたことが学生に自然に伝わっている、ということではないでしょうか。最優秀に選ばれた大谷君の案だけでなく優秀作品の大福君三等の田中君、四等佐佐君、五等原山君の案まで私の中ではほとんど差はありません。今年は平均してレベルが高かったけれども抜きんできた作品もなかった、とも言えます。僕は町田駅前を壮大なビジョンで計画した鈴木君の案に一票入れましたが、こうした一見規格外の計画が出てきたことは喜ばしいと思っています。最近は社会性、復興、商店街再生、リノベーションなど世の風潮の中にテーマが埋もれて、設計する理由を外から見つけてくることが少なくありません、僕はこのように社会の側から勝手に作られた与件に対して個人の創造力がどこまで戦えるのか、という点において卒業設計を評価するよう努めています。そういう意味では佐佐君の案は無理はあるけれども建築を設計する楽しさ、みたいなのが感じられて好感を持ちました。神奈川大学の伝統を重んじながら次の世代の学生にはさらに新しいことにチャレンジして欲しいと願っています。

山田 良

Ryo YAMADA



1991年 神奈川大学工学部建築学科卒業・ディプロマ賞
1993年 芝浦工業大学大学院修了
1993-2003年 Kajima Design 建築設計グループ勤務
2003-2006年 文化庁新進芸術家海外研修員としてノルウェー・オスロ在の後、Jensen & Skodvin Arkitektkontorシビルアーキテクト
2011年 東京藝術大学大学院博士後期課程修了。博士(美術)
現在、札幌市立大学デザイン学部准教授
ロシア・ノボシビルスク建築芸術大学客員教授

風景を成す卒制

25年ぶりに神大建築学科の意匠系卒制発表会へ参加しました。密度の高いドロ잉の表現力と堂々たる口頭プレゼンテーションに感服しました。それぞれのテーマは、都市とのつながり、地域文化やコミュニティの継承、根源的な建築のあり方への考察など多様でとても見応えがありました。

卒業制作は、概ね巨大プロジェクトになってしまいます。都市レベルのプロジェクトなどで「風景を成す」といえるのですが、この視点が少なかったように思いました。数万㎡という規模の建物が、離れた所からどう見えるのか。日没時にはシルエットになったり、既存の建物群や山並にどう繋がるのかなど必然と気になるパースペクティブではないでしょうか。殆どの視点が「内側にワールドをつくる」ほうに傾いているように思いました。

欲望としての卒制

卒業設計の場では造形の話で戦って(盛り上がって)ほしいと願っています。岡本太郎流に「のっぴきならない魂の叫び」とでもいみましょうか。ストレートに「とにかくやってみたかった形」に触れてほしいのです。論理的に展開するのは簡単ではありませんが、饒舌に述べる必要はないのです。地域や計画の観点からだけで提案は生れていないと思います。皆さんの作品は「欲望としての卒制」でもあるのです。そのことは自分勝手なデザイン作品でなく、建築が生まれる時にあるべくしてあるエネルギーであるはずです。というように自分自身にも言い聞かせているのですが…。またお会いしましょう！

重村 力

Tsutomu SHIGEMURA



卒業研究 概評

2015年度は、私にとって最後の卒研指導である。卒業設計は、このごろ自然志向・地域文化志向の傾向がある。大福君の平田市への提案は、伝統的な水路空間の対岸に、開発の始まった農地があるアンバランスな風景を、どのように調和させるかについて、現代性とは何かという問いを立てて工夫した優れた環境デザイン提案である。大谷君は新しい新潟市役所を構想し、市民施設を包含したものに換え、信濃川に沿った中心核にふさわしいダイナミックな空間造形に再構成する意欲的な提案を行った。田中君は徳島日和佐の木造の町並みの中で、日常は核となり、津波時には避難施設となる施設を、景観に呼応するタワーとして提案した。今年の顕著な傾向は、郷里や調査地の環境を取り上げて、その場所の力を引き出し、造形化空間化しようとする優れた作品が多く見られた。

卒業論文は聞いていて、いつも勉強になる。今年は特に退屈させない熱のこもった研究を多く見る事ができた。保土ヶ谷宿や養蚕家屋の長屋門や藤枝の田中城の研究は大変興味深く、またジャン・ブルベの工法のわが国への導入や住宅建具や階段の研究は、日本の住宅近代化の過程について、考えさせられるものがあった。

内田 青蔵

Seizo UCHIDA



2015年度の作品に思うこと

卒業設計は、第一次審査で感じたことは、一般的に図面の迫力の無さだった。見たとたん、圧倒されるような緊迫感や緊張感を感じさせてくれる図面がほとんどなかったことが気になった。模型も何を伝えようとしているのかが曖昧なものが多かったように思われる。その理由のひとつは、1年間という時間の中でのタイムスケジュールが考えられていないことによるように思われる。構想をもとにデザインを十分練ることは大切だ。しかしながら、どんなにいいものを頭の中で描いても、それを図面化し具体的に示さない限り、絵空事で終わってしまう。もっと製作時間を重視し、1年間の総まとめとしての気概を感じさせる表現による作品を強く求めたい。そのためにも、私の研究室では卒業論文を選ぶ学生が多いが、設計の学生たちにも改めてゼミでの発表と議論をより活発に求め、コンセプトのデザイン化を早めに進める様に指導したいと反省している。いずれにせよ、来年はもっといいものを提案して超えてみせるぞ!という目標となる作品や論文が必要だ。そうした作品や論文があるからこそ、次の後輩たちが奮起する。そうした連関性を継続するためにも、学生たちに改めて奮起を促したい。

山家 京子

Kyoko YAMAGA



総評

論文から振り返ってみたい。よい論文には、「適切な主題」「確かな作業」「論理的な表現力」が必要である。「適切な主題」はタイトルを見ただけでだいたいわかり、調査研究では素材のよさに左右されることも多い。「確かな作業」は資料を丁寧に読み解いたり、調査・分析を着実に行うなど、時間をかけなければ獲得できないものである。それらを合わせて最終的に「論文」の形式に落とし込み展開しなければ、よい論文にはならない。そこに求められるのは、論理的思考とともに、人に伝える「表現力」でもある。最後の論文としての「表現」が不足していたために「確かな作業」が見えてこない場合が往々にあり、惜しいと思う。結論が見えたところで安心せずに、最後まで走りきってほしい。卒業設計に関しては全般的にあっさりとした印象があり、その分、修士設計の思考と作業の積み重ねりが生み出す力強さの方が頼もしく見えた。例年、どちらかという卒業設計の方が思い切りよく楽しくて、修士設計の方が巧みでありながら物足りないことが多いのだが。プログラムに関心があり、なかなか建築の設計に入っていけない学生が多い中で、ディプロマ賞を受賞した大谷さんにはかなり早い時期からフラグメンタルな造形がイメージされていたように思う。「壁」「柱」「ヴォイド」といった建築要素を対象としたボリューム感のあるスタディは、建築に対する純粋な関心を見るようで清々しかった。

学部設計課題 優秀作品

建築デザインⅢ

建築デザインⅡ

建築デザインⅠ

設計製図Ⅱ

設計製図Ⅰ



担当

曾我部 昌史(教授)、岡村 晶義(非常勤講師、アトリエ鯨)、佐々木 龍郎(非常勤講師、佐々木設計事務所)、渡瀬 正記(非常勤講師、設計室)

Masashi SOGABE (Professor), Akiyoshi OKAMURA (Guest Lecturer, Atelier KUJIRA), Tatsuro SASAKI (Guest Lecturer, SASAKI ARCHITECTS & ASSOCIATES), Masanori WATASE (Guest Lecturer, an office)

吉岡 寛之(特別助教)、稲岡 寛之(M1,TA)、神田 貴之(M1,TA)

Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Hiroyuki INAOKA (M1, Teaching Assistant), Takayuki KANDA (M1, Teaching Assistant)

総評

二課題とも大きく改変した。複合的な建築であることに変わりはないが、第一課題では劇場・展示・図書による文化施設から、「街のインフォメーションセンター」に変更した。敷地も、東京東部にある水路に面した歴史ある地域を選んだ。地下鉄駅に接続し、水路との間には遊歩道が横切る。前年度までの学生たちによる先例がないため、イメージを掴むのに手間取ったようだ。多様で特徴的なコンテキストへの分析的な視点が、インフォメーションセンターとして空間構成に連動しながら、居場所としての豊かさを獲得できた提案が高い評価を得た。

第二課題は、居住関連の複合建築ではあるが、「50人が暮らし50人が泊まれる、この先の暮らしの場」として共同での生活空間を構想することを求めた。シェアハウスやコワーキングスペースなどの先駆事例を紹介し、より発展した提案を期待したが、多くの学生が、一般的な集合住宅などで前提となっている暮らし方から離れることができないようだった。

課題内容の他に、提出物についても改変を行った。例えば、両課題で一般図への着彩を禁じ、第二課題では動線計画図や構造計画図を求めた。多くの提出物で一定の効果が得られたように思う。

(曾我部)

非常勤講師 経歴

岡村 晶義
Akiyoshi OKAMURA



1954年生まれ、早稲田大学産業技術専修学校(現早稲田大学芸術学校)卒業、teamzooアトリエモビル及び象設計集団を経て独立、アトリエ鯨を設立、東京理科大学非常勤講師及び法政大学兼任講師を経て現在に至る。日本建築学会作品選奨、土木学会デザイン賞など受賞

佐々木 龍郎
Tatsuro SASAKI



1964年生まれ、1987年東京都立大学(現首都大学東京)工学部建築学科卒業、1989年同大学院修士課程修了、工学修士、1992年同博士課程満期退学、1992年(株)デザインスタジオ建築設計室、1994年株式会社佐々木設計事務所入社、現在同代表取締役

渡瀬 正記
Masanori WATASE



1968年生まれ、1992年東京工業大学工学部建築学科卒業、1992年妹島和世建築設計事務所勤務、1993年～1997年青木淳建築計画事務所勤務、1998年一級建築士事務所設計室設立

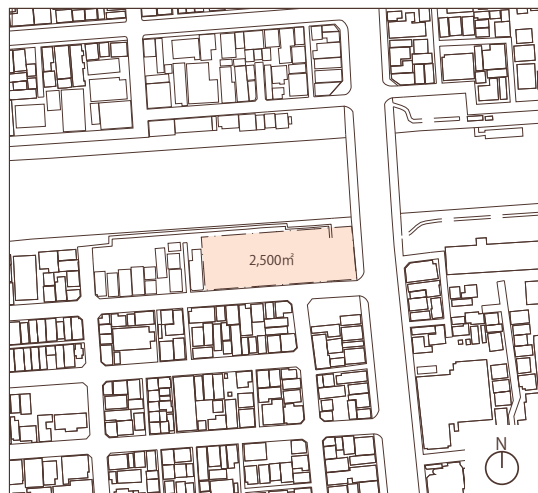
第一課題 街のインフォメーションセンター

観光案内所と地域のコミュニティ施設のコンプレックスである。観光案内所としては、この街に初めて来た人の受け皿として、観光地やイベント予定などの情報を提供する観光サービスの拠点であり、また、地域の歴史を紹介する展示スペースや、地域の特産品を販売するショップ、カフェなどを有する。地域のコミュニティ施設については、周辺地域の観察と分析から、各自が加える用途を検討し建築の計画として提案する。集会所などの他、高齢者介護や育児の支援の場や、炊事場や倉庫を備えた防災拠点として位置づけることも有効だろう。敷地の持つ性格をどのように活かし、周辺地域の持つ課題にどのように対応するのか。調査と分析を元に、積極的な提案につなげて欲しい。また、本計画では、地下鉄駅を有する既存の公園内を敷地として設定している。地下鉄駅コンコースとの繋がりや、建物周辺の外構計画についても、合わせて提案を行うこと。

【設計条件】敷地：東京都江東区清澄3丁目

用途地域：準工業地域、商業地域 敷地面積：2,500㎡

建ぺい率：80% 容積率：500%



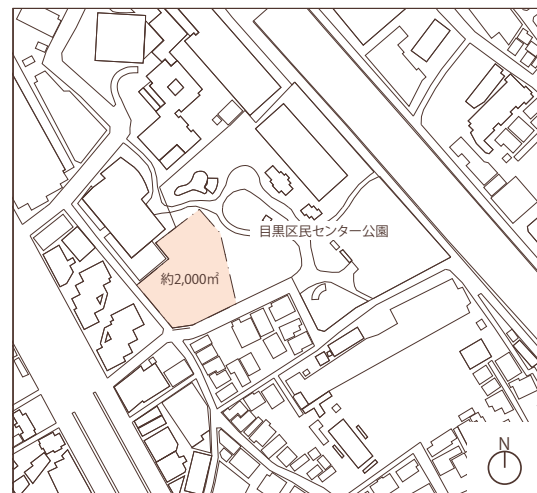
第二課題 50人が暮らし50人が泊まれる、この先の暮らしの場

共に暮らすことで豊かな時間が生み出される、そういう住空間の設計である。住宅部分での共有のスタイルは、それぞれ独自に考える。シェアハウスやシェアアパートメントのように、共通の趣味やライフスタイルが独特の共有スペースを生むようなものなどが、その代表的な例である。それぞれの個室だけではなく、共有して活用される場が生み出す可能性を考えながら、各自で構想する。そして、合計100人が暮らす場を支え、地域と関連づける空間として、オフィスとサービスのスペースを計画する。オフィスでは、一次利用のために貸しだされるスペースを持ち、また、複数の会社が設備や空間を共有するような形式で提案する。サービスでは、隣接する公園の環境を生かした別棟を公園内に計画し、床面積は200㎡以内とする。敷地とその周辺が、この先の豊かな暮らしの場となるよう、積極的な提案となることを期待する。

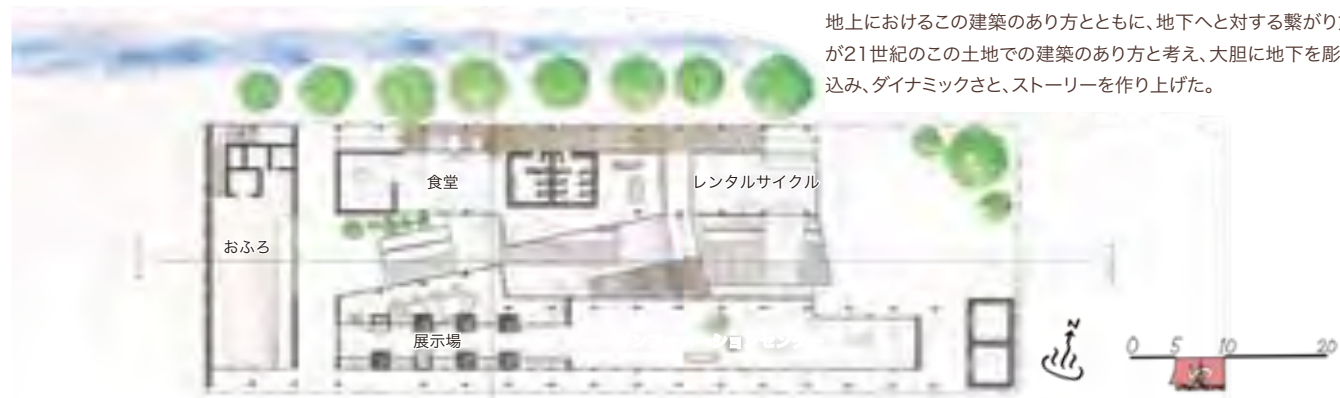
【設計条件】敷地：東京都目黒区目黒2丁目

用途地域：第二種住居地域 敷地面積：約2,000㎡

公園部面積：約10,000㎡ 建ぺい率：60% 容積率：300%



武藤 匠 ふかがわふっかふかふる
Takumi MUTO Fukagawa-Fukka-Fuka-Furo

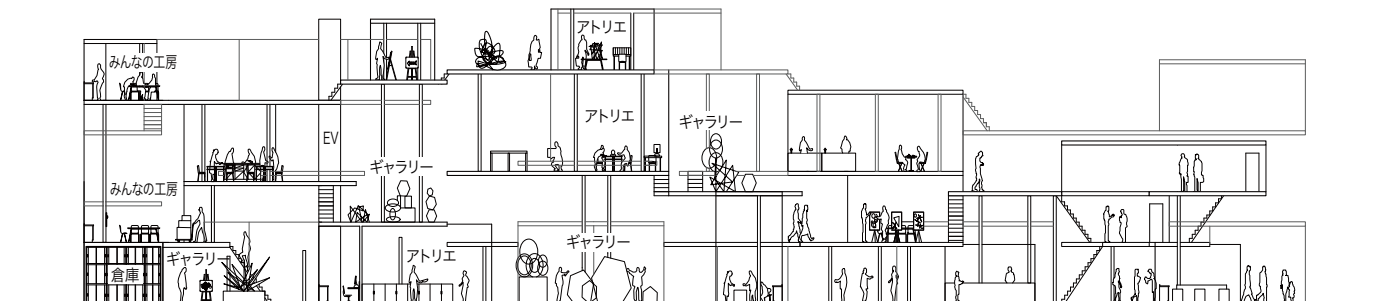


地上におけるこの建築のあり方とともに、地下へと対する繋がり方が21世紀のこの土地での建築のあり方と考え、大胆に地下を彫り込み、ダイナミックさと、ストーリーを作り上げた。

森島 駿平 to
Shunpei MORISHIMA



各所に設けられたレンタルスペースは、清澄白河で新たな挑戦をしたい人々の一つのクッションとなっている。ファサードは、下町の密度に近いものにし、新しいながらも、地域になじめるものとした。また、外部を設けることによって、密度がありながらも息苦しさを感させない設計とした。



杉山 夏海 育む
Natsumi SUGIYAMA Bring up



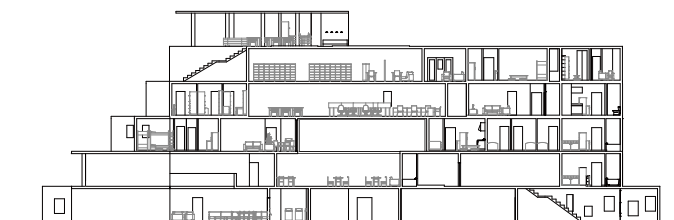
千々松 海図 活動の風景
Kaito CHIDIMATSU Scenery of the activity



大学とは個の集まりであり、小さなスケールの集合体である。
その個とスケールが集まることによって多様な時間が形成される。
そんな時間の構成を集合住宅に取り込みさまざまな街での活動や
大学生の過ごす時間との連続性によって形成された多様な空間を絡めた
「活動の風景」を提案する。



植物が好き、自分で庭を作りたい、
植物関係の仕事をしている等々、ここで暮らしているのはそういう人たち。
住宅には一つの庭が隣接しており、そしてその庭は他の住人、宿泊者、
あるいはここを訪れた地域の人たちの目に留まり、互いに会話が生まれる。
こういったことがこのコレクティブハウスの様々な場所で
起こることによりコミュニティーが様々な場所で育まれていく。



担当

重村 力 (教授)、曾我部 昌史 (教授)、三笠 友洋 (特別助教)、木島 千嘉 (非常勤講師、木島千嘉建築設計事務所)、八島 正年 (非常勤講師、八島建築設計事務所)

Tsutomu SHIGEMURA (Professor), Masashi SOGABE (Professor), Tomohiro MIKASA (Assistant Professor), Chika KIJIMA (Guest Lecturer, Kijima architect and associates), Masatoshi YASHIMA (Guest Lecturer, Yashima architect and associates)

大岡 晃 (M1, TA)、曳田 百香 (M1, TA)、大福 哲 (B4, SA)、中山 勝瑛 (B4, SA)

Akira OOKA (M1, Teaching Assistant), Momoka HIKIDA (M1, Teaching Assistant), Tetsu OFUKU (B4, Student Assistant), Katusaki NAKAYAMA (B4, Student Assistant)

総評

「海辺のセミナーハウス」は、長者ヶ崎の海岸環境を活かしながら、滞在型施設であるとともに教育学習施設であるセミナーハウスという社会空間をどう構成するかが課題である。市川君の提案は、大きく三群に分け、それぞれの群に中庭を与えた雁行クラスターでまとめ、群が一つずつタワーをもつデザインである。海辺のオープンスペースの良さを損なうことなく、凝集と開放のバランスがよい。高低差の変化をタワー空間でつなぐと言う断面構成も成功し、優れたデザインとなった。千々松君の提案は、敷地にバランスよくオープンスペースをとりながら、建築群は外廊下を介在して高密度にクラスター化している。この案はやや平行四辺形の不思議な基準線でまとまりをつくりながら、断面方向は海に向かう緩やかな階段状構成と、海に沿った高低の変化が微妙に組み合わせられていて、全体として豊かな斜面地景観を創り出して、セミナーハウスにふさわしい建築群を構成している。

「教科教室型の学校」は、教科の学習空間の拠点とクラス生活の拠点を組み合わせた中学校を、大学に近い松本中学校の敷地で考える課題である。複雑にねじれた谷戸状の敷地をどう活かすかもポイントである。武藤君の提案は大屋根で学校を覆う提案となったが、もともとは敷地に生える数少ない樹木群をプロットし、これらを尊重して中庭や前庭をつく

り、その周囲に各空間を配置するという方法から始まった。大屋根はこれらをおおらかにつなぐものとして光や緑をおおきく建築に招き入れる仕掛けとして考案され、優れたデザイン提案に帰結した。吉川君の提案は、裏となる空間をつくらないという設定から出発し、雁行配置と連続する三つの特徴ある中庭の考案によって、全体構成をコンパクトにまとめあげることに成功した。校舎の屋根の一部をあげ、ハイサイドライトを取り入れる断面も適切である。

(重村)

非常勤講師 経歴

木島 千嘉
Chika KIJIMA



1966年生まれ、1989年早稲田大学理工学部建築学科卒業、1991年東京工業大学大学院修士課程修了、1991年(株)日建建設入社、1999年O.F.D.A associates所属、2001年木島千嘉建築設計事務所設立

八島 正年
Masatoshi YASHIMA



1968年生まれ、1993年東京芸術大学美術学部建築科卒業、1995年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了、1998年八島正年+高瀬夕子建築設計事務所共同設立、2002年八島建築設計事務所に改称

第一課題 海辺のセミナーハウス

横須賀市と葉山町の境界部に位置する長者ヶ崎(1.5ha)に神奈川大学のセミナーハウスを計画する課題である。セミナーハウスは、短期(2~3泊)または長期(数泊~2週間)の宿泊滞在を前提としたワークショップや発表会、展示批評会等の活動の場である。研修機能、宿泊機能、管理機能、研究所機能の設置を条件とした。これらの機能に加え、周辺居住者の海辺の自然景観を楽しむ散策やレクリエーションなども想定した上で、海辺の自然条件を活かした造形として愛される建築をデザインすることが求められた。

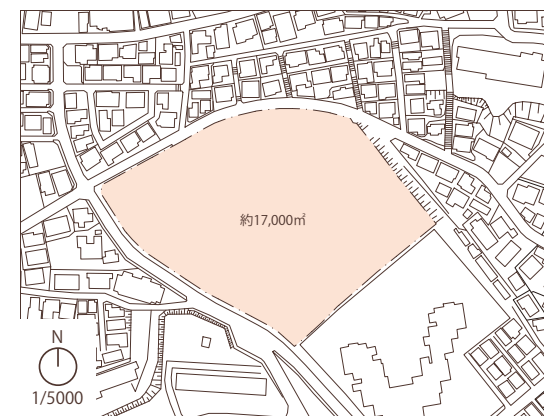
【設計条件】 敷地:長者ヶ崎 神奈川県三浦郡
葉山町下山口周辺 面積:約12,000㎡



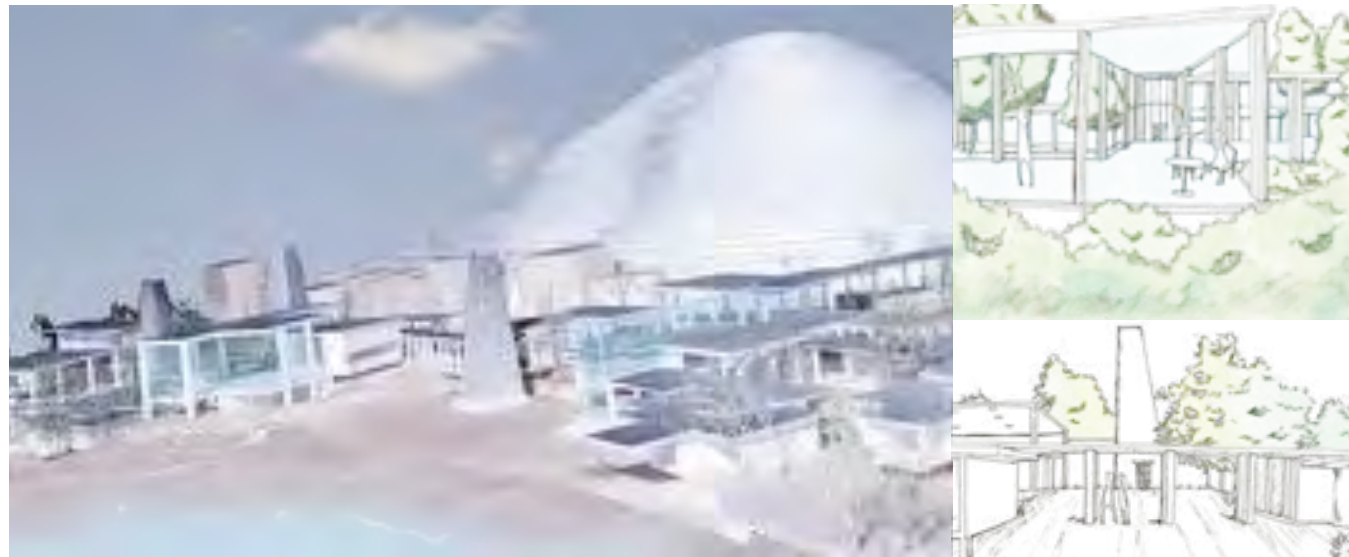
第二課題 中学校 (生徒たちの知的冒険)

都市中心部の住宅地に隣接する中学校の計画である。中学校の形式はこれまでの特別教室型(特別教室+普通教室)から進展した教科教室型とした。敷地は横浜の特徴的地形である谷戸地形の中に位置し、周囲は戸建住宅、公団住宅、分譲マンションなどが取り囲んでいる。傾斜面の地形を積極的に取り込みつつ周辺の状況に対応した、場所性をよく読んだサイトプランニングを環境デザインを心がけることが求められた。なお、本課題と並行して開講された講義では、オープンスクールから教科教室型の考え方や学校空間計画の工夫について解説がなされ、科目間の相乗的学習が企図されている。

【設計条件】 敷地:松本中学校神奈川県横浜市神奈川区
三ツ沢下町30-1 面積:約17,000㎡
建ぺい率:60% 容積率:150%



市川 貴一 3塔と遊歩道
Takakazu ICHIKAWA Three Towers and Promenade



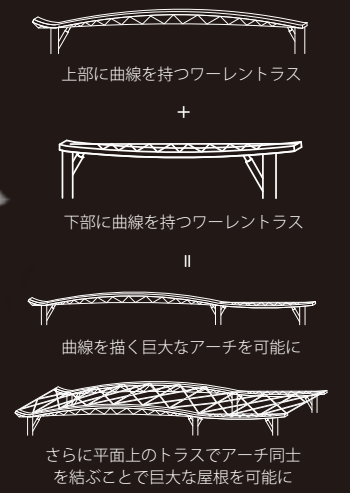
吉川 覚 3つの中庭
Satoru YOSHIKAWA Three Courtyards



千々松 海図 パーゴラの下で
Kaito CHIDIMATSU Under the Pergola



武藤 匠 Title
Takumi MUTOH



担当

山家 京子(教授)、重村 力(教授)、三笠 友洋(特別助手)、吉岡 寛之(特別助手)、猪熊 純(非常勤講師、成瀬・猪熊建築設計事務所)、柳澤 潤(非常勤講師、コンテンポラリーズ)

Kyoko YAMAGA (Professor), Tsutomu SHIGEMURA (Professor), Tomohiro MIKASA (Assistant Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Jun INOKUMA (Guest Lecturer, NARUSE・INOKUMA ARCHITECTS), Jun YANAGISAWA (Guest Lecturer, Contemporaries.inc)

野田 雄大 (M2、TA)、木下 優奈 (M1、TA)、大谷 翔 (B4、SA)、西山 哲平 (B4、SA)

Yudai NODA (M2, Teaching Assistant), Yuna KINOSHITA (M1, Teaching Assistant) Syo OTANI (B4, Student Assistant), Tepei NISHIYAMA (B4, Student Assistant)

総評

本科目は、小・中規模施設の設計課題を通して、建築を成立させる計画的な基礎を学ぶとともに、自らが設定したテーマを建築化する方法の修得を目標としている。3つの課題を設定し、建築のプログラム及び空間構成において、周辺環境との関わりを意識したデザインを促している。

「第一課題：公園に面して建つ地域図書館」では、図書館の建築計画を丁寧に解きながら、かなりのヴォリュームを占める開架図書室をどう扱うかが鍵となる。「第二課題：まちなかに建つサテライトキャンパス」は都心の積層型建築の建築的解法と、地域に対して開いたデザインがポイントである。「第三課題：Rurban House」は都市(urban)と農村(rural)が会うエッジな敷地に、近隣とシェアできる空間の提案を求めた住宅課題である。

大橋さんは、ランダムに開口を開けた皮膜で積層したヴォリュームを包み込むサテライトキャンパス、住宅では通り庭の外壁に部のような開口を設けるなど、外部と介する面の作り方が秀逸である。馬鳥さんは、図書館課題、住宅課題双方において中心を囲うように不規則にボックスが配置された平面を試しており、卓越した造形力を示している。

(山家)

非常勤講師 経歴

猪熊 純
Jun INOKUMA



1977年生まれ、2002年東京大学工学部建築学科卒業、2004年東京大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了、2004年～2006年千葉学建築計画事務所勤務、2007年成瀬・猪熊建築設計事務所設立、2008年～首都大学東京助手

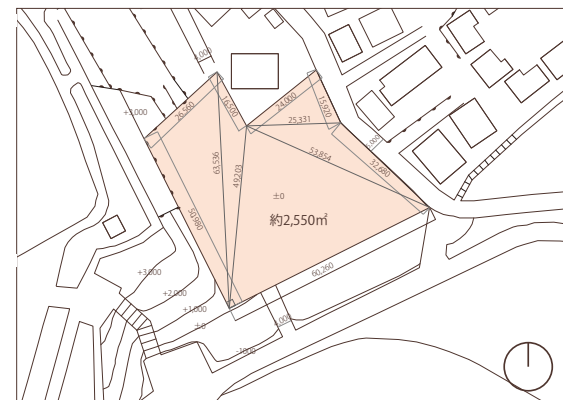
柳澤 潤
Jun YANAGISAWA



1964年東京生まれ、1992年東京工業大学大学院修士課程修了、1992～2000年伊東豊雄建築設計事務所勤務、2000年コンテンポラリーズ(Contemporaries.inc)設立 現在に至る
東京工業大学特任准教授、2016年4月～関東学院大学建築・環境学部准教授

第一課題 公園に面して建つ地域図書館

岸根公園の一角の住宅地と隣接する敷地に地域図書館を計画する。書籍の保管・管理と閲覧という図書館の基本機能を満たしつつ、図書館の今後の在り方やコミュニティ施設としての役割について考えることを求めている。さらに岸根公園との空間的繋がりをふまえた、外部アクティビティの構想と一体的なランドスケープデザインを要求している。



【設計条件】 敷地面積：約2,550㎡ 用途地域：第一種低層住居専用地域
建ぺい率：60% 容積率：100%

第二課題 まちなかに建つサテライトキャンパス

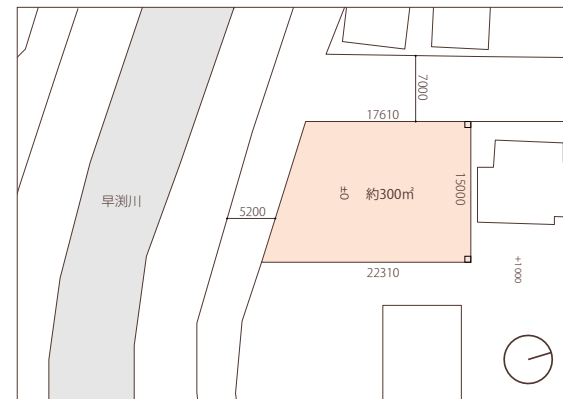
関内地区に神奈川大学サテライトキャンパスを計画する。近年、社会との関わりから新たな学びや研究が生まれることを期待し、多くの大学がまちなかにサテライトキャンパスを設置している。また、大学は空間的にもプログラムの的にも、積極的に地域に開かれていくことが求められている。都心(まちなか)の建築は郊外住宅地郊外住宅地や田園地帯とは異なり、高密度であることが求められる。敷地いっばいに建ち上がる建築を対象に、豊かな空間を有するデザインを要求している。



【設計条件】 敷地面積：約450㎡ 用途地域：第二種中高層住居専用地域
建ぺい率：80% 容積率：600%

第三課題 Rurban House 一地域に開かれたスペースをもつ住宅一

都市と農村のエッジに位置する敷地にシェアスペースをもつ住宅を設計する。敷地は港北ニュータウンの計画範囲の縁辺部にあり、北西側に戸建住宅が建ち並び、南西には果樹園や畑などの農的環境が維持されている。家族構成は夫婦+子ども2人の4人家族である。+αの空間として、近隣の住民との関わりを持つ活動を行うためのスペースを計画することを要求している。活動内容は各自が自由に計画する。



【設計条件】 敷地面積：約300㎡ 用途地域：市街地調整区域
建ぺい率：60% 容積率：200%

馬鳥 夏美
Natsumi BATORI

本の丘



水上 翔太
Shota MIZUKAMI

寄り道



宮本 彩加
Ayaka MIYAMOTO

交ざるトコロ



緑→事務の人
赤→一般の人
東側断面パース

大橋 千夏
Chinatsu OHASHI

間抜け



金子 友幸
Tomoyuki KANEKO

MY TUBE



吉村 圭司
Keiji YOSHIMURA

つなぐ



唐鎌 涼
Ryo KARAKAMA

interact



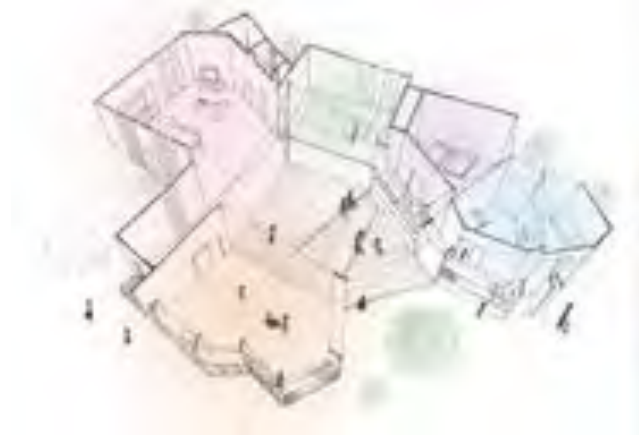
竹島 大地
Daichi TAKESHIMA

Crystal Building



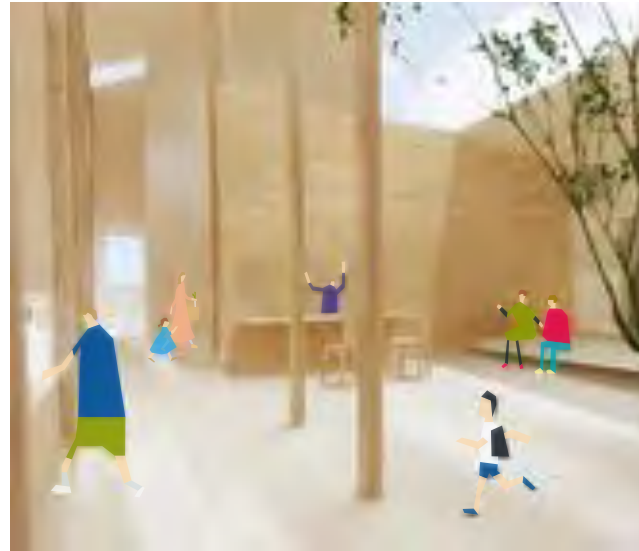
馬鳥 夏美
Natsumi BATORI

境界を解くおもちゃ棚



大橋 千夏
Chinatsu OHASHI

開閉する家



中村 圭那
Keina NAKAMURA

距離0mで共存する混生体



吉武 昂毅
Koki YOSHITAKE

温故知新



担当教員

中井 邦夫 (教授)、津田 良樹 (助教)、吉岡 寛之 (特別助教)、鄭 一止 (特別助教)、鈴木 信弘 (非常勤講師、鈴木アトリエ)、ベラ・ジュン (非常勤講師、ISSHO建築設計事務所)

Kunio NAKAI (Professor), Yoshiki TSUDA (Assistant Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Ilji CHEONG (Assistant Professor), Nobuhiro SUZUKI (Guest Lecturer, Suzuki Atelier), Jun VERA (Guest Lecturer, ISSHO Architects)

担当TA,SA

漆原 卓 (M2, TA)、岡田 啓佑 (M2, TA)、中野 聡太 (M1, TA)、三浦 みづき (M1, TA)、生田目 一馬 (B4, SA)、原山 雅也 (B4, SA)

Taku URUSHIHARA (M2, Teaching Assistant), Keisuke OKADA (M2, Teaching Assistant), Sota NAKANO (M1, Teaching Assistant), Mizuki MIURA (M1, Teaching Assistant), Kazuma NAMATAME (B4, Student Assistant), Masaya HARAYAMA (B4, Student Assistant)

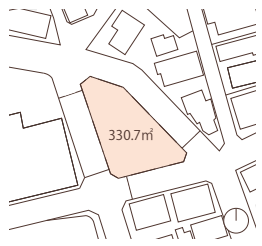
授業プログラム

建築学科全学生必修最後の設計製図科目として、鉄筋コンクリート造の建物の基礎的な設計方法および図面・模型による表現の習得を目指している。本年度はいくつかの演習課題および、設計を行った。設計課題では選抜作品による発表講習会を行った。

第一課題「提案型集合住宅」

(課題説明文)

住宅地内の敷地に、老夫婦のオーナーが所有し様々な世代の居住者とともに住む集合住宅を計画する。敷地は、四周で道路に面する三角形の区画であり、公園のそばの立地で、商店街にも近い。敷地周辺の条件を最大限に活かしながら、この場所に住む様々なタイプの世帯それぞれの生活を具体的にイメージすると同時に、そうした個性の異なる複数の居住者が住む集合住宅ならではの楽しい提案/空間を求める。また、そのイメージや独自性を図面と模型で表現すること。



(設計条件)

・構造形式:鉄筋コンクリート・壁式構造
・法規制等の条件・・・住所:神奈川県西神奈川3-9-16 / 地域・地区:市街化区域/第1種住居地域 / 防火地域:準防火地域 / 敷地面積:330.7㎡ / 建ぺい率:70%(今回は無視してよい) / 容積率:200%

授業内容

- 1) トレース課題1:「私の家」(設計:阿部 勤)
意匠図、詳細図(鉛筆書き、1/200、1/50)
- 2) 設計課題1:「提案型集合住宅」
- 3) トレース課題2:「萩塚の長屋」(設計:藤野 高志)
意匠図、詳細図(鉛筆書き、1/100)
- 4) トレース課題3及び模型課題:
「神奈川大学旧3号館」(設計:山口文象/RIA)
意匠図、詳細図(鉛筆書き、1/200、1/50)
- 5) 設計課題2:「神大ミュージアム」

非常勤講師 経歴



鈴木 信弘 Nobuhiro SUZUKI
1963年生まれ、1986年神奈川大学卒、1988年神奈川大学大学院修士課程修了、1988年～1996年東京工業大学工学部建築学科助手、1994年鈴木アトリエ一級建築士事務所開設

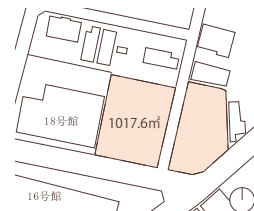


ベラ・ジュン Jun VERA
1976年ベネズエラ生まれ、1986年来日、2001年神奈川大学工学部建築学科卒業、2002年株式会社ISSHO建築設計事務所共同設立(2005年改定)

第二課題「神大ミュージアム」

(課題説明文)

神奈川大学18号館および21号館の敷地に、神奈川大学が所蔵する収蔵品(文献史料、記録史料など)を企画、常設展示する展示室やインフォメーションセンターを含むミュージアムを設計する。敷地は、大学と住宅地との境界部に位置する緩やかな傾斜をもった角地であり、大学キャンパス・マスタープランにおいて、16号館と共に大学の「ゲート・ゾーン」と位置づけられており、大学の対外的な顔となる空間となることが期待されている。多様な活動を含み込む可能性を最大限引き出す提案を求める。



(設計条件)

・構造形式:鉄筋コンクリート・ラーメン構造
・法規制等の条件・・・住所:神奈川県六角橋3丁目 / 地域・地区:第二種中高層住居専用
地域 / 防火地域:準防火地域 / 敷地面積:1017.6㎡ / 建ぺい率:70%(法定は60%) / 容積率:150%(最大)

佐久間 みのり

Minori SAKUMA

URBAN×GREEN



水上 翔太

Shota MIZUKAMI

CENTER



佐藤 聖

Masaki SATO

小道を通り抜けて



馬鳥 夏美

Natsumi BATORI

とける



吉武 昂毅

Koki YOSHITAKE

風と光と樹と路と



大橋 千夏

Chinatsu OHASHI

ぐるぐる



担当教員

中井 邦夫（教授）、津田 良樹（助教）、三笠 友洋（特別助教）、鄭 一止（特別助教）、鈴木 信弘（非常勤講師、鈴木アトリエ）、ベラ・ジュン（非常勤講師、ISSHO建築設計事務所）

Kunio NAKAI (Professor), Yoshiki TSUDA (Assistant Professor), Tomohiro MIKASA (Assistant Professor), Iiji CHEONG (Assistant Professor), Nobuhiro SUZUKI (Guest Lecturer, Suzuki Atelier), Jun VERA (Guest Lecturer, ISSHO Architects)

担当TA,SA

漆原 卓（M2、TA）、岡田 啓佑（M2、TA）、中野 聡太（M1、TA）、三浦 みづき（M1、TA）、生田目 一馬（B4、SA）、原山雅也（B4、SA）

Taku URUSHIHARA (M2, Teaching Assistant), Keisuke OKADA (M2, Teaching Assistant), Sota NAKANO (M1, Teaching Assistant), Mizuki MIURA (M1, Teaching Assistant), Kazuma NAMATAME (B4, Student Assistant), Masaya HARAYAMA (B4, Student Assistant)

授業プログラム

設計製図Iでは、木造住宅を主な題材として、トレースや模型製作、課題設計などの具体的な作業を行うことで、建築設計およびその表現方法の基礎を学ぶことを目的としている。本年度は下に示すいくつかの演習課題及び、小屋と住宅の設計を行った。設計課題では選抜作品による発表講評会を行った。

授業内容

- 1)トレース課題1:「私の家」(設計:清家 清) 意匠図(鉛筆描き、1/50)
- 2)トレース課題2:「白の家」(設計:篠原 一男) 意匠図(鉛筆書き、1/50)
- 3)設計課題1:「クラインガルテン(市民農園)に建つ『小屋』」
- 4)トレース課題3:「水道道の家」(設計:鈴木 信弘) 意匠図(鉛筆書き、1/50)
- 5)模型製作課題1:「水道道の家」(敷地および軸組み、1/50)
- 6)トレース課題4:「浜田山の家」(設計:吉村 順三) 詳細図(鉛筆書き、1/50、1/20)
- 7)設計課題2:(下記参照)
- 8)トレース課題5:「前川國男自邸」(設計:前川國男) 詳細図(鉛筆書き、1/50、1/30)
- 9)模型製作課題:2「前川國男自邸」(敷地および軸組、1/50)

第一課題「クラインガルテン」

(課題説明文)

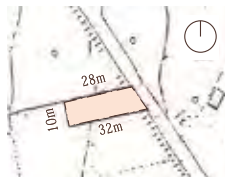
ある家族が、横浜市神奈川区羽沢町の菅田・羽沢農業専用地区内の一画に、農業用地を借りて趣味の農業を営むことになった。積極的にスローフード・スローライフを進めるための、自然環境に配慮した「小屋」を設計して下さい。

(設計条件)

・小屋の面積は自由だがなるべく小規模(10畳以下)が望ましい(ピロティや土庇など吹きさらしの空間は面積に含めない)。

なお、最低限、次のことができること

- ・農作業の準備、農具の収納
- ・簡単な炊事
- ・トイレ
- ・談話、くつろぐ(仮眠程度ができる場、原則宿泊はしない)
- ・内外を使って、15人程度(3~4家族)で行う収穫祭



第二課題「セカンドハウス」

(課題説明文)

河口湖に浮かぶ「うの島」に、セカンドハウスを設計してください。既成の考え方やスタイルにとらわれない、この島の環境を活かした、日常生活から離れたセカンドハウスならではの、自由な発想の空間による新鮮なライフスタイルの提案を期待します。

(設計条件)

- ・原則として木造とし、架構を具体的に表現すること。
- ・延床面積は、100㎡前後とし、外部空間は自由に設定してください。
- ・配置は島全体から好きな場所を選んでください。

クラインガルテン

佐塚 将太

Shota SAZUKA

集い人の小屋



掛川 真乃子

Manoko KAKEGAWA

四季を食べるラウベ



鈴木 啓生

Yoshio SUZUKI

Licht Farm



セカンドハウス

横山 優莉奈

Yurina YOKOYAMA

鶉ノ島協奏曲(コンチェルト)



松尾 祐奈

Yuna MATSUO

road. ~溶け込む家~



小林 賢一

Kenichi KOBAYASHI

Ataovy anaty faribolana





NEWS

課外活動ほか
学外コンペ
留学生レポート



テクノサークル 建築をつくる会

具体的な活動

普段、模型や図面のみでしか建築を表現したことのない学生達に対し、小規模ながら実際に使われる空間の製作を主たる目的とする。自分たちで建築を構想すること、建築を作ること、できた建築を体験することという一連の流れを、3年生という早い段階で体験することは、素材やスケールに対するリアルな感覚の獲得を促すと同時に、様々な生活の場面に対する観察力を育成することが期待できる。また、製作に至るさまざまな共同作業の中での行動力や調整力を育成し、さらには学年の枠を超えた交流の場の形成を期待する。



どんなことをコンセプトに活動したか

六角橋商店街で実際に行われる闇市で、祭りの休憩所とイベント会場という2つの用途を1つの敷地で計画した。

柔軟に用途変換することが可能なデザイン、イベント空間の演出をコンセプトとした。

用途変換する仕組みとして、線材の1つ単位が連続してできるさまざまな組み合わせを思考し、暗闇の中で連続した単位が美しく照らされることを期待した。マテリアル



として、私たちの生活に身近な木材を利用し、線材ならではの空間をデザインした。また1つ単位のものを集ませることで祭りのファサードとして歩行空間を演出する。ライブのときは、ファサードを椅子に分離することで歩行空間と休憩所を一体化させ、見通しの良いライブステージの空間を作り上げた。



石田研究室

まちは、人・モノ・建築・自然など、ありとあらゆる雑多なもの同士が集まってできています。また、モノの集まり方は距離感や寸法、素材感の関係で決定されています。どうしたらより居心地の良い空間になるかは、モノや事象を観察し関係性を踏まえて解を出していく必要があるのです。

日常的で身近な風景や空間のなかに、デザインのヒントがあふれています。温故知新、時間を経た歴史的な民家や街並みを通して現代の建築デザインに生かすことも大切です。本研究室では、たくさんの建築を実際に見ること



が何より重要だと考えています。気持ちの良い空気感を体感しながら、身体感覚を磨くこと。また、建物の更新やまちのストックとしての建築の在り方の調査・研究や都市型の集住体(人と人との集まり方)を通して具体的に提案すること。デザインコンペにも積極的に応募するなど、常にチャレンジしてゆきたいと考えています。



石田 敏明
Toshiaki ISHIDA

経歴

1950年 広島県生まれ
1973年 広島工業大学工学部建築学科卒業
1973～81年 伊東豊雄建築設計事務所
1982年 石田敏明建築設計事務所設立
1997年～2015年 前橋工科大学工学部建築学科 教授
同大学院工学研究科建築学専攻 教授
2015年～神奈川大学工学部建築学科教授

六角橋商店街 デザインプロポーザル

横浜市神奈川区六角橋商店街において、アーチおよび街路灯の全面リニューアルが決まり、総合的なCIを含むデザインプロポーザルを本学工学部および大学院工学研究科内で実施した。選考の結果、井上裕子さん(当時重村研究室博士前期課程2年)の「六角橋商店街を優しく彩るアーチ」が選考案として採択された。

そして、この度、井上裕子さんの「六角橋商店街を優しく彩るアーチ」が竣工した。今回のアーチは、ステンドグラスをはめ込んだ鮮やかなデザインとなっている。アーチの高さ約7メートル、約300メートルの大通りに7基架けられた。屋根部分のステンドグラスに太陽の光が透けると、路上にピンクやオレンジなどの影ができる。アーチと街路灯45本には、商店街名にちなんで所々に六角形がデザインされている。





第4回 SRF賞学生部門 佳作

高木弘之、三浦みづき、
Sofie Maj Sorensen

「みんなで考える安全で快適な街づくり」をテーマに、「次の大震災があと数年で東京、大阪などの大都市で発生する」と仮定し、その時何が起きるかを考え、私たちにできることは何かを、新規性、進歩性、有効性の審査基準から判断し評価する。

鉄筋コンクリートの柱に施工が容易なシートを巻き、構造の強度を上げる「SRF工法」を活用し、街の情報発信の拠点となるような広告の提出や、災害時に情報等の掲示を行うことができるコンスペースの提案をした。



Cannabis bank international
architecture competition 最優秀賞

児玉貴典

台北のビルの屋上には、違法なバラック群が広がっている。

そのバラック群は、違法ながらも行政は黙認しているというパラドックスが起こっている空間がある。その空間に、多くの人が違法と認識しているが、世界的に医療用など合法化が進められている大麻のお店を作ることで、その空間の曖昧さから大麻の推進も進み、また、屋上にパブリックスペースを作ること、超過密都市である台北に、グランドレベルと住居部という二つのレイヤー以外に、もう一つのレイヤー(世界)を作ること、大麻の推進以外に都市自体にもポジティブな影響を与えるという提案。

まちの活性化・都市デザイン競技 奨励賞



「熙熙攘攘」
足立将博、中野聡太

「公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくり」と位置付けられている富山市の魅力を高めるという課題に対し、街全体に外出を促すきっかけをつくり、交流機会を創出していくことで、市民自身が街の魅力に気づき、街が子供から高齢者で溢れ、にぎやかな街に姿を変えていく提案が評価され、入賞した。



第14回 JIA 大学院修士設計展 2016

野口 この美[最優秀賞]

公開審査・講評会が田町の芝浦工業大学芝浦キャンパスにて開催され、野口この美(当時重村研究室修士2年)の「都市のもう一つのファブリック-無垢の創造性を解放する場所-」が最優秀賞を受賞した。作品の詳細は24~27ページに記載されている。



トウキョウ建築コレクション2016
全国修士設計展 菊井 悠央[14選]

公開討論会が代官山のヒルサイドプラザにて開催され、菊井悠央(当時曾我部研究室修士2年)の「状態としてのお寺」が一次審査通過作品の14選に選出された。



第27回 JIA 神奈川建築WEEK
横濱建築祭2016
大学卒業設計コンクール

遊佐 舜[柳澤潤賞]

みなとみらい線馬車道駅にて毎年開催されている横濱建築祭の一環である大学卒業設計コンクールにて、遊佐舜(当時曾我部・吉岡研究室4年)の「線景 風景を結ぼう一筋の道」が審査委員賞(柳澤潤賞)を受賞した。作品の詳細は48~49ページに記載されている。



第1回 北関東卒業設計展
～まちと建築～

秋山 晃士[寺内賞]

卒業設計展実行委員会主催による「まちと建築」-建築の可能性について-にて秋山晃士(当時曾我部・吉岡研究室4年)の「ヨコの暮らし-慣れ親しんだ場所で高齢者を見守る住環境-」が審査委員賞(寺内賞)を受賞した。

台湾留学記事

曾我部研究室修士2年
児玉貴典
 Takanori KODAMA



私は、台湾科技大学に留学しています。
 台湾に来てから、多くの台湾人に日本と台湾は似ているのに何故、台湾に来たのかと聞かれます。実際、似た様な文化や、コンビニをはじめ多くの日系企業があります。しかし、その中でも、大小様々な文化の違いがあります。

その一つとしてはライフスタイルです。台湾ではシェアルームが非常にポピュラーで、学生用の家ではキッチンがない物件が非常に多いです。また、亜熱帯気候であり非常に日射が強いためか窓が換気用の小さな窓しかないような家も多く、内部環境はあまりよくないと感じます。

しかしその反面、外部をよく活用しています。コンビニには食事をするためのスペースがあり、また各地に、公園や寺院、文化施設に付随した広場が多くあります。そこでは、休日だけでなく平日、昼夜問わず屋台などで買った飲食物を片手に、将棋や太極拳、雑談をしている家族連れやご老人、学生などが多くいます。

そのような外部で生活するという文化が台湾には根付いており、都市を感じながらの生活が、日本と似ているようで似ていない文化や気質を生んでいるのではと思います。

それらの台湾とはまた日本らしさとはというものを考える機会によって、自分の考えを改めて整理することができ1日1日が貴重な体験になっています。



日本留学記事

曾我部・吉岡研究室
Chloé Chazalon

国立モンペリエ高等建築学校より



For this year of exchange program, I joined Sogabe's Laboratory at Kanagawa University. I experienced working in group with people working differently, and it was very interesting. For example, during the workshop KU+USF with the University of Florida, I enjoyed work with Japanese and American students and mix different ideas to make a project. As I don't speak Japanese, it was little bit frustrating because I couldn't join more classes and sometimes it was difficult to communicate with teammates. Despite that, I received a warm and encouraging welcome from all the students and the university staff. Studying architecture here is way different from what I learned in France; there is a true sense of community and you can speak freely to the teachers, also projects are built so it gives real responsibilities. So, even if students are independent, they are supported and advised. For the second semester, I had only three classes, so I took advantage of my free time by visiting Japan and understanding this unusual culture by reading books. As an architecture student, Japan is the best place to learn about architecture, and experience the city by yourself. I think this year in Japan has changed my world view; it will influence the rest of my future as an architect. This year has gone too quickly, but I have some unforgettable memories of places I saw and friends I've made; I hope come back someday!



日本留学記事

曾我部・吉岡研究室
Sofie Maj Sørensen

デンマーク王立芸術アカデミー建築大学より



I spend one semester at Sogabe Lab and furthermore I attended two classes every week. One studying the history of architecture and one class studying the elements of landscape architecture.

For me this semester in Japan has been an incredible experience of both architecture and of course the culture of Japan.

The study at Kanagawa University compared to The Danish Academy of Architecture is completely different in many ways. As a student at KU you are much more involved with real architecture projects and the focus is more on construction. In Copenhagen the focus can be tremendously artistic and undefined.

It has been fantastic to study at Kanagawa University and I would always recommend other students to go on exchange in Japan.



日本留学記事

曾我部・吉岡研究室
Romain Marchetti

国立モンペリエ高等建築学校より



I've been one year in Kanagawa University in the Sogabe Laboratory from September 2015 to July 2016. It was a fantastic year. First of all Japan itself is very interesting, every street around us question ourselves about scales and proximity. I have learnt a lot by walking through the city, it is the opportunity for us to compare with our native country. Japan manages to create peotry and sensitivity in one of the biggest city of the world by creating little streets, diversity with different types of housing and a lot precision in the details. Japanese streets are never the same and it is a constant lesson for us.

Secondly the lessons at school were also interesting, even if i didn't understand everything due to the difficulty of communication. In fact i would have like to work on some projects with the teaching of an architect to better understand japanese architecture, but it is true that having to speak japanese is a real inconvenient. But anyway I could work on my thesis and ask freely some questions to japanese people and for that i am very thankful too all of them, japanese people are glad to share their culture and it is a real gift for us that i would like to return anytime if a student of Kanagawa university comes in my university in France. The workshop is a good place to study and everything you need is there, material for model, computers, printers, tools, and of course a good atmosphere between students and teachers!



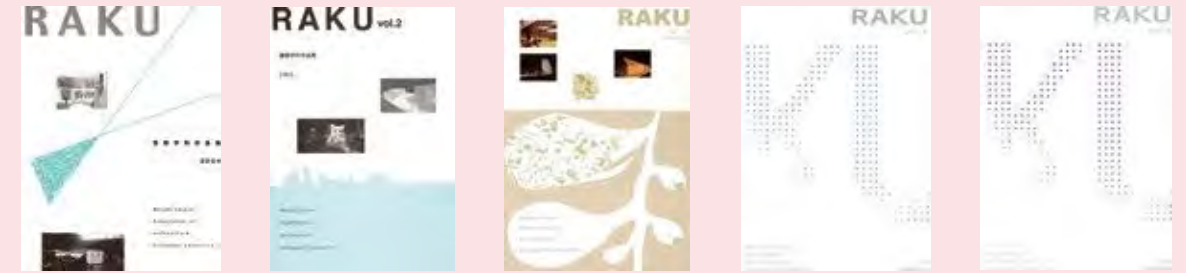
神奈川大学工学部建築学科・大学院工学研究科建築学専攻 沿革

- 1928 米田吉盛が「横浜学院」創設(旧横浜市中区桜木町)
- 1929 専門学校令により「横浜専門学校」設立認可
- 1930 六角橋に移転、横浜キャンパス開設(5月15日 創立記念日)
- 1949 学制改革により「神奈川大学」設置
- 1952 神奈川大学整備拡張計画(設計:山口文象/RIA)
- 1965 神奈川大学工学部建築学科創設(初代学科長:谷口忠教授、定員80名)、
8号館(建築学科研究室、製図室)竣工
- 1967 12号館(建築学科総合実験棟)竣工
- 1971 大学院工学研究科建築学専攻修士課程設置
- 1973 かなな会(建築学科同窓会)設立
- 1982 同济大学(中国)、武漢理工大学(中国)と学術交流協定を締結
- 1985 建築学科創設20周年記念誌発刊
- 1990 大学院工学研究科建築学専攻博士課程設置
- 1994 建築学科にシステムコースとデザインコースの2コース制導入
- 1998 横浜キャンパス再開発開始(2002年完了)
- 2002 成均館大学校(韓国)と学術交流協定を締結
- 2003 RAKU(デザインコース年鑑)vol.1発刊
- 2005 国立台湾科技大学(台湾)と学術交流協定を締結
- 2006 建築学科に建築環境コース、建築構造コース、建築デザインコースの3コース制導入
第1回東アジア大学建築学術交流セミナー(以後毎年開催)
日本建築学会120周年記念大会を神奈川大学で開催
- 2008 神奈川大学創立80周年、「学校法人神奈川大学将来構想」公表
- 2010 デンマーク王立芸術アカデミー建築大学(デンマーク)と学術交流協定を締結、交換留学(部局間)開始
- 2013 国立台湾科技大学(台湾)と交換留学(部局間)開始
- 2013 国立モンペリエ高等建築学校(フランス)と学術交流協定を締結、交換留学(部局間)開始
- 2015 建築学科創設50周年



8号館

RAKUバックナンバー



vol.1

vol.2

vol.3

vol.4

vol.5



vol.6

「室伏次郎研究室」

vol.7

「白濱謙一先生 追悼特集」

vol.8

「山口文象/RIAの神奈川大学総合計画」

vol.9

「大学との連携による六角橋商店街のまちづくり」



vol.10

「東アジア建築都市学術交流セミナー」



vol.11

「西和夫先生 追悼特集」

RAKUは、神奈川大学工学部建築学科建築デザインコースで2005年から発行しています。第6号以降は毎月多彩なテーマの特集を組み、単なる学生作品紹介誌を超えた建築誌としても楽しめるように企画しています。今号からは新たに学外から編集者の長島明夫氏、デザイナーのqp氏を起用し、さらにパワーアップしました。読んで眺めてお楽しみ下さい。

(建築デザインコース主任 中井邦夫)

編集／高木弘之、大森美穂、金子燦太、中野聡太、神田貴之、
稲岡寛之、大岡晃、曳田百香、足立将博、木下優奈、三浦みづき、
日景千尋、亀岡貴彦、庄子利佳、佐藤滉子、石井佑果、原山雅也、
城間リカルド、浜崎隆一、紀冉、遊佐舜、西藏祥大、秋山晃士、
稲村一晃、田中啓介、季勇太

監修／中井邦夫、鄭一止、吉岡寛之
特集ページ編集／長島明夫
取材・編集協力／重村力
表紙写真／qp「8号館6階より下を見る」
デザイン／qp

「RAKU Vol.12」 発行／神奈川大学工学部建築学科建築デザインコース
発行日／2016年7月30日 [横浜キャンパス] 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

